松山市文化財調査報告書56

来住廃寺

—第19次調査—

1996

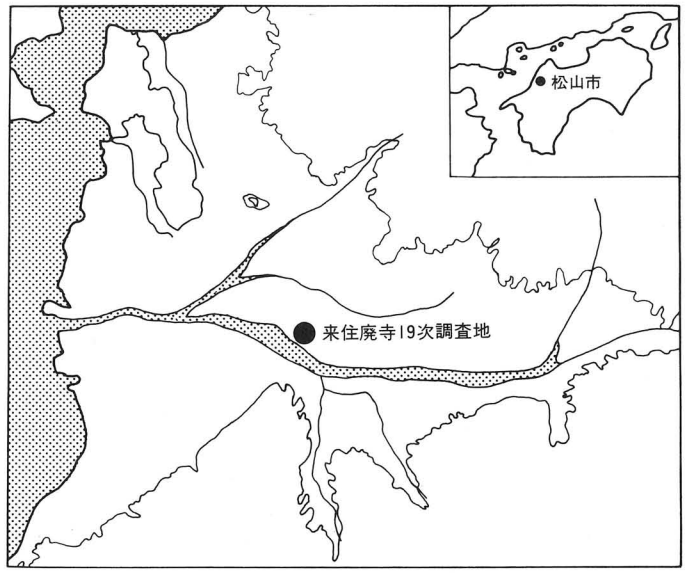
松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

来住廃寺

—第19次調査—



1996

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

巻頭図版１　調査地より来住廃寺を望む（西より）

序

松山市の南東部にある来住台地は、現在、平井谷に水源を発する堀越川と小野川に挟まれた地味の肥沃な農耕地となっています。この台地上における近年の継続的な発掘調査により検出された７世紀を中心とする諸遺構は、徐々にその全貌が明らかになりつつあります。

そのなかでも特に、国指定史跡来住廃寺跡の西隣に所在する「回廊状遺構」と呼ばれる遺構は、昭和62年度の北回廊部分を検出して以来、柱列が一辺約108mの方一町四方に並ぶことが確定的となっています。さらにその後の発掘調査により、回廊内部の北側中央部で「正殿的建物」の一部が検出されたことから、この回廊状遺構の性格についての論議が活発化してきました。

さて、本書は、平成４年度に行われた回廊状遺構の南面中央の「門」に相当する位置を含む、回廊状遺構内部の発掘調査報告書です。この位置において、南回廊部分を検出するとともに、その回廊に八脚門が付設されていることが明らかになりました。また回廊内部において、南北10間、東西11間のＬ字形に折れ曲がる柵列を検出しています。

本書の刊行にあたり、当遺跡の発掘調査についてご指導・ご協力を頂きました関係者各位、ならびに関係機関に厚くお礼申し上げますとともに、今後とも埋蔵文化財の発掘調査に関して、より一層のご協力をお願い申し上げます。

さらに本書が、松山市民をはじめ多くの方々に、埋蔵文化財に対する理解向上と調査研究のために、ご活用いただければ幸いです。

平成８年６月20日

財団法人 松山市生涯学習振興財団
理事長　田 中 誠 一

例　言

1．本書は、松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター及び財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成４年４月～平成５年１月に松山市来住町833・844・845番地内で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．遺構の実測は、西尾幸則の責任のもと、水本完児、小笠原善治が中心に行った。遺構の撮影は、西尾幸則、大西朋子が行った。

3．遺構は、呼称を略号で記述した。柵列：ＳＡ、掘立柱建物址：掘立、土坑：ＳＫ、溝：ＳＤ、柱穴：ＳＰ、性格不明遺構：ＳＸである。

4．遺物の実測及び掲載図の製図は、西尾幸則の指示のもと、宮内慎一、水本完児を中心に志賀夏行、岡本邦栄、森田利恵、中村紫、生鷹真弓、古角優子他が行った。なお、石器の実測は加島次郎が行った。

5．掲載の遺構図・遺物図は、各スケール下に縮尺を表記した。

6．本書に使用した方位は、すべて真北である。

7．写真図版は、調査担当者の指示のもと、遺物の撮影は大西朋子が担当し、図版作成は担当者と協議のうえ大西朋子が行った。

8．本書の執筆は、宮内慎一、水本完児が行い、西尾幸則、橋本雄一両氏の助言を得た。浄書は白石公信の協力を得た。

9．編集は宮内慎一が担当し、校正においては水本完児の協力を得た。

10．本報告書にかかわる遺物・記録物は、松山市立埋蔵文化財センターで保管・収蔵している。

本 文 目 次

第Ⅰ章　はじめに
1．調査に至る経過……1
2．組　織……1

第Ⅱ章　遺跡の概要
1．地理的環境……2
2．歴史的環境……3

第Ⅲ章　調査の概要
1．調査の経過……6
2．層　位……6
3．遺構と遺物……19
〔1〕古代の遺構と遺物……19
(1)　回廊状遺構・門……19
(2)　柵　列……25
(3)　掘立柱建物址……26
(4)　性格不明遺構……30
(5)　溝……38
(6)　土　坑……38
(7)　その他の遺構と遺物……39
〔2〕古墳時代の遺構と遺物……39
(1)　土　坑……39
(2)　溝……42
〔3〕弥生時代の遺構と遺物……42
(1)　土　坑……43
(2)　その他の遺構と遺物……50
〔4〕時期不明の遺構と遺物……52
4．結　び……53

第Ⅳ章　調査の成果と課題……72

挿図目次

第１図　松山平野の地質図……2
第２図　来住・久米地区の主要遺跡分布図　（縮尺　１：50,000）……4
第３図　調査地位置図　（縮尺　１：1,500）……7
第４図　調査地測量図　（縮尺　１：400）……8
第５図　北壁土層図　（縮尺　１：40）……9
第６図　東壁土層図　（縮尺　１：40）……11
第７図　南壁土層図　（縮尺　１：40）……13
第８図　西壁土層図　（縮尺　１：40）……15
第９図　遺構配置図　（縮尺　１：200）……17
第10図　門測量図　（縮尺　１：100）……20
第11図　回廊状遺構・門出土遺物実測図　（縮尺　１：３、１：４）……20
第12図　回廊状遺構測量図　（縮尺　１：80）……21
第13図　柵列ＳＡ１測量図　（縮尺　１：100）……23
第14図　柵列ＳＡ２測量図　（縮尺　１：100）……25
第15図　掘立１測量図　（縮尺　１：100）……26
第16図　掘立２・掘立３測量図　（縮尺　１：100）……27
第17図　掘立１出土遺物実測図　（縮尺　１：４、１：３）……29
第18図　掘立２出土遺物実測図　（縮尺　１：３）……30
第19図　ＳＸ１測量図　（縮尺　１：100）……31
第20図　ＳＸ１出土遺物実測図(1)　（縮尺　１：３、１：６）……32
第21図　ＳＸ１出土遺物実測図(2)　（縮尺　１：６）……33
第22図　ＳＸ１出土遺物実測図(3)　（縮尺　１：６）……34
第23図　ＳＸ１出土遺物実測図(4)　（縮尺　１：６）……35
第24図　ＳＸ１出土遺物実測図(5)　（縮尺　１：６）……36
第25図　ＳＸ１出土遺物実測図(6)　（縮尺　１：３、１：４）……37
第26図　包含層（古代）出土遺物実測図　（縮尺　１：３）……39
第27図　ＳＫ19測量図　（縮尺　１：40）……40
第28図　ＳＫ19出土遺物実測図　（縮尺　１：３、１：４）……41
第29図　ＳＫ22測量図・出土遺物実測図　（縮尺　１：40、１：３）……42
第30図　ＳＫ２測量図　（縮尺　１：40）……43
第31図　ＳＫ２出土遺物実測図　（縮尺　１：４）……44
第32図　ＳＫ６・ＳＫ７・ＳＫ８測量図　（縮尺　１：40）……45
第33図　ＳＫ６・ＳＫ８出土遺物実測図　（縮尺　１：４）……45
第34図　ＳＫ10・ＳＫ11測量図　（縮尺　１：40）……46
第35図　ＳＫ12・14・18測量図　（縮尺　１：40）……47
第36図　ＳＫ10～14出土遺物実測図　（縮尺　１：４）……48

第37図　ＳＫ18出土遺物実測図　（縮尺　１：４）……49
第38図　ピット出土遺物実測図　（縮尺　１：４）……50
第39図　包含層（弥生時代）出土遺物実測図　（縮尺　１：４）……51
第40図　ＳＫ32出土遺物実測図　（縮尺　１：３）……52
第41図　包含層出土遺物実測図　（縮尺　２：３）……53

表目次

表１　調査区一覧……6
表２　回廊状遺構柱穴（外側）一覧……57
表３　回廊状遺構柱穴（内側）一覧……57
表４　回廊状遺構柱穴間隔一覧……58
表５　回廊状遺構外側柱穴ー内側柱穴間隔一覧……58
表６　門柱穴一覧……59
表７　ＳＡ１柱穴一覧……59
表８　ＳＡ１柱穴間隔一覧……60
表９　ＳＡ２柱穴一覧……60
表10　掘立柱建物址一覧……61
表11　土坑一覧……61
表12　溝一覧……63
表13　回廊状遺構・門出土遺物観察表（土製品）……63
表14　掘立１出土遺物観察表（土製品）……64
表15　掘立１出土遺物観察表（瓦製品）……64
表16　掘立２出土遺物観察表（土製品）……64
表17　掘立２出土遺物観察表（瓦製品）……64
表18　ＳＸ１出土遺物観察表（瓦製品）……65
表19　ＳＸ１出土遺物観察表（土製品）……65
表20　包含層（古代）出土遺物観察表（土製品）……66
表21　ＳＫ19出土遺物観察表（土製品）……66
表22　ＳＫ22出土遺物観察表（土製品）……67
表23　ＳＫ２出土遺物観察表（土製品）……67
表24　ＳＫ６・ＳＫ８出土遺物観察表（土製品）……68
表25　ＳＫ10～14出土遺物観察表（土製品）……68
表26　ＳＫ18出土遺物観察表（土製品）……69
表27　ピット出土遺物観察表（土製品）……69
表28　包含層（弥生）出土遺物観察表（土製品）……70
表29　ＳＫ32出土遺物観察表（土製品）……70
表30　包含層出土遺物観察表（石製品）……71

図版目次

巻頭図版１　調査地より来住廃寺を望む（西より）

図版１　1.調査前全景（南西より）　2.西壁土層（南東より）

図版２　1.遺構検出状況①（南東より）　2.遺構検出状況②（東より）

図版３　1.遺構検出状況③（北東より）　2.回廊状遺構検出状況①（南より）

図版４　1.回廊状遺構検出状況②（西より）　2.回廊状遺構検出状況③（西より）

図版５　1.門検出状況（南より）　2.柵列ＳＡ１検出状況（南より）

図版６　1.柵列ＳＡ２・掘立３検出状況（北西より）　2.掘立１・掘立２検出状況（北東より）

図版７　1.掘立１(ＳＰ67)遺物出土状況（西より）　2.掘立１(ＳＰ７)遺物出土状況（南より）

図版８　1.掘立２(ＳＰ99)遺物出土状況（南西より）　2.ＳＸ１検出状況（北東より）

図版９　1.ＳＸ１遺物出土状況①（南西より）　2.ＳＸ１遺物出土状況②（北より）

図版10　1.ＳＸ１遺物出土状況③（東より）　2.ＳＤ１～４・ＳＫ18・ＳＫ19検出状況（西より）

図版11　1.ＳＫ19遺物出土状況①（南東より）　2.ＳＫ19遺物出土状況②（南東より）

図版12　1.ＳＫ２検出状況（南より）　2.ＳＫ８検出状況（北より）

図版13　1.ＳＫ２遺物出土状況（南より）　2.ＳＫ18遺物出土状況（南より）

図版14　1.回廊状遺構出土遺物（１・２・４・５）門出土遺物（３・６・７）　2.掘立１出土遺物①

図版15　1.掘立１出土遺物②（17・18）掘立２出土遺物（19～21）

図版16　1.ＳＸ１出土遺物①

図版17　1.ＳＸ１出土遺物②

図版18　1.ＳＸ１出土遺物③

図版19　1.ＳＸ１出土遺物④

図版20　1.ＳＸ１出土遺物⑤

図版21　1.ＳＸ１出土遺物⑥（34～39・44）ＳＫ19出土遺物（58・60・61）
ＳＫ22出土遺物（72）

図版22　1.ＳＫ２出土遺物（73～75）ＳＫ６出土遺物（77・78）

図版23　1.ＳＫ８出土遺物（79・81）ＳＫ10出土遺物（82・83）ＳＫ11出土遺物（84）
ＳＫ13出土遺物（88）ＳＫ14出土遺物（89）

図版24　1.ＳＫ18出土遺物

図版25　1.ＳＰ82出土遺物（98・100）ＳＰ155出土遺物（101・102）
包含層出土遺物①（108～110・114・117）ＳＫ32出土遺物（122・123）

図版26　1.包含層出土遺物②

第Ⅰ章　はじめに

1．調査に至る経過

1990（平成２）年７月、三好鉄己氏より松山市来住町833・844・845番地内における専用住宅建設にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『No.127　来住廃寺跡』内にあたり、周知の遺跡として知られている。当地は松山城の南東約4.5km、洪積台地からなる来住舌状台地西端近くに立地する。来住台地一帯は、来住廃寺を含め古代久米郡の政治的中枢地域として注目される地域である。

これまでの調査で、来住廃寺に先行する建物と考えられる回廊状遺構の存在が確認されている。とりわけ回廊状遺構の南面は、昭和53年度の第３次調査において南東部、昭和63年の第７次調査において、南西コーナーが確認されており、当地はそれらの延長線上に位置する。特に、７次調査地の一部が今回の申請地と重複していることや試掘調査の結果などから、遺跡の存在は確実視された。

この結果を受け、申請者と文化教育課の二者は遺跡の取り扱いについて協議を行い、住宅建設により失われる遺構・遺物に対し、記録保存のため発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は国指定史跡「来住廃寺」に関する寺域確認及び、回廊状遺構の確認を主目的とし、㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、申請者の協力のもと1992（平成４）年４月７日に開始した。

2．組　織

(1)　調査組織

調 査 地　松山市来住町833・844・845番地

遺 跡 名　来住廃寺19次調査地

調査期間　1992（平成４）年４月７日～1993（平成５）年１月31日

調査面積　1,863.95m²

調査協力　三好　鉄己

調査担当　西尾　幸則〔現　松山市教育委員会文化教育課　主幹補兼文化第２係長〕
水本　完児
小笠原善治

(2)　刊行組織〔平成８年６月20日　現在〕

松山市教育委員会	教育長	池田尚郷
生涯教育部	部長	渡辺和彦
	次長	三好俊彦
文化教育課	課長	松平泰定

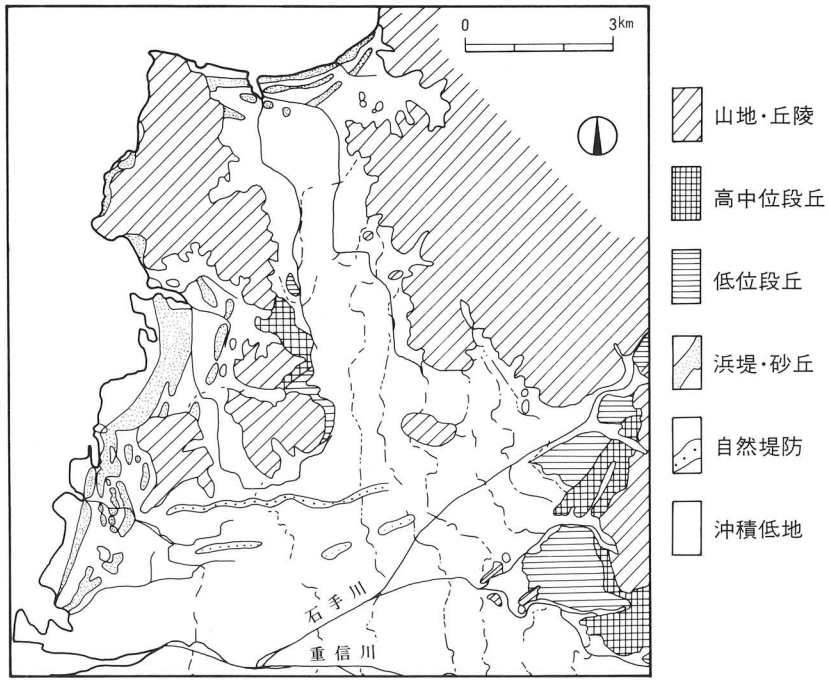
㈶松山市生涯学習振興財団　理事長　田中誠一
事務局長　池田秀雄
事務局次長　丹下正勝
埋蔵文化財センター　所長　河口雄三
次長　田所延行
調査係長　田城武志
調査主任　栗田正芳　（文化教育課職員）

第II章　遺跡の概要

1．地理的環境（第1図）

松山平野は伊予灘と燧灘とに挟まれた高縄半島の南西部に位置する。この平野は、石手川と重信川という二大河川の解析活動により形成された沖積平野である。2つの河川は高縄山地と石鎚山に水源を発し、解析谷を形成しながら平野部へ流れ出し、扇状地を形成する。本遺跡が所在する松山市来住町周辺には小野川、川付川、前川、内川などの大小河川が流れている。そのうち、小野川は平井谷に水源を発し、平井町付近で扇状地を形成しながら、やがて石手川に合流する。この台地の北辺を平井谷に水源を発する堀越川が流れ、南辺を流れる小野川と合流する。この二河川に挟まれた地域は舌状に形成されていることから、来住舌状台地とも呼ばれている。

地質学的には、段丘堆積物で形成される洪積台地に、小野川から流れ出た扇状地堆積物が覆いかぶさるような格好で、本台地は形成されている。



第1図　松山平野の地質図

2．歴史的環境（第２図）

松山平野西部を流れる小野川と堀越川に挟まれた洪積台地は来住舌状台地と呼ばれている。この台地上には国指定史跡の来住廃寺跡の他、縄文時代から中世に至る遺跡が近年、多数発見されている。

旧石器時代

当地域における旧石器時代の遺物は、ナイフ形石器などが数点検出されているが、遺構に伴うものではなく、当時の社会環境などの復元には至っていない。

縄文時代

縄文時代の遺跡は後期から晩期に限られる。後期では久米窪田森元遺跡〔栗田茂敏　1989〕の土坑から後期後葉の土器群が出土しており、この時期の資料としては貴重なものといえる。晩期では台地南西部の南久米片廻り遺跡２次調査〔松村　淳　1991〕において、晩期後葉の土器が検出されている。松山平野北部の大淵遺跡出土資料に後続する段階のものとして考えられている。

弥生時代

前期：久米高畑遺跡５・９次調査〔宮崎泰好　1989・池田　学　1991〕では前期前半の土器が出土している。後半には検出遺構が増加し、前述の久米高畑遺跡９次調査検出の竪穴式住居址からは前期末の土器が出土しているほか、来住Ｖ遺跡〔吉本　拡　1981〕では、環濠状遺構が検出されている。

中期：久米窪田遺跡では竪穴式住居址や土坑・土壙墓など前葉までの資料が検出され、台地西方にまで集落の広がりがうかがわれる。後半になると、古屋敷Ｃ遺跡〔梅木謙一　1992〕では、Ｌ字状に屈曲する溝が検出され、溝内から中期後半から後期初頭の土器が集中して出土している。また、来住廃寺遺跡15次調査〔西尾幸則　1993〕では完形の土器が多数出土するなど、集落構造解明や土器編年研究において充実をみせている。

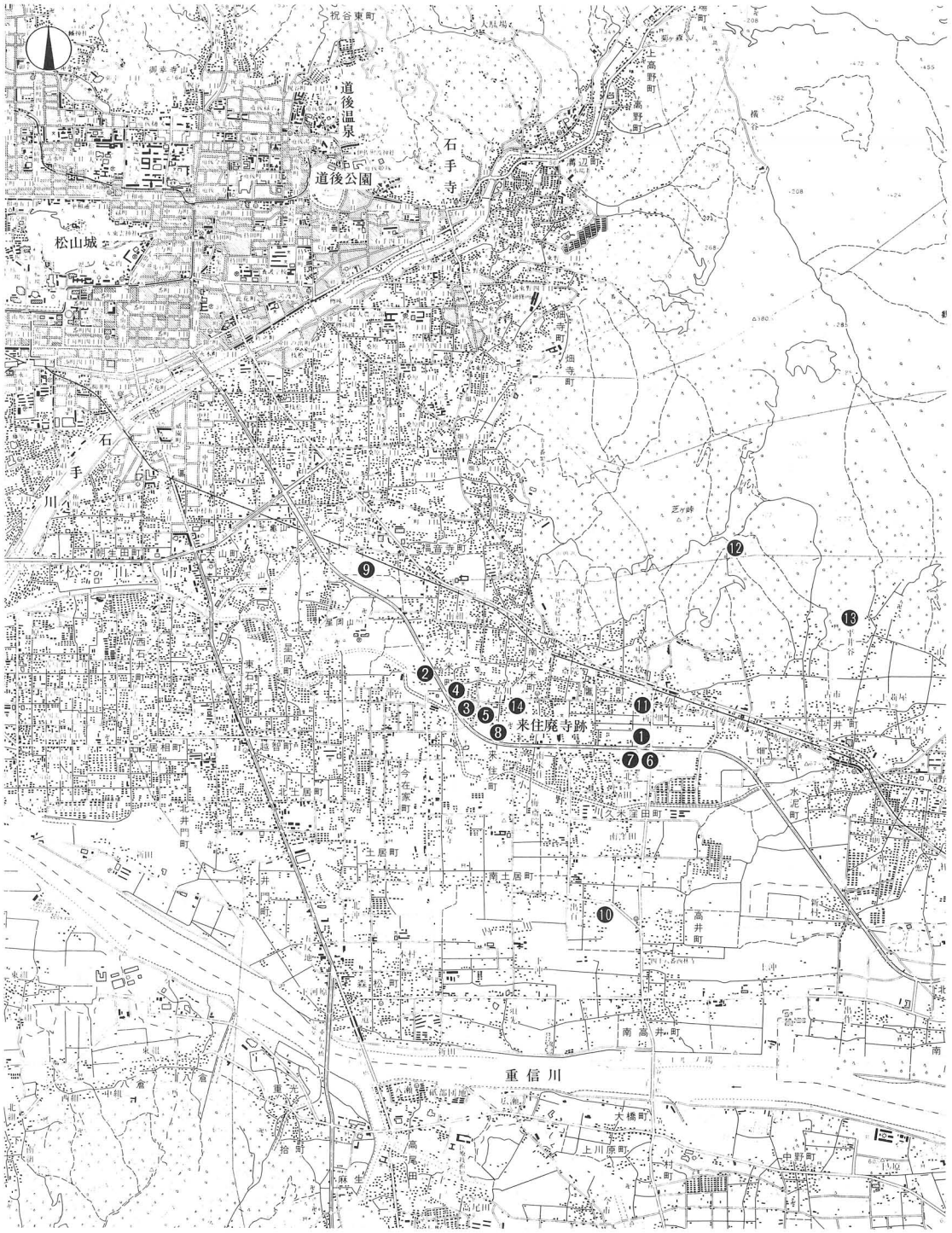
後期：来住遺跡〔小笠原好彦　1979〕では、竪穴式住居址や土坑・土壙墓が確認されているほか、福音小学校構内遺跡〔梅木謙一・武正良浩　1995〕においても大規模な集落が確認されている。

このように、当地域は弥生時代を通して集落が継続的に営まれていたことが推測される。

古墳時代

来住台地周辺には後期古墳が集中して存在する。平野部では二ツ塚古墳や波賀部神社古墳、タンチ山古墳などの大規模な前方後円墳が出現する。丘陵部においては、近年、かいなご古墳や平井谷古墳１号墳〔田城武志　1992〕などの発掘調査が行われ、集落とのつながりを考えるうえで貴重な資料が揃いつつある。

集落：台地の西側で検出事例が多い。久米高畑遺跡５次調査では、中期末の竪穴式住居址が検出されているほか、後期では来住廃寺17次調査において７世紀前半頃の竪穴式住居址を確認している。



1 久米窪田森元遺跡
2 南久米片廻り遺跡(2次)
3 久米高畑遺跡(5次)
4 久米高畑遺跡(7次)
5 久米高畑遺跡(9次)
6 来住V遺跡
7 古屋敷C遺跡
8 来住廃寺(15次)
9 福音小学校構内遺跡
10 波賀部神社古墳
11 タンチ山古墳
12 かいなご古墳
13 平井谷1号墳
14 来住廃寺(17次)

第2図　来住・久米地区の主要遺跡分布図(S＝1:50,000)

古　代

久米高畑遺跡７次調査〔西尾幸則　1989〕では「久米評」線刻の須恵器が出土し、７世紀中葉まで遡る可能性が高い「久米評衙」の存在が確実視されている。また、約109～110m四方（方一町）規模の区画溝で囲まれた「回廊状遺構」が存在する。７世紀後半の斉明天皇の「石湯行宮」に比定する説も有力である〔松原弘宣　1991〕。なお、回廊状遺構は白鳳期の寺院である「来住廃寺」に先行するものと考えられている。これらのことから来住廃寺跡を含め来住台地一帯は古代久米郡の中心地であったことがうかがわれる。

中　世

鷹ノ子遺跡〔宮本一夫　1989〕では、地境の溝などが確認されるなど、近年調査事例が増加しつつある。特に土器研究においては関心が高まっており、来住台地の中世資料は大いに注目されるものとなった。

【文献】

栗田　茂敏　1989　「久米窪田森元遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会

松村　　淳　1991　「南久米片廻り遺跡２次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報III』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

安崎　泰好　1989　「久米高畑遺跡５次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会

池田　　学　1991　「久米高畑遺跡９次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報III』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

吉本　　拡　1981　「来住Ｖ遺跡」『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告II』愛媛県教育委員会・㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

梅木　謙一　1992　「久米窪田古屋敷Ｃ遺跡」『来住・久米地区の遺跡』㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

西尾　幸則　1993　『来住廃寺遺跡第15次調査報告書』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

小笠原好彦　1979　『来住廃寺』松山市教育委員会

梅木　謙一
武正　良浩　1995　『福音小学校構内遺跡―弥生時代編―』㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

森　　光晴　1986　「波賀部神社古墳」「二ツ塚古墳」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編纂委員会

田城　武志　1992　「平井谷１号墳」『松山市埋蔵文化財調査年報IV』㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

西尾　幸則　1989　「久米高畑遺跡７次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会

松原　弘宣　1991　「熱田津と古代伊予国～久米地域を中心に～」松山市考古館第１回講演会『熱田津と来住台地～７世紀における西瀬戸内海地域～』

宮本　一夫　1989　『鷹ノ子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室

第Ⅲ章　調 査 の 概 要

1．調査の経過（第３図）

1967（昭和42）年、大山正風氏により来住廃寺１次調査が行われて以来、現在までに数多くの寺域調査が実施されている。１次調査では来住廃寺の塔基壇が確認されている。２次調査以降、一辺約108m四方（方一町）規模の区画溝と、回廊状遺構を検出している。回廊状遺構は昭和52年度、２次調査にて東面回廊を、昭和53年度の３次調査では、東面回廊の延長と南東コーナー部分を検出した。昭和62年度、５次調査では北面回廊及び北西コーナーの一部を検出し、昭和63年度、７次調査では南東コーナー及び南面回廊の一部（本調査と重複）を検出した。

最近では、平成５年度、23次調査にて西面回廊の一部を検出している。この調査では、一部柱穴の建て替えが行われていることが判明している。また、区画溝についても回廊状遺構とともに検出されている。

調査は1992（平成４）年４月７日から1993（平成５）年１月31日までの約10カ月間を費やした。調査の進行上、調査地内を４つの地区に区分した。調査地の西半部を北から順に１・２・３区、東半部を４区と呼称した（第４図）。そのうち４区については国庫補助対象事業である。各調査区の調査面積や調査期間等は表１に記す。なお、各調査区において検出した遺構・遺物等が重複する場合があるため、本稿では各調査結果をまとめて、１遺跡の調査として報告を行う。

表１　調査区一覧

調査区名	１区	２区	３区	４区
事業名	民間	民間	民間	国庫補助
調査面積（m²）	207.06	245.02	218.12	440.36
調査期間	平成４年４月９日 ～同年９月30日	平成４年４月９日 ～同年９月30日	平成４年４月９日 ～同年９月30日	平成４年８月30日 ～平成５年１月31日

2．層　　位（第５～８図、図版１）

調査地は小野川右岸に開かれた来住舌状台地の西端付近、標高39m前後に立地する。調査以前は耕地整備された水田であった。調査対象面積は1,863.95m²であるが、排土置き場等のため実際の調査面積は1,110m²余りである。

基本層位は第Ⅰ層表土、第Ⅱ層茶褐色土、第Ⅲ層灰褐色土、第Ⅳ層暗灰褐色土、第Ⅴ層黄褐色土である。

第Ⅰ層　近現代の造成に伴う客土及び、水田耕作土である。地表下15～60cmまで開発が行われている。

第Ⅱ層　水田耕作に伴う床土である。厚さ５～15cmを測る。

第Ⅲ層　調査地北西隅、南西部及び南東部に検出された。部分的に検出された土層で厚さは５～10cm程度である。遺物は土師器・須恵器小片が少量出土している。門を構成する柱穴上

面には本層が覆う。

第Ⅳ層　調査地南西部のみに検出された。粘性の強い土壌で厚さ５～10cm程度を測る。遺物は弥生土器・土師器・須恵器などを包含する。

第Ⅴ層　ややシルト質の土壌である。調査地北東部や中央部付近では第Ⅰ層下に第Ⅴ層が検出された。本層上面は調査における遺構検出面である。本層上面の標高を測量すると調査区北西部が最も高く南東部に向けてわずかに緩傾斜をなす（比高差約10cm）。

第３図　調査地位置図

遺構はすべて第Ⅴ層上面での検出である(第９図)。回廊状遺構、門、柵列２基、掘立柱建物址３棟、溝７条、土坑45基、性格不明遺構１基、ピット659基(回廊、門、柵列、掘立柱建物柱穴を含む)他である。ただし、検出された遺構はその深さなどから判断すると、本来は第Ⅳ層以上の層から掘り込まれた可能性が高い。

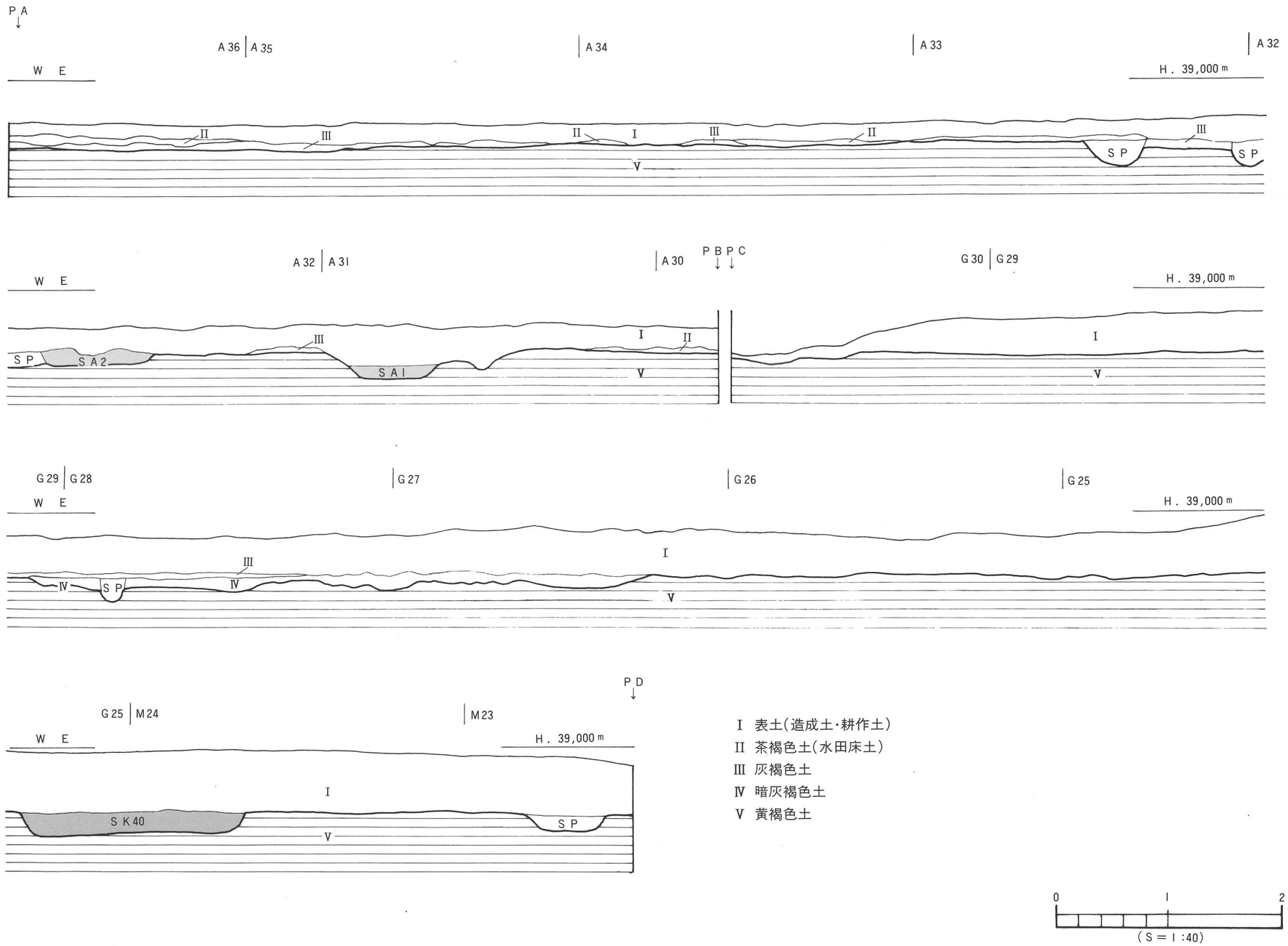
遺物は遺構内及び包含層中からの出土であり、弥生土器(前期末～後期)、土師器(古墳～中世)、須恵器(古墳～古代)、陶器(近世)、瓦(古代)のほか石庖丁・石鏃・石斧等である。

なお、調査に際して回廊状遺構をはじめとする主要な遺構については、基本的に半截するにとどめ全掘は行っていない。これは調査地内に予定されている住宅建設が、１m以上盛土されたうえで実施されることが調査以前から確認されていたため、遺構の保存という観点よりとられた方法である。ただし、遺物の出土が予想された土坑や溝に関してはほぼ全掘している。

また、調査に先立ち、調査区内を３m四方のグリットに分けた。これは、国家座標第Ⅳ座標系に基づく地区割りに準ずるものである。

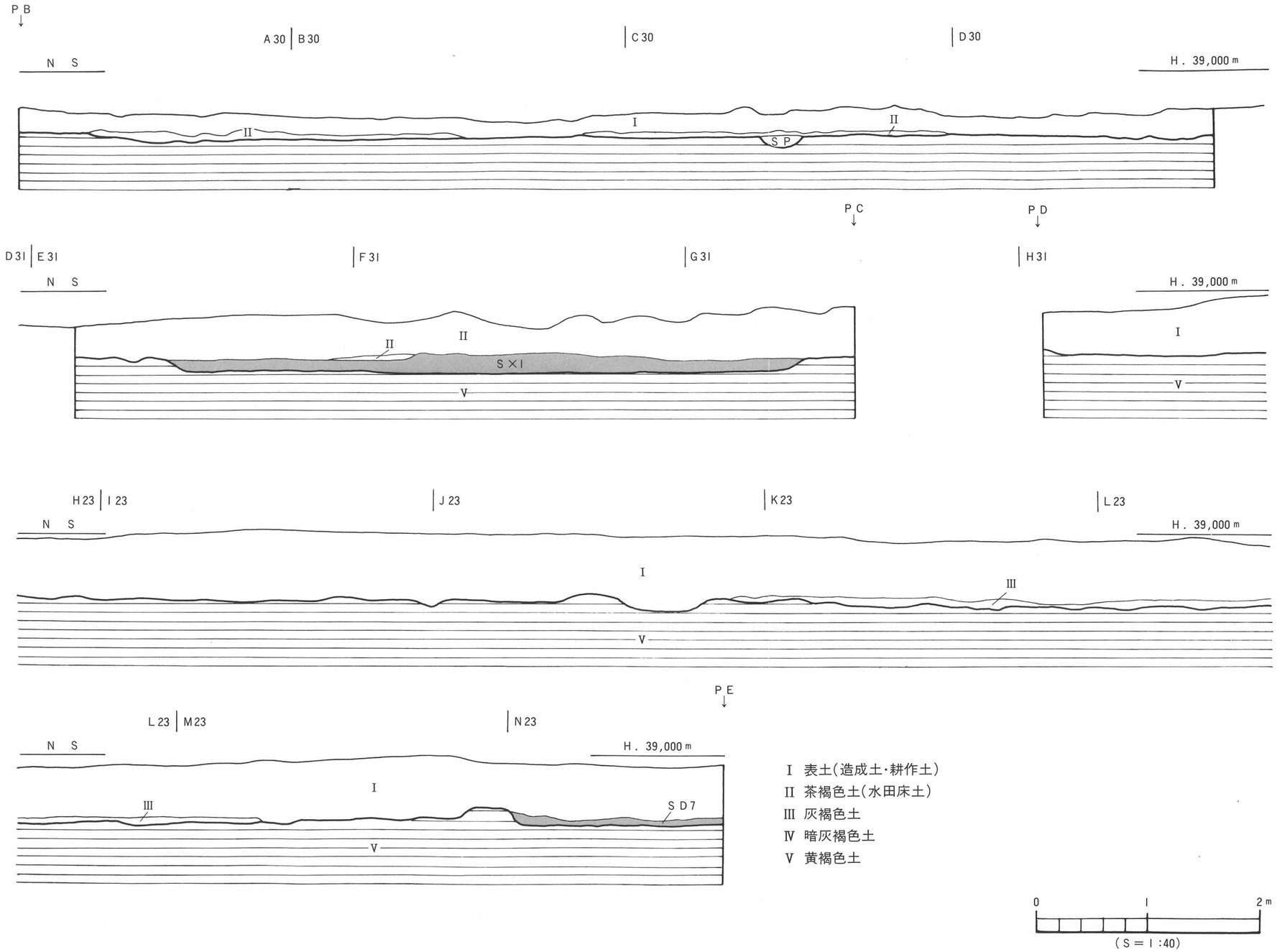
なお、土層図に記載されているポイントＰＡ～ＰＦは第９図にポイント位置を提示している。

第４図　調査地測量図

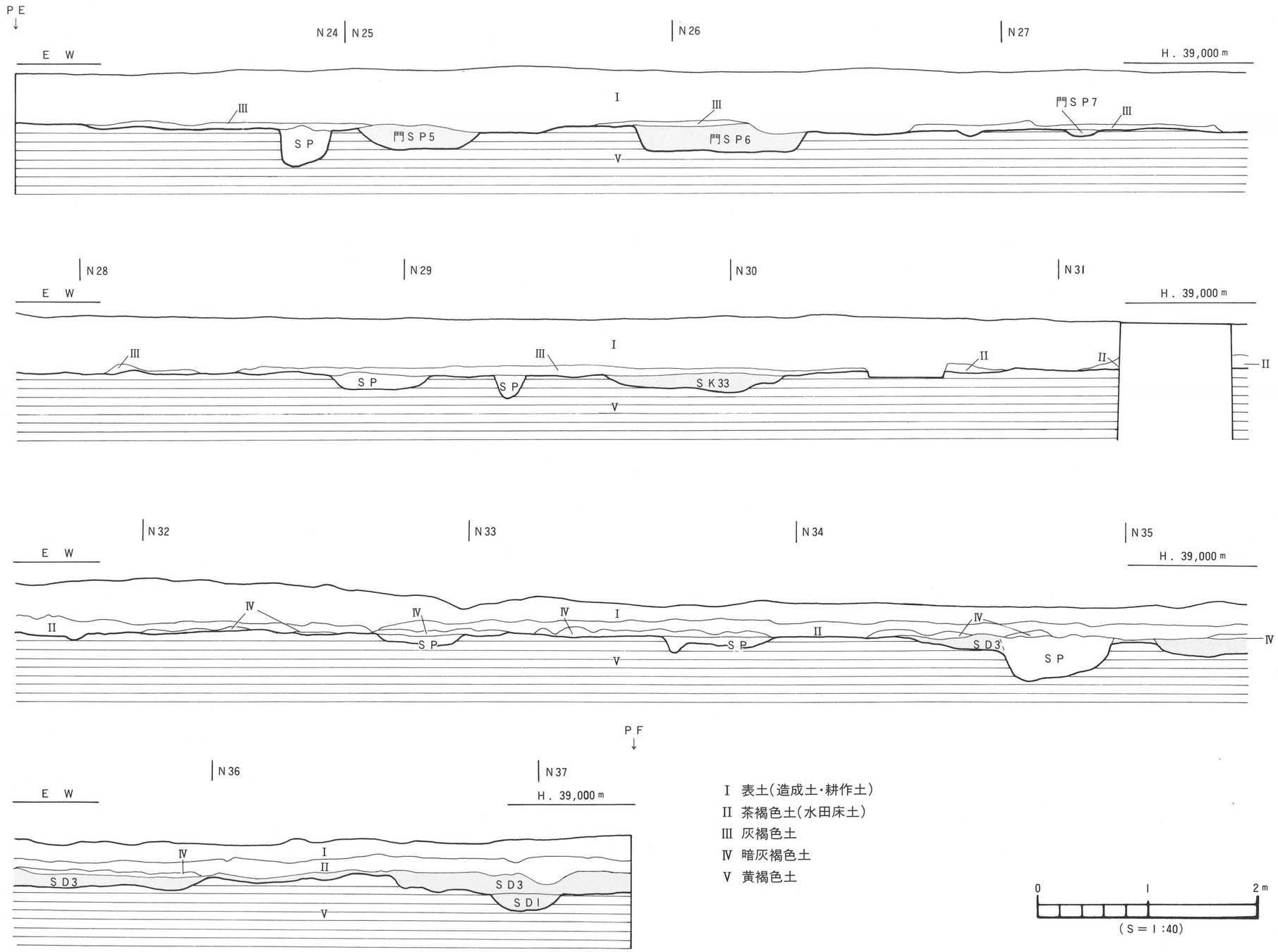


I 表土(造成土・耕作土)
II 茶褐色土(水田床土)
III 灰褐色土
IV 暗灰褐色土
V 黄褐色土

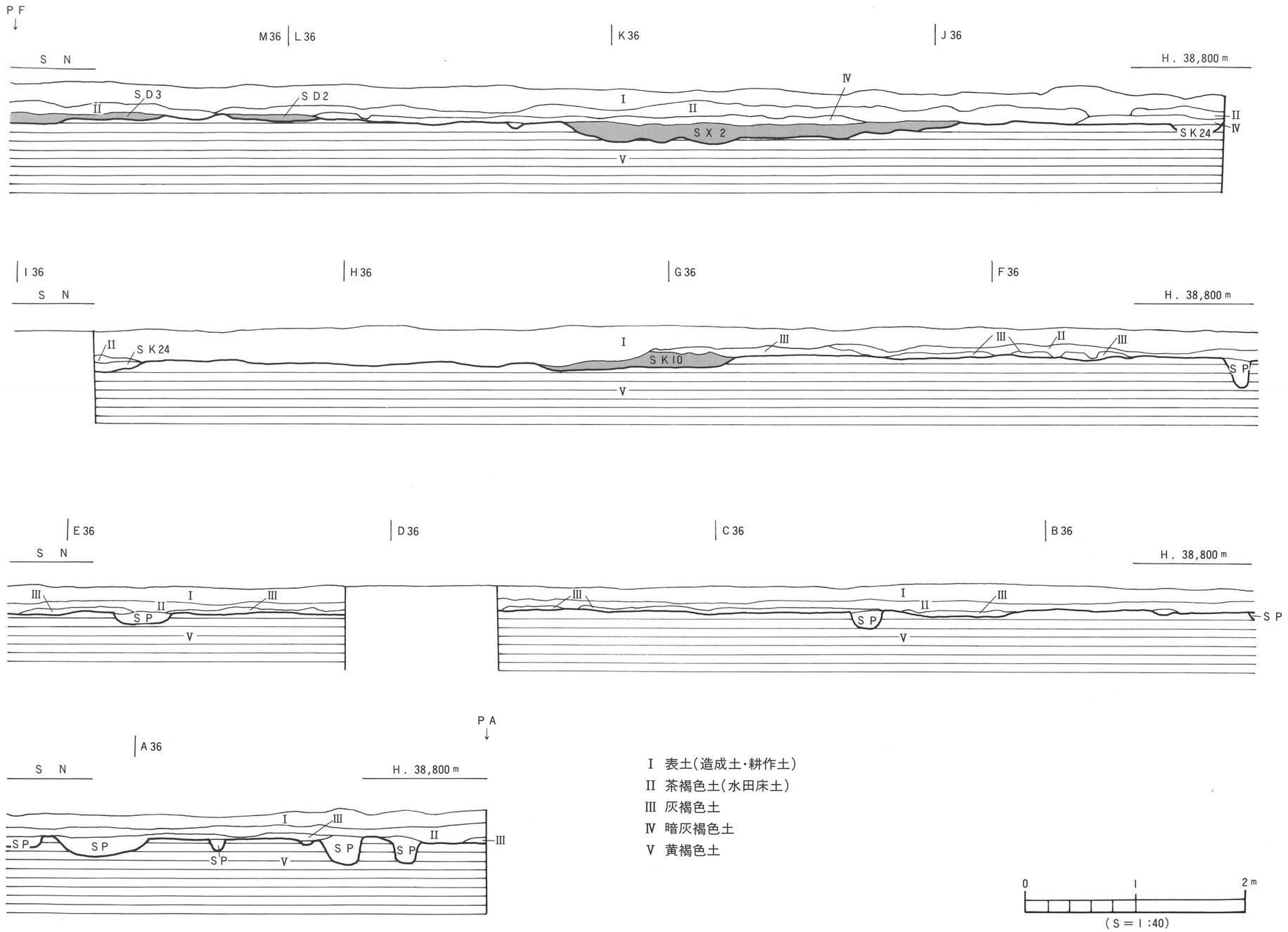
第5図 北 壁 土 層 図


P B
A 30
B 30
C 30
D 30
N S
H . 39,000 m
I
II
S P
P C
P D
D 31
E 31
F 31
G 31
H 31
S × 1
V
H 23
I 23
J 23
K 23
L 23
III
P E
L 23
M23
N 23
S D 7
I 表土(造成土・耕作土)
II 茶褐色土(水田床土)
III 灰褐色土
IV 暗灰褐色土
V 黄褐色土
0
1
2 m
(S = 1 :40)

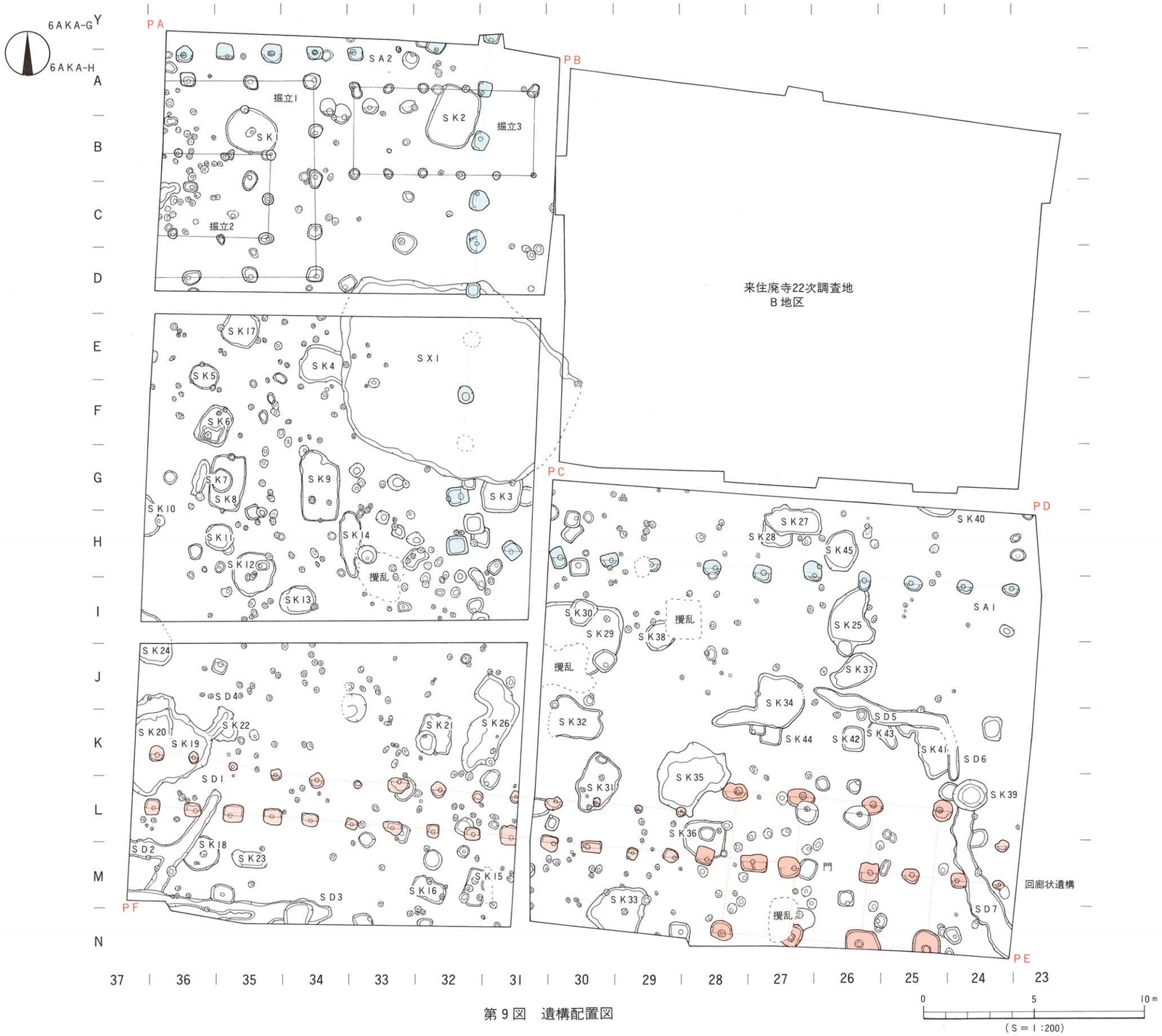
第6図　東 壁 土 層 図


P E
N 24
N 25
N 26
N 27
E W
H . 39,000 m
I
III
S P
門 S P 5
門 S P 6
門 S P 7
V
N 28
N 29
N 30
N 31
II
S K 33
N 32
N 33
N 34
N 35
IV
S D 3
P F
N 36
N 37
S D 1
I 表土(造成土・耕作土)
II 茶褐色土(水田床土)
III 灰褐色土
IV 暗灰褐色土
V 黄褐色土
0
1
2 m
(S = 1 :40)

第7図 南 壁 土 壁 図


PF
M36
L36
K36
J36
S N
H. 38,800 m
SD3
SD2
SX2
SK24
I36
H36
G36
F36
SK10
SP
E36
D36
C36
B36
A36
PA
I 表土(造成土・耕作土)
II 茶褐色土(水田床土)
III 灰褐色土
IV 暗灰褐色土
V 黄褐色土
0
1
2 m
(S = 1 :40)

第8図 西壁土層図


6AKA-G
6AKA-H
PA
PB
PC
PD
PE
PF
SA2
掘立1
SK1
SK2
掘立3
掘立2
来住廃寺22次調査地
B地区
SK17
SK4
SX1
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK3
SK10
SK11
SK14
SK12
撹乱
SK13
SK24
SD4
SK22
SK20
SK19
SK21
SK26
SD1
SK18
SK23
SD2
SK15
SK16
SD3
SK27
SK28
SK45
SK40
SK30
SK29
SK38
撹乱
SK25
SA1
SK37
SK34
SK32
SK44
SK42
SD5
SK43
SK41
SD6
SK31
SK35
SK39
SK36
門
回廊状遺構
SK33
撹乱
SD7
Y
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
37
36
35
34
33
32
31
30
29
28
27
26
25
24
23
0
5
10m
(S=1:200)

第9図　遺構配置図

3．遺構と遺物

〔1〕古代の遺構と遺物

本調査において検出された古代の遺構は、回廊状遺構、門、柵列、掘立柱建物址、性格不明遺構他である。すべて第Ⅴ層上面での検出である。

(1) 回廊状遺構・門

本調査において回廊状遺構（以下、回廊）の南面及びそれに付随する門を検出した。これまでの調査において回廊の南東コーナーは３次調査、南西コーナーは７次調査の際に確認されているが、今回これに続く13間分を検出した。

回廊（第12図、表２～５、図版３・４）

回廊は調査区南側Ｌ23～Ｌ37区に位置する。門より西側では外側柱列、内側柱列それぞれ13間分(柱穴14基）を検出し、門の東側からも回廊となる柱穴をそれぞれ１基ずつ検出している。

外側柱列は全長23.6m、内側柱列は全長約23.7mを測る。外側柱列については、各柱穴は方形～長方形プランを呈し、長さ0.56～0.96m、幅0.51～0.74m、深さは検出面下14～30cmを測る。柱痕は径17～24cm、深さ14～37cmを測る。柱穴埋土は、黒褐色土を基調とし、外側柱列柱穴15基のうち６基（ＳＰ２・３・５～７・10）は柱穴埋土下位にて黄色土が混入する。各柱穴間は最小で1.54m、最大で2.06mを測るが、1.8～1.9m前後のものが、そのうちの７割を占めている。

内側柱列については各柱穴は円形～楕円形プランを呈し、径0.32～1.0m、深さは検出面下13～24cmを測る。柱痕は径16～22cm、深さ14～27cmを測る。柱穴埋土は、外側柱列と同様に黒褐色土を基調とし、８基（ＳＰ４・７・８・10～12・14・15）は黄色土が混入する。各柱穴間は最小で1.62m、最大で1.98mを測る。

柱穴の並びについては外側柱列がほぼ一直線上になるのに対し、内側柱列は直線上からはずれるものがいくつかみられる。また外側柱列と内側柱列とを結んだ柱穴間の距離も最小で1.8m、最大で2.46mとかなり幅があり一定していない。加えて、外側柱穴から内側柱列の柱穴をみた場合、直交せず内側柱列の柱穴がやや方向を東へ振っているものが多い。回廊の方向は真北より約４°東に振っている。

遺物は内側柱列の柱穴内からは、土師器、須恵器片が出土したが、ほとんどが細片である。外側柱列の柱穴内からは弥生土器・土師器・須恵器片が出土しているが、弥生土器については流れ込みによるものであろう。小片ではあるが数点掲載した（第11図)。

門（第10図、表６、図版５）

調査区南東隅Ｌ24～Ｎ28区に位置する。建物南側は一部調査区外に続く。３×２間の建物址で規模は桁行長9.12m、梁行長6.4mを測る。各柱穴は、円形もしくは方形プランを呈し、長軸0.62～1.56m、短軸0.60～1.0m、深さは検出面下11～38cmを測る。柱痕径は20～42cm、深さ10～37cmを測る。

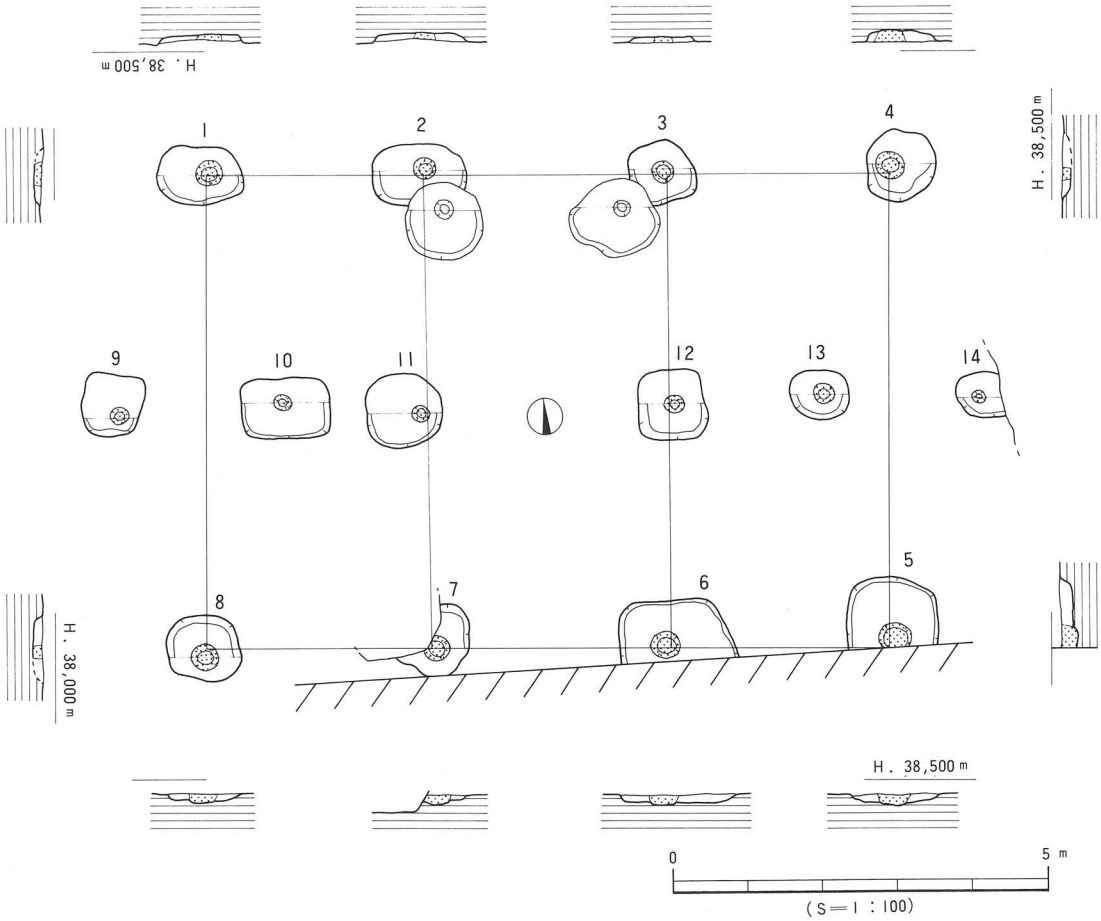
特に、門の中央部柱穴ＳＰ10～13の４基は他の柱穴が深さ11～19cmであるのに対して深さ30～38cmとなり掘り方が深くなっている。

また、門を構成する柱穴は柱掘り方及び柱痕共に、回廊を構成する柱穴に比べて一回り大きくなっていることに気づく。柱穴埋土は回廊の埋土とはわずかに異なり、暗褐色土を基調するが、ＳＰ２・９～11の４基は埋土下位に黄色土が混入するものである。門の方向も回廊と同様、真北より約４°東に振っている。

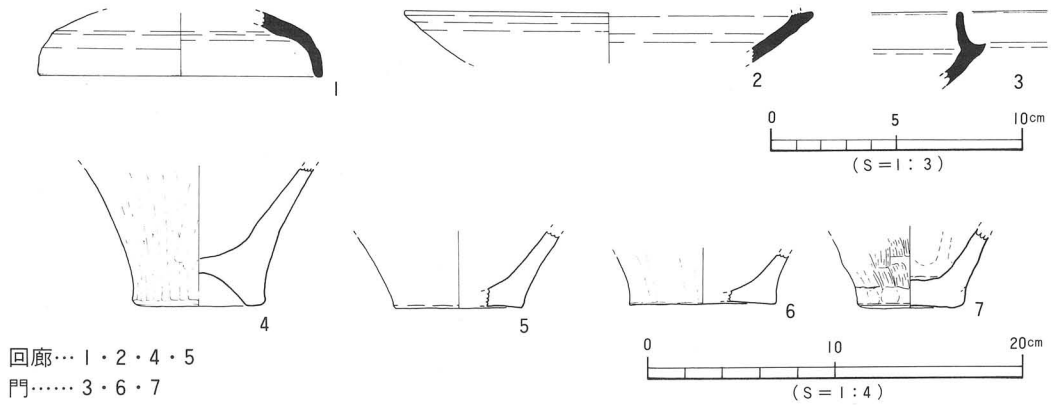
遺物は弥生土器・土師器・須恵器の小片が出土している。図化しうるものを第11図に掲載した。

出土遺物（第11図、図版14）

１・２・４・５は回廊出土品である。いずれも外側柱列の柱穴掘り方からの出土である。１・２・４はＳＰ１、５はＳＰ２出土品である。１は須恵器坏蓋である。口縁部小片でわずかに稜をもつ。２は須恵器坏身。たちあがりは欠損している。４は弥生土器の甕形土器の底部片である。上げ底を呈し、外面にヘラミガキ調整を施す。３・６・７は門出土品である。３はＳＰ12出土の須恵器坏身小片。たちあがりは内傾し、端部は丸く仕上げている。６・７はＳＰ２出土の弥生土器の底部である。

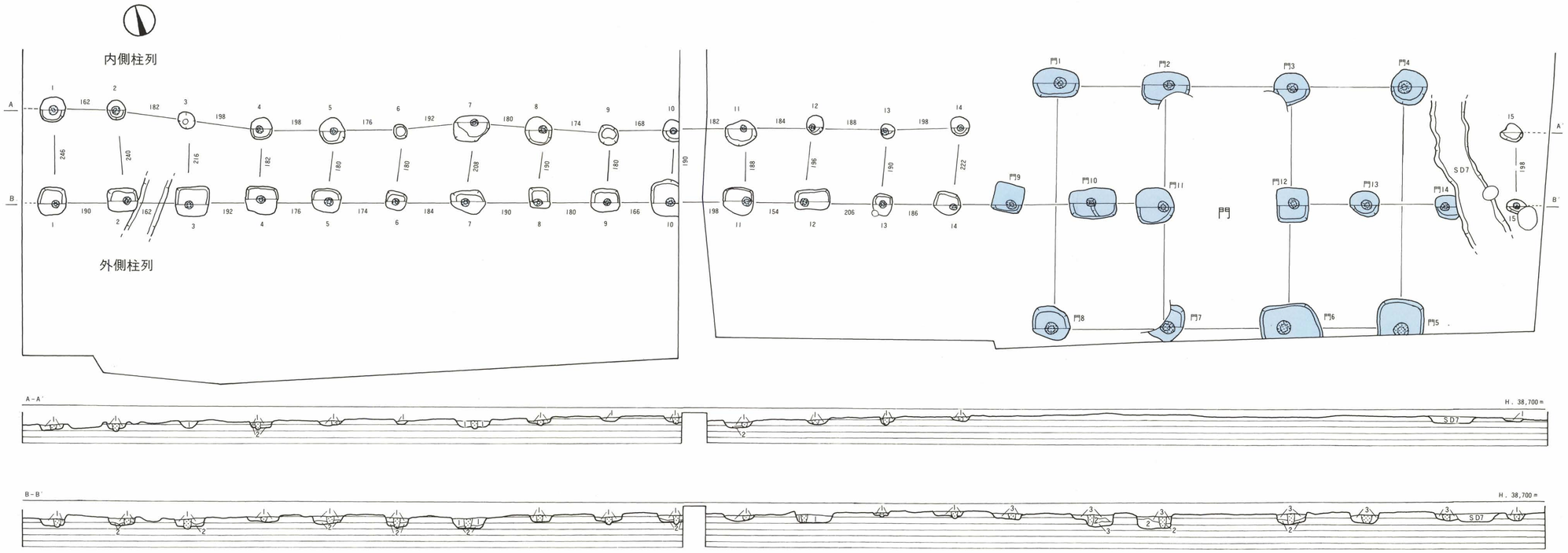


第10図　門　測量図



回廊…１・２・４・５
門……３・６・７

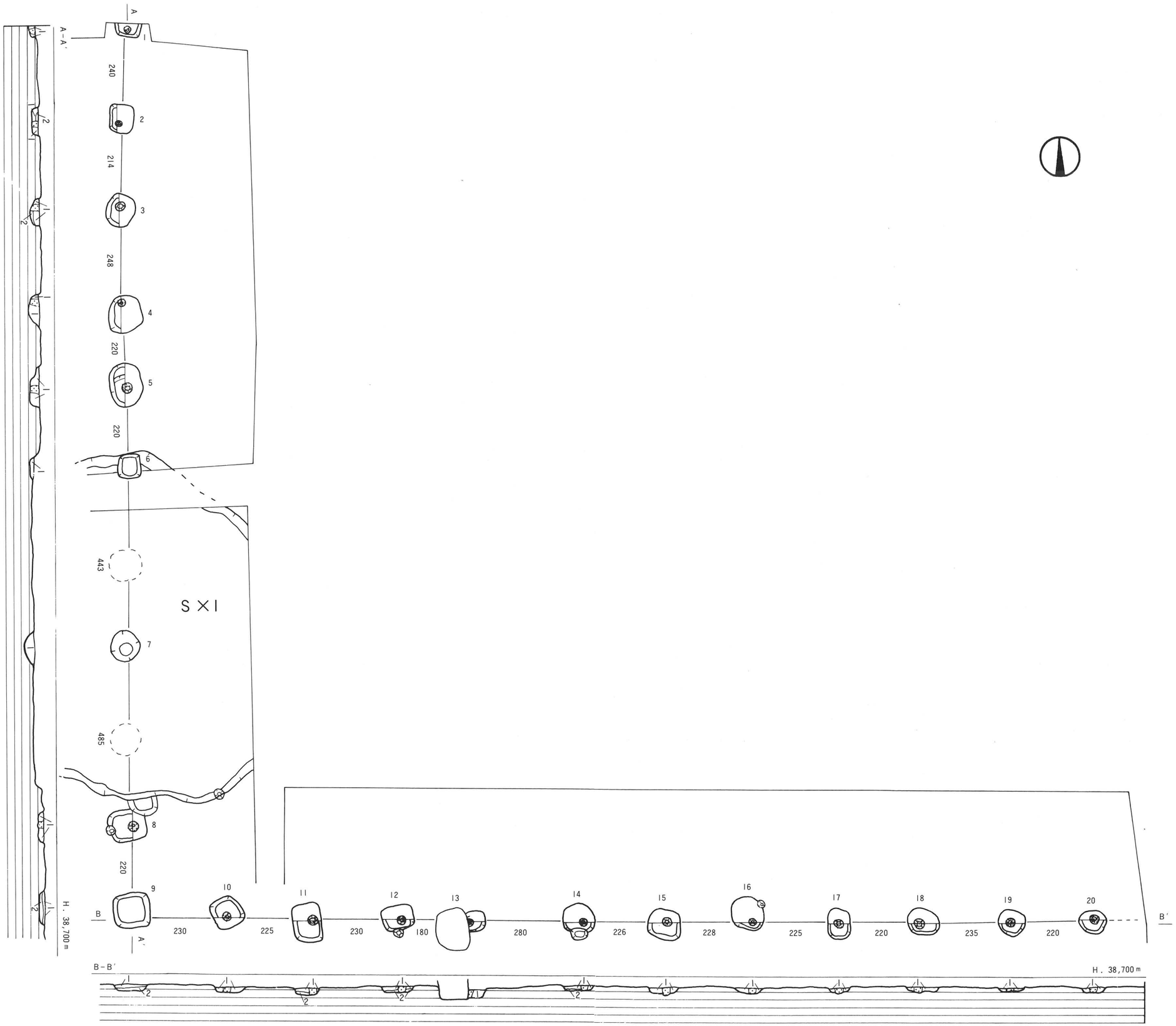
第11図　回廊状遺構・門出土遺物実測図



1 黒褐色土
2 黄色土
3 暗褐色土

0 5m
(S=1:80)

第12図　回廊状遺構測量図



1 暗灰褐色土
2 黄色土

第13図　柵列ＳＡＩ 測量図

0　5m
（S＝1：100）

時期：小片ではあるが、回廊及び門を構成する柱穴内から須恵器坏蓋や坏身片が出土した。この種の遺物は現在、絶対年代の特定は難しいが、概ね７世紀以降は下らない。回廊及び門はこれまでの調査成果と同様に来住廃寺創建以前の建物と考えられる。

(2) 柵列（ＳＡ）

調査において柵列を２条検出した。いずれも第Ｖ層上面での検出である。

ＳＡ１（第13図、表７・８、図版５）

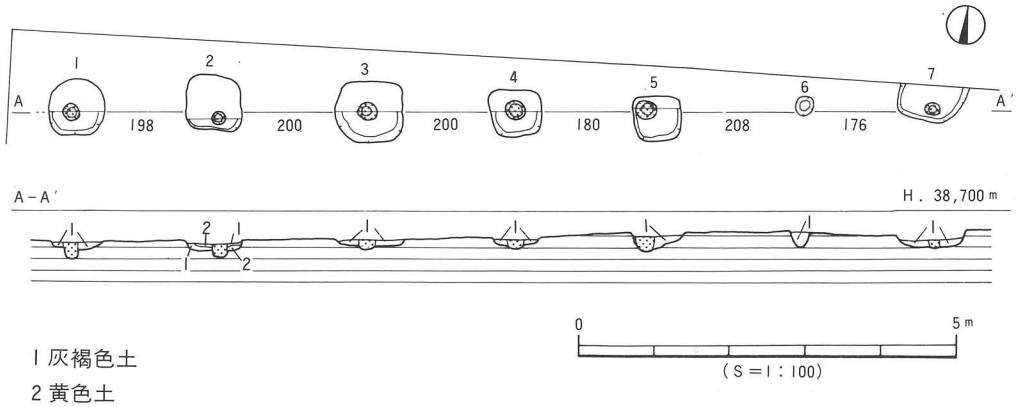
調査区北壁から東壁、６ＡＫＡ－Ｇ　Ｙ31区から６ＡＫＡ－Ｈ　Ｉ23区にかけて検出した。調査区ほぼ中央部Ｈ32区で「Ｌ」字状に折れ曲がる柵列で、Ｄ32～Ｇ32区の間で一部、性格不明遺構ＳＸ１と柱穴が重複する。切り合いよりＳＡ１がＳＸ１に先行する。ＳＸ１壁面及び床面にてＳＡ１柱穴と思われる２基の柱穴を検出している。北壁から調査区中央部まで南北10間分(推定)、調査区中央部から東壁まで東西11間分を検出した。規模は南北検出長約22.9m、東西検出長約25.0mを測る。

柵列を構成する柱穴は円形もしくは方形状プランを呈し、規模は径0.52～1.11m、深さは検出面下12～30cmを測る。柱痕は径18～30cm、深さ12～25cmを測る。柱穴埋土は暗灰褐色土を基調とし、黄色土が斑点状及びブロック状に混入するものである。柱穴間は、最小で1.8m、最大で2.8mを測る。南北と東西の柱穴間隔を比較すると、東西は一部の箇所を除き約2.2～2.3mでほぼ等間隔に並んでいるのに対し、南北はやや間隔にばらつきがみられる。ＳＡ１の方向は回廊状遺構とほぼ同じ方位をとり、真北より約４°東に振っている。遺物は柱穴の柱掘り方内より弥生土器・土師器・須恵器片が数点出土しているが図化しうるものはない。

時期：柱穴内からは時期を特定しうるような遺物の出土は見られなかった。切り合い関係より性格不明遺構ＳＸ１（来住廃寺創建時）に先行することなどから来住廃寺創建以前の建物であろう。

ＳＡ２（第14図、表９、図版６）

調査区北部６ＡＫＡ－Ｇ　Ｙ32区から６ＡＫＡ－Ｈ　Ａ36区に位置する。遺構西側及び北東部は調査区外に続くものと考えられる。東西６間分（柱穴７基）を検出した。遺構の全容はわからないが、本稿では柵列として報告する。規模は検出長約11.4mを測る。各柱穴は円形もしくは方形状プランを呈し、径59～91cm、深さは検出面下12～20cmを測る。柱痕径は12～28cm、深さ18～24cmを測る。柱穴埋土は灰褐色土を基調とするが、一部黄色土が混入する柱穴がある。柱穴間は約1.7～2.0mを測る。ＳＡ



第14図　柵列ＳＡ２測量図

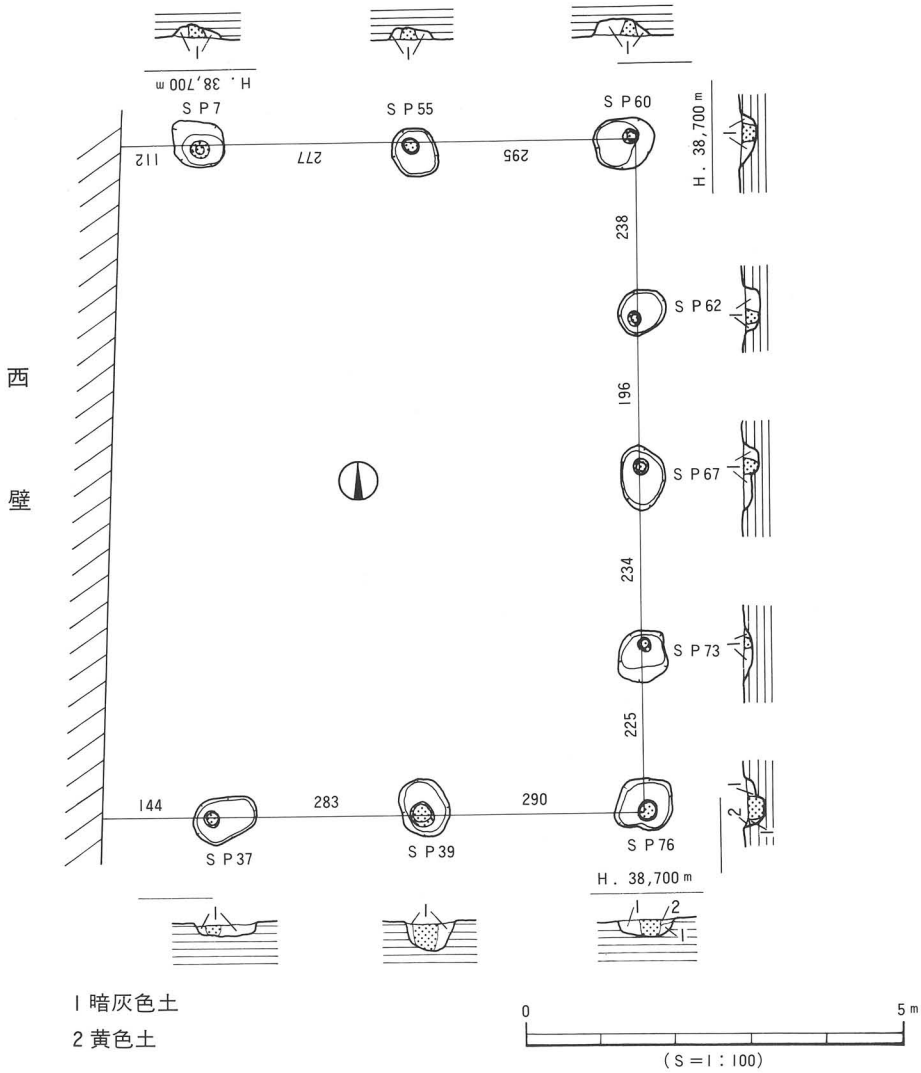
2の方向はほぼ真北に等しい方位をとる。柱穴内からは弥生土器、土師器、須恵器の細片が少量出土しているが、図化しうるものはない。

時期：第Ⅰ層が柱穴を覆っており掘り方は不明であることや柱穴内からの遺物が僅少であることなどから、明確な時期比定は困難である。柱穴埋土や遺構の方向が回廊やＳＡ１とは異なることから、これらの遺構とは時期を隔てるものと思われる。建物の方向性から考えると掘立柱建物址（来住廃寺存続期）とほぼ同じ方位をとっており、概ね、掘立柱建物存続時期である来住廃寺存続期の遺構の可能性があると考えている。

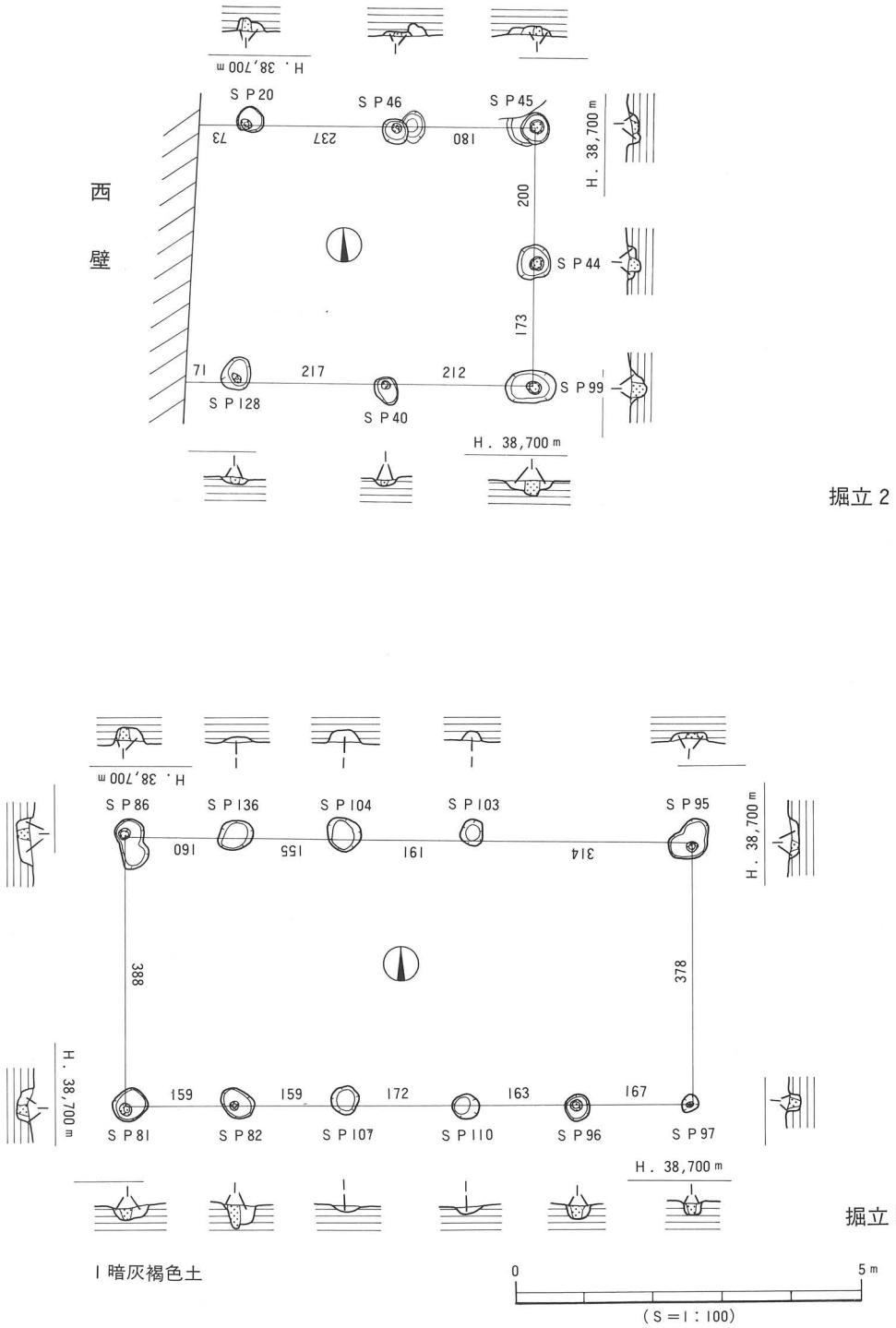
(3) 掘立柱建物址

掘立１（第15図、図版６・７）

調査区北西部Ａ34～Ｄ36区に位置する。遺物西側は調査区外に続くものと考えられる。４×２間以上の建物址でほぼ真北に等しい方向をとる。規模は南北8.8m、東西検出長7.3mを測る。柱穴間は東西



第15図　掘立１測量図



第16図　掘立2(上) 掘立3(下) 測量図

2.8m、南北2.2～2.3mを測る。各柱穴は円から方形を呈し、径35～70cm、深さ15～30cmを測る。柱痕径は17～24cm、深さ12～39cmを測る。柱穴埋土は暗灰色土である。柱穴内からは弥生土器、土師器、須恵器片のほか柱穴床面付近にて平瓦片が2点出土している。

出土遺物（第17図、図版14・15）

土師器（8～11）

8・9は土師器坏である。8は口縁中位でわずかに段をなし器壁は薄い。9は口縁部は内湾し、口縁端部は丸く仕上げる。10～13は土師器皿である。10は口縁端部内面はわずかに肥厚する。11は口縁中位で屈曲するものである。

須恵器（14～16）

14・15は須恵器坏蓋である。14は天井部からなだらかなカーブを描き口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。口縁端面はわずかに面取りされる。16は須恵器坏である。円盤高台が付くもので、底部の切り離しは回転ヘラ切り手法による。

瓦（17・18）

17・18はＳＰ67、ＳＰ７壁面出土の平瓦片である。桶巻き作りにより製作されており、両者ともに凸面には細縄叩きを施している。凹面には布目痕を残す。焼成は17は色調が暗灰色を呈し硬質であるのに対し、18は乳白色を呈し、やや焼きがあまいものである。

時期：柱穴壁面出土の平瓦が時期特定に有効な資料である。その特徴などから来住廃寺存続期の建物址と考えられる。

掘立２（第16図、図版６・８）

調査区北西部Ｂ35～Ｃ36区に位置する。建物西側は調査区外に続くものと考えられる。建物北東隅は土坑ＳＫ１を切っている。２×２間以上の建物址で、ほぼ真北に等しい方位をとる。規模は東西検出長5.8m、南北3.9m、柱穴間は東西2.2m、南北1.9～2.0mを測る。各柱穴は円～楕円形を呈し、規模は径30～60cm、深さ10～30cm、柱痕径は13～20cm、深さ９～20cmを測る。柱穴埋土は掘立１と同様の暗灰褐色土である。柱穴内からは弥生土器・土師器・須恵器・瓦片などが出土している。そのうちＳＰ99内からは須恵器のほか柱痕内に平瓦片が敷かれた状態で出土している。

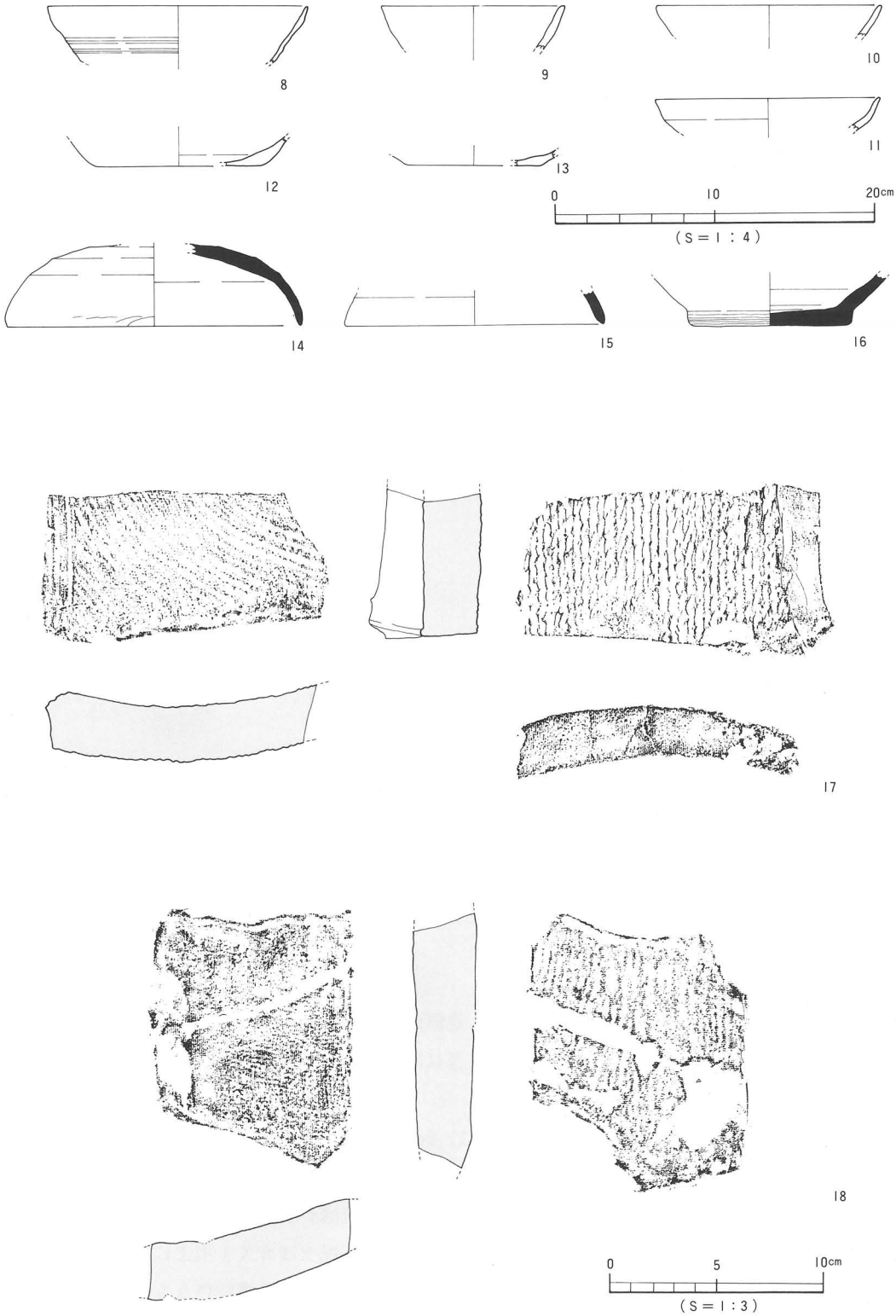
出土遺物（第18図、図版15）

19・20は須恵器の坏である。19は口縁下位で屈曲し、口縁部は直立する。20は高坏形土器の坏部。坏中位で屈曲し口縁部はやや外反する。21はＳＰ99柱痕内出土の平瓦片である。凸面には斜格子叩きを施す。凹面には布目痕、糸切り痕を顕著に残す。色調は灰色を呈し、焼成は硬く焼かれている。

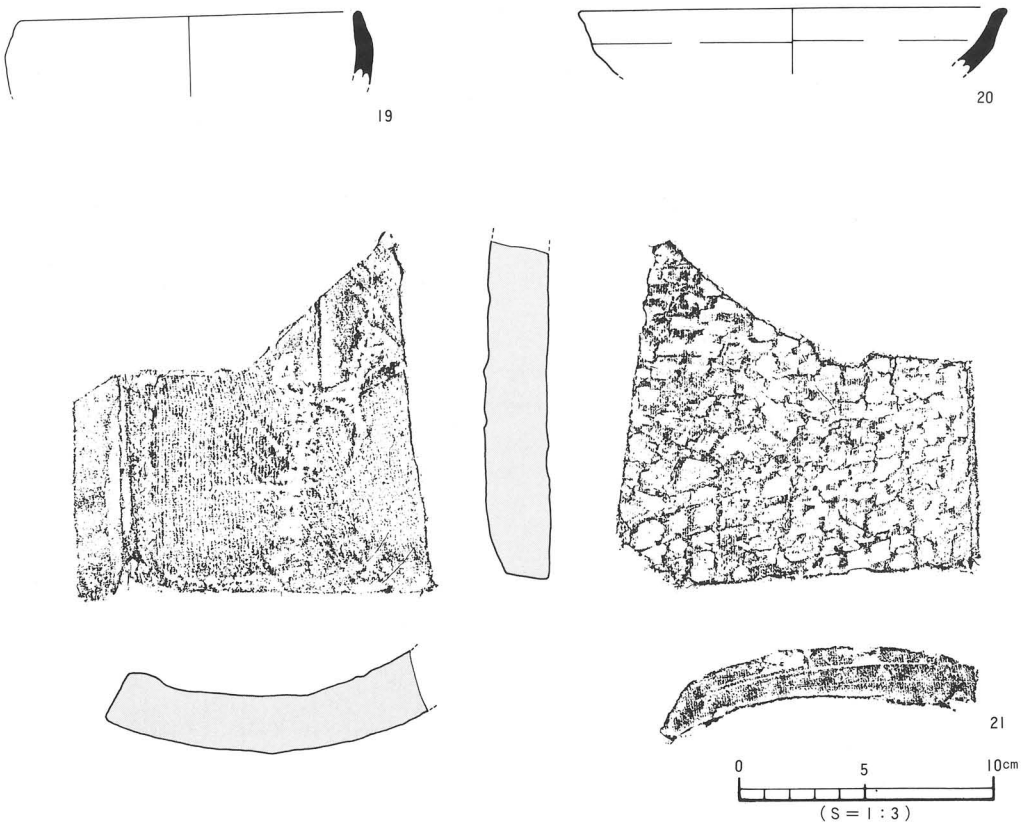
時期：ＳＰ99柱痕内出土の平瓦が時期特定に有効な資料である。その特徴から来住廃寺存続期の建物址と考えられる。

掘立３（第16図、図版６）

調査区北部Ａ31～Ｂ33区に位置し、一部建物柱穴が土坑ＳＫ２を切っている。建物北東及び北西隅は柱穴が重複するが切り合い関係は判断しかねた。建物はほぼ真北に等しい方位をとる。５×１間の東西棟で、規模は桁行長8.3m、梁行長3.7mを測る。柱穴間は桁間2.0～2.3mを測る。各柱穴は円～楕円形を呈し、規模は径25～45cm、深さ20～30cmを測る。柱痕径は10～20cm、深さ９～30cmを測る。柱穴埋土は掘立２と同様の暗灰褐色土である。柱穴内からは弥生土器、土師器小片が少量出土しているが図化しうるものはない。



第17図　掘立1出土遺物実測図



第18図　掘立２出土遺物実測図

時期：出土遺物が僅少で明確な時期判断はしかねるが、柱穴埋土や方向性などを含めて掘立２と同時期の建物址の可能性が考えられる。

(4)　性格不明遺構（ＳＸ）

本調査において大型で不定形な土坑状遺構を１基検出した。本稿では性格不明遺構ＳＸ１として報告する。

ＳＸ１（第19図、図版８～10）

調査区中央北西寄りD31～G33区に位置する。遺構西壁は土坑ＳＫ４を、南壁は土坑ＳＫ３を切っている。遺構南東部は調査区外に続く。遺構中央部は柵列ＳＡ１と重複するが切り合いよりＳＡ１がＳＸ１に先行する。

平面形は不整の方形を呈し、規模は東西検出長11.0m、南北8.8m、深さは30cm前後を測る。埋土は遺構上位に灰黄褐色土が部分的に覆うが、概ね、暗褐色土である。断面形は皿状を呈する。床面は遺構中央部及び南西部にて凹凸がみられることなどから複数の遺構が重複している可能性もある。

遺構北壁及び中央部床面にて、柵列ＳＡ１柱穴を検出した。埋土はＳＸ１埋土にやや灰色が混入するものである。その他、床面にて大小８基のピットを検出したが、本遺構に伴うものかは判断できなかった。

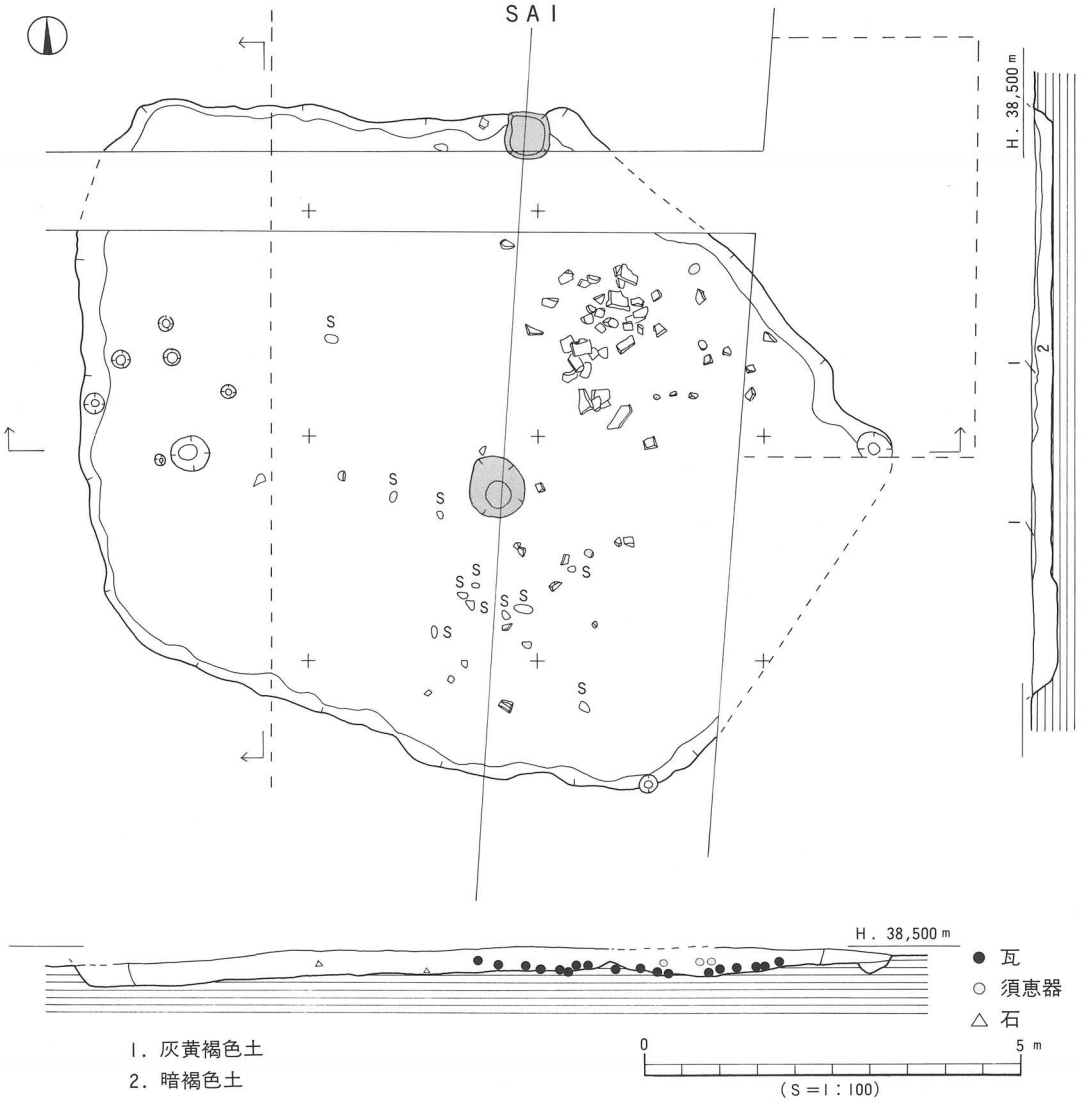
遺物は埋土中及び床面付近から、弥生土器・土師器・須恵器・瓦類などが出土している。とりわけ、瓦類は遺構北東部床面付近に集中して出土している。出土状況などから一括投棄されたものと考えら

れる。

出土遺物（第20～25図、図版16～21）

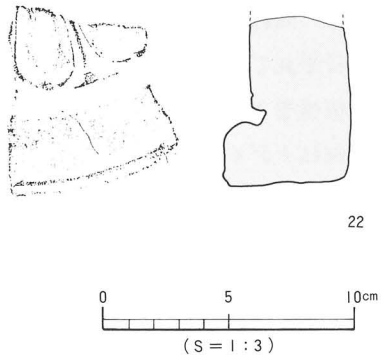
瓦（22～33）

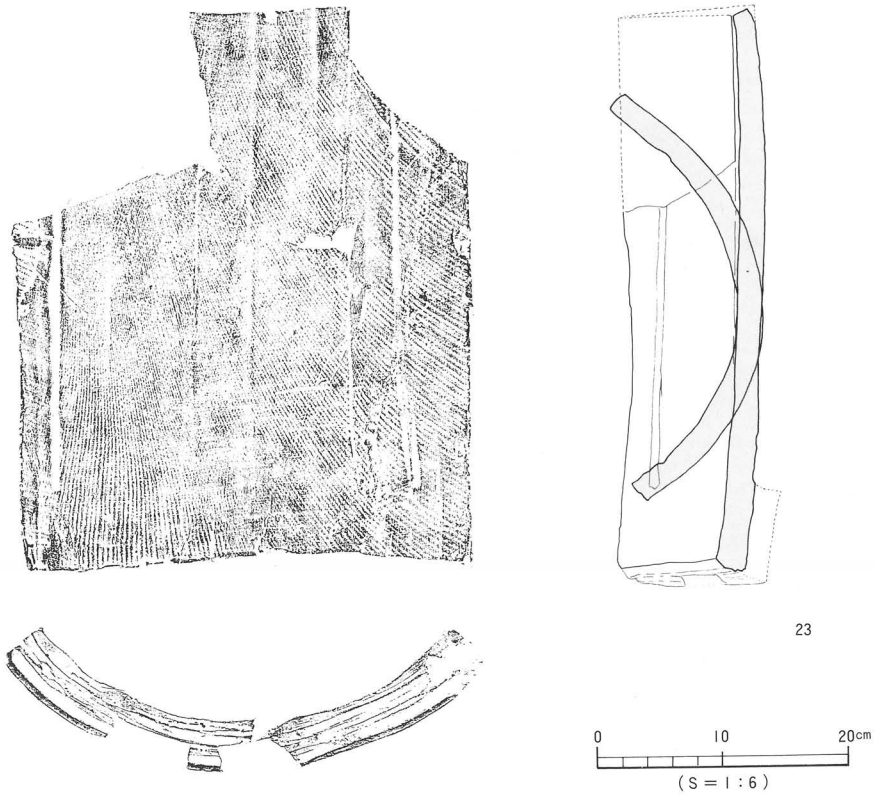
22は軒丸瓦片である。残存状況から推測すると10弁もしくは11弁の単弁（素弁）蓮華文軒丸瓦であろう。瓦当外縁に圏線を１重めぐらす。焼成はやや焼きのあまい淡黄褐色を呈する。23・24は重弧文（３重弧か）軒平瓦である。瓦当の施文はヘラ状工具によるヨコナデを施した簡単なものである。両者ともに粘土板桶巻き作りで製作されている。凹凸面に糸切り痕を残し、凸面側には叩きを施した痕跡はなく横方向にナデイタで平滑にされている。23の凹面内側の左右には分割界線(棒痕跡)が残る。左右ともに瓦当面から約８cmの所で止まっている。瓦の大きさを復元すると、桶巻きの４等分の大きさに相当する。25～28は平瓦である。凸面は25・26が斜格子叩き、27は格子叩きを施す。28は叩き目をナデ消している。凹面側にはいずれも布目痕、糸切り痕を残す。焼成は27は灰色を呈し良好であるが、それ以外は焼きのややあまい淡灰～淡黄褐色を呈する。29・30は隅木蓋瓦である。平瓦を転用し



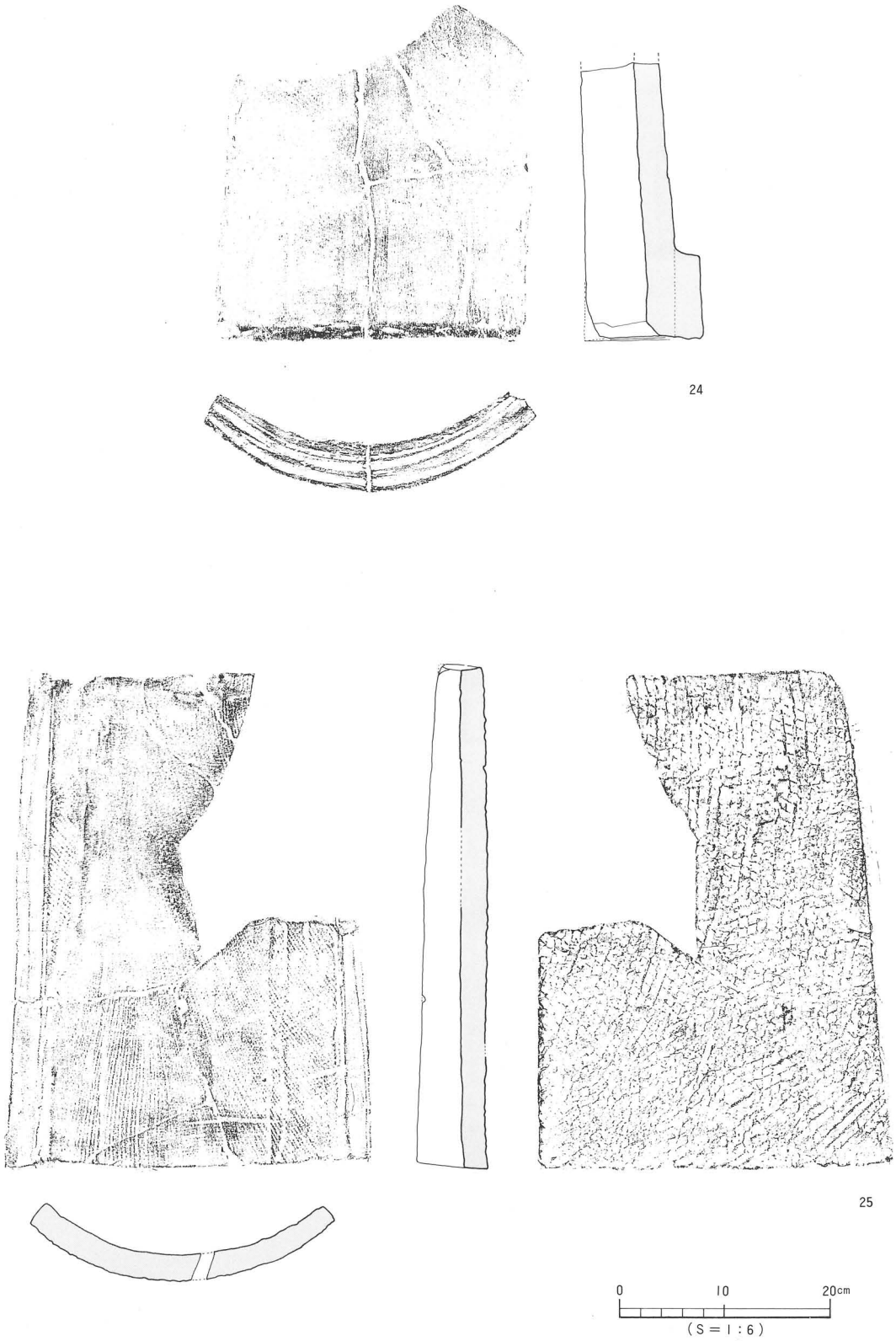
第19図　S×I測量図

た平蓋式のもので、平瓦の狭端部を両面から打ち缺いて製作されている。釘穴は穿たれていない。凸面側は29が格子叩き、30は斜格子叩きを施す。凹面側には布目痕、糸切り痕を施す。31・32は行基式の丸瓦である。凹面側には強い糸切り痕が存在するが、凸面側には叩きの痕跡は見られない。33は熨斗瓦である。凸面に斜格子叩きを施すもので、桶巻き作りで製作した平瓦を半截したものである。

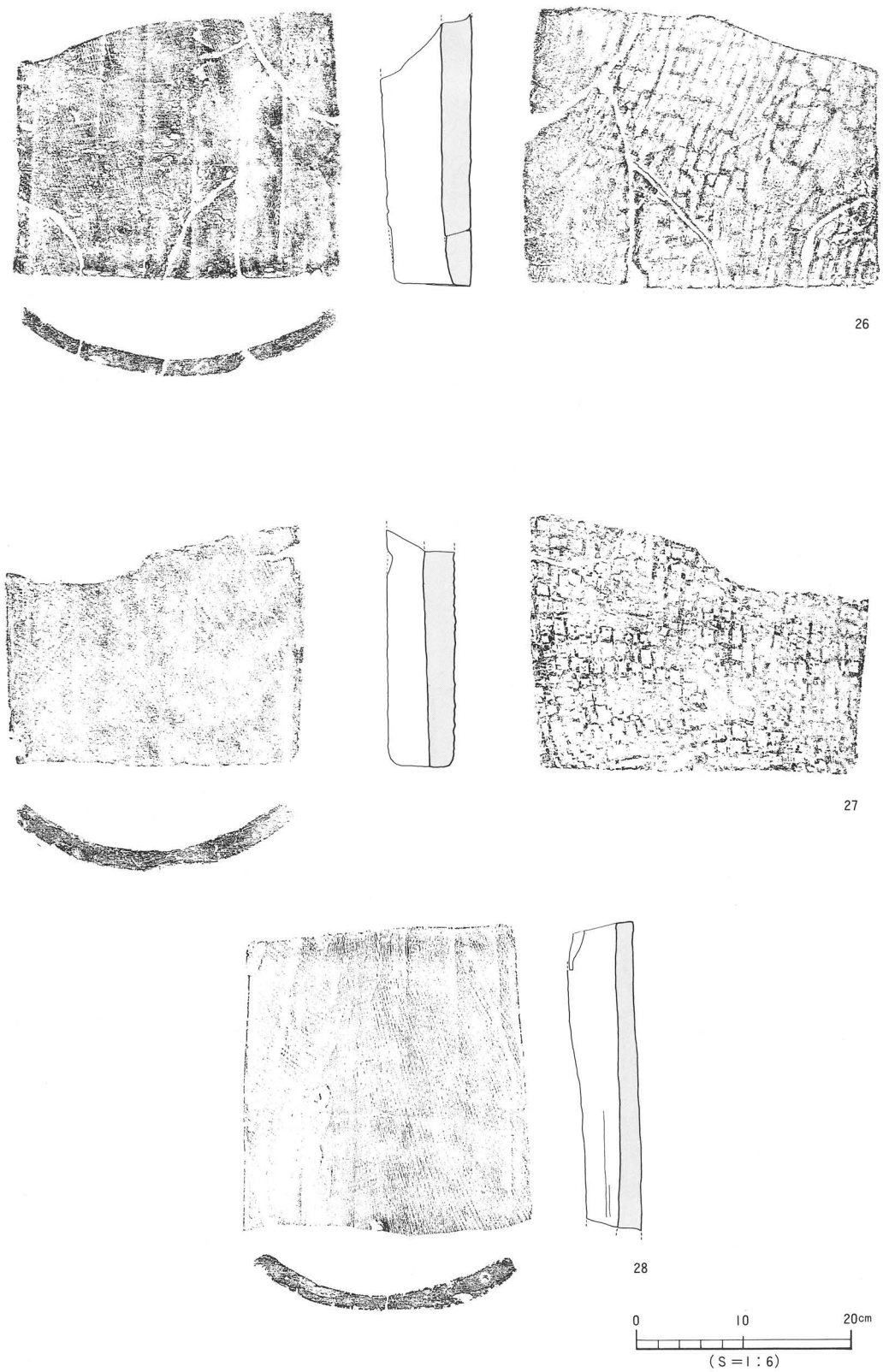




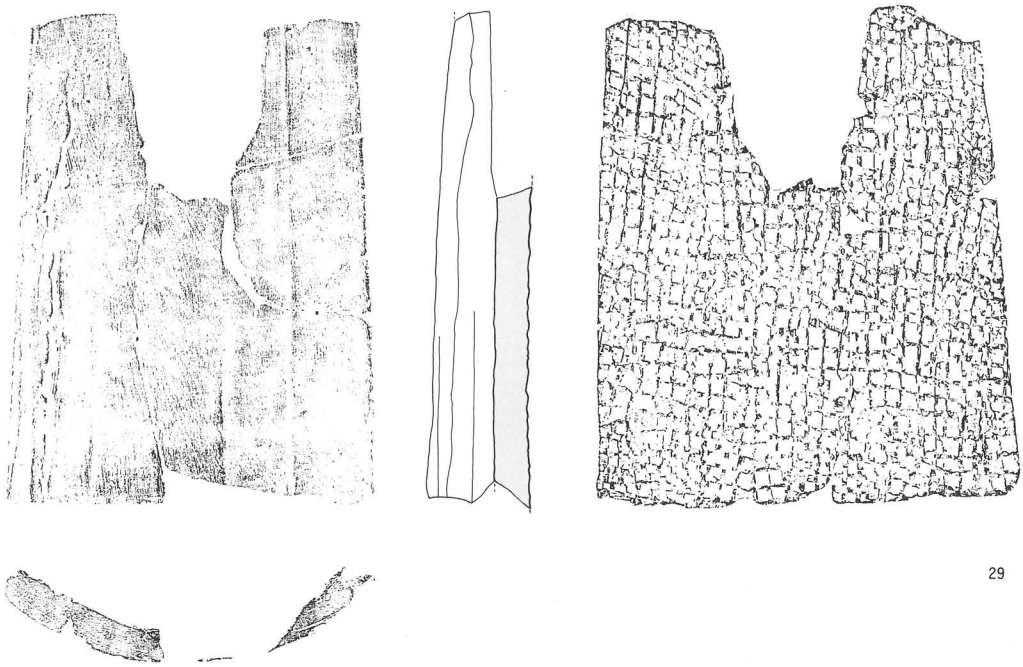
第20図　S×1出土遺物実測図（1）

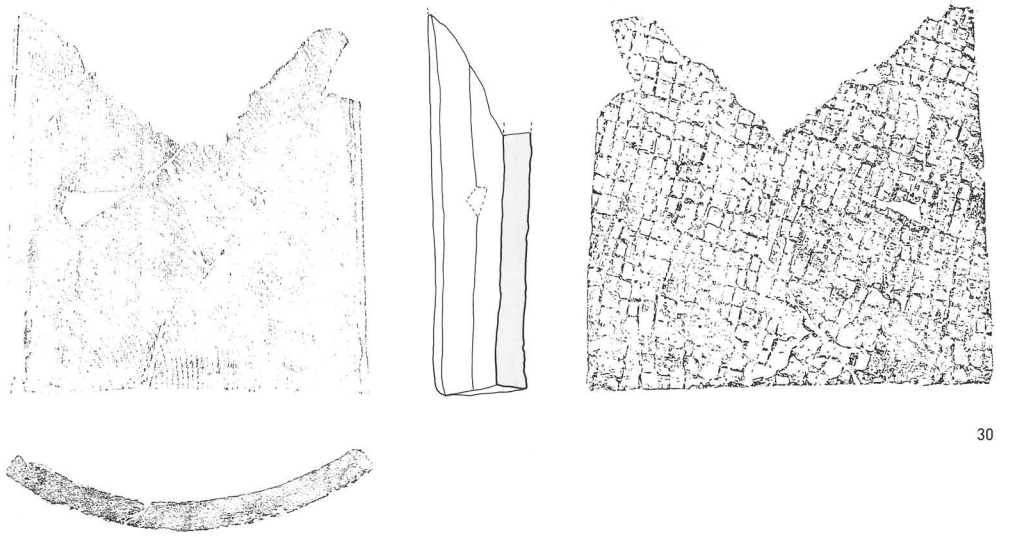


第21図　S×1出土遺物実測図（2）



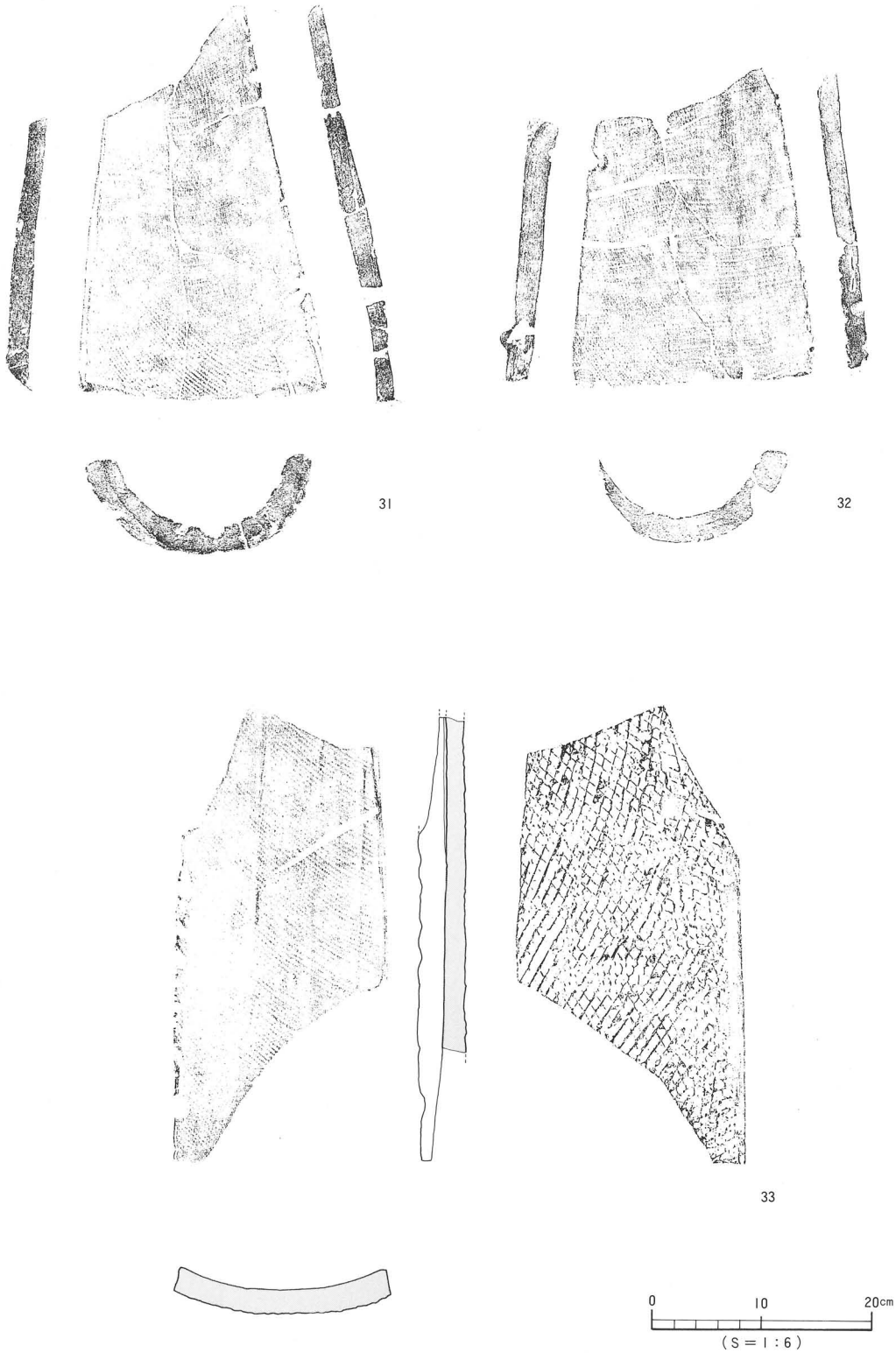
第22図　S×I出土遺物実測図（3）





0　10　20cm
（S＝1：6）

第23図　S×I出土遺物実測図（4）



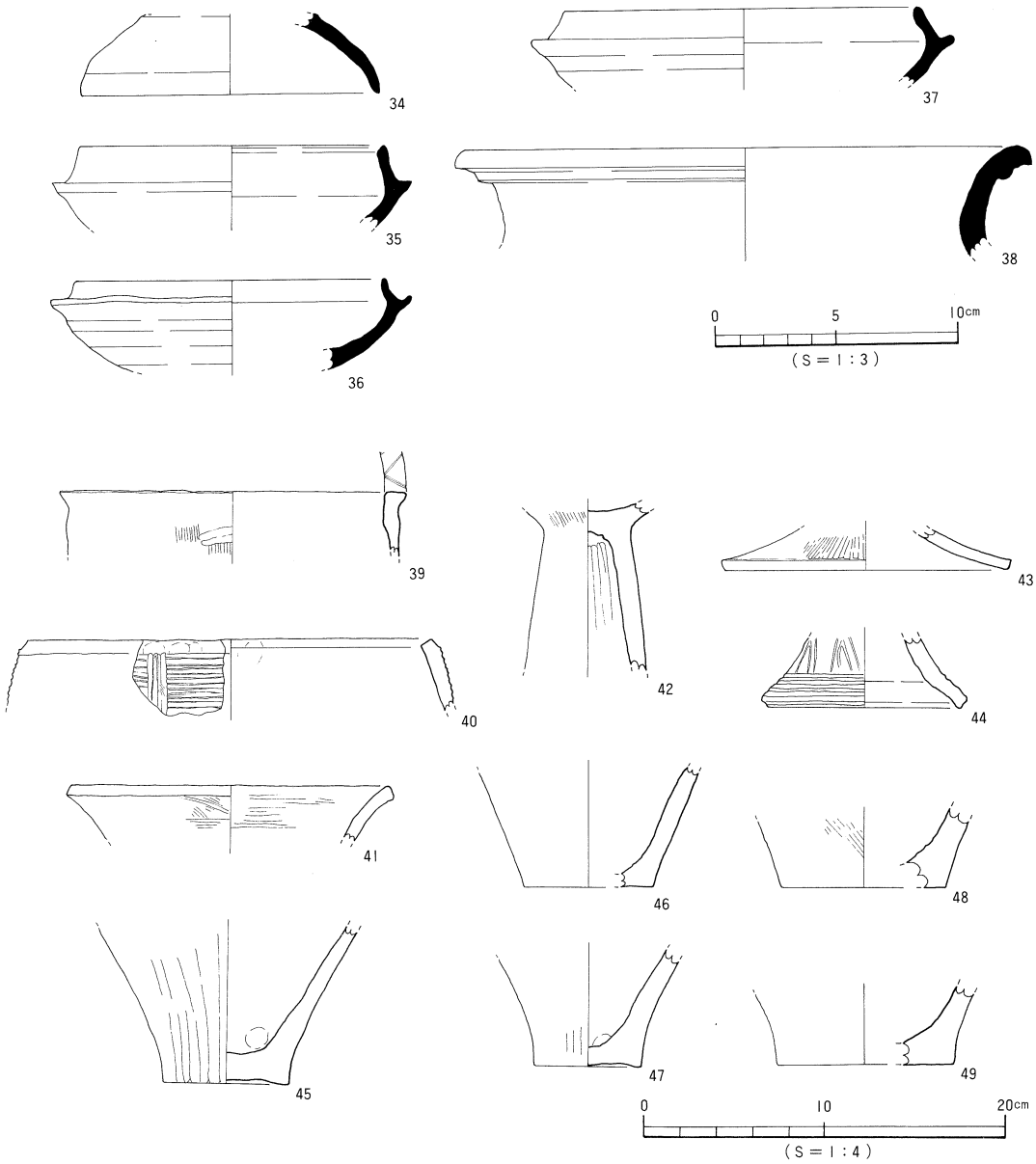
第24図　S×I出土遺物実測図（5）

須恵器（34～38）

34は須恵器坏蓋、35～37は坏身である。34は天井部と口縁部の境の稜は消失する。35はたちあがりが比較的高く端部は内傾する。36・37はたちあがりは低く内傾し、端部は丸く仕上げるものである。38は甕の口縁部片である。外反する口縁部で口縁下に丸味のある断面三角形状の凸帯を貼り付けする。いずれも小片であり、埋土中位出土品である。

弥生土器（39～49）

39は甕形土器の口頸部片。貼り付けによる口縁部成形で口縁上面に２条１対の山形文を施す。40・41は壺形土器の口縁部片である。40は複合口縁壺で口縁部外面に２本１対の櫛描き沈線文を横方面に



第25図　S×I出土遺物実測図（６）

4条、縦方向に2条施す。口縁端面は面取りされる。42～44は高坏形土器の脚部片。42は柱部内面にしぼり痕を顕著に残す。坏底部は組み合わせ技法によるものである。43・44は脚裾部片。43の外面には細かなミガキ調整を施す。44は脚裾部に3条、脚端部面に1条の凹線文を施す。裾部上部には二等辺三角形状の沈線文を2条施す。搬入品であろう。45～48は甕形土器、49は壺形土器の底部である。

いずれもが小片であり埋土上位からの出土であるため、これら弥生土器は流れ込みの可能性が高い。

時期：遺物の出土状況などから、床面付近出土の瓦類が時期特定に有効な資料である。これら瓦類は来住廃寺創建当初に使用されたものと考えられることから、本遺構も来住廃寺創建当初、7世紀末頃の遺構と考えられる。

(5) 溝

本調査において、回廊を取り囲む区画溝と思われる溝の一部（ＳＤ３）と、古代の遺構と切り合う溝3条（ＳＤ１・２・７）が検出された（第9図、図版10)。

溝ＳＤ３は調査区南西隅M34～N36区に検出されたもので、溝東端は消失している。埋土は灰褐色土である。回廊外側柱穴からＳＤ３までは約4mの幅の空間が存在する。ＳＤ３底面にて溝状になる凹みを検出したが、遺構埋土が類似することから、ＳＤ３に関連するものと判断した。位置的に判断すると、回廊の南東及び南西コーナーで確認された区画溝の延長線上にあたることなどから、回廊を取り囲む区画溝であろうと考えられる。溝内からは遺物の出土はない。

溝ＳＤ１は、回廊に切られ、土坑ＳＫ18（弥生時代）を切り、ＳＤ２と重複する（切り合い不明)。ＳＤ１南側はＳＤ３に切られている。断面形は皿状を呈し、埋土は暗灰色土である。溝底はわずかに北から南へ緩傾斜をなす（比高差約5㎝)。溝内からは弥生土器・土師器小片が数点出土しているが図化しうるものはない。遺構の時期は切り合いより上限を弥生時代前期末～中期初頭、下限を古代と考えられる。

ＳＤ１と同様ＳＤ２についても、埋土が類似することなどから同時期の遺構と考えられる。ＳＤ７は北端を土坑ＳＫ39に切られ、南側は調査区外に続く。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は灰褐色土である。溝底は北から南へ緩傾斜をなす(比高差約7㎝)。溝内からは土師器片が少量出土している。切り合いより上限を古代、下限は不明である。各溝の規模等は一覧表に記す（表12)。

(6) 土　坑

本調査において、古代の遺構と切り合う土坑が7基検出された。出土遺物も僅少で明確な時期比定は難しいが、概ね古代以前の遺構として報告する。

まず、回廊に切られているものは、土坑ＳＫ31・35・36の3基である。遺構埋土はいずれも暗褐色土である。柵列ＳＡ１には土坑ＳＫ25が切られている。不定形の土坑で遺構埋土は暗灰色～暗灰褐色土である。いずれの遺構からも遺物の出土はない。

掘立柱建物址では土坑ＳＫ１が掘立2に切られている。円形の土坑で、遺物は弥生土器・土師器小片が数点出土している。遺構埋土は暗褐色土である。また、性格不明遺構ＳＸ１には、土坑ＳＫ３・４がそれぞれ切られている。方形の土坑で埋土はそれぞれ暗灰褐色土、黒褐色土である。遺物の出土はない。他に直接的ではないが、回廊を切る溝ＳＤ７を切って土坑ＳＫ39が検出された。円形の土坑で二段掘り構造になっている。埋土は暗灰褐色土である。遺物の出土はない。下限は定かではないが上限を古代と考える。

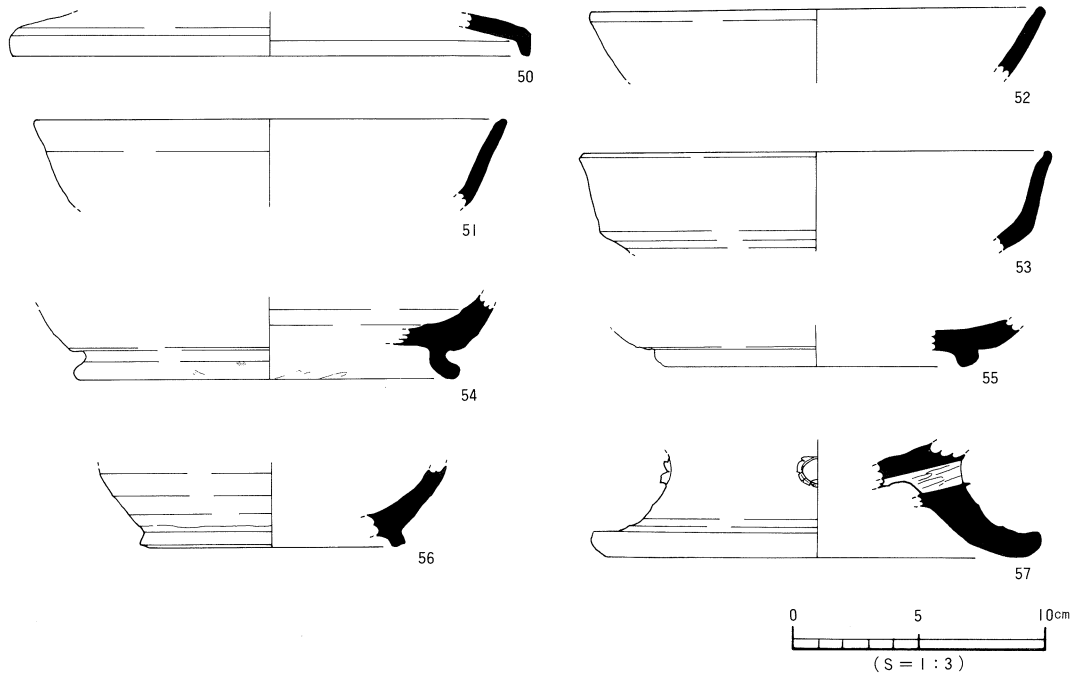
各土坑の規模等は一覧表に記す（表11)。

(7) その他の遺構と遺物

本調査において包含層である第Ⅲ層、第Ⅳ層中から弥生時代、古墳時代、古代に比定される遺物が出土した。ただし、発掘調査時は両土層の区別が判断しがたく、同時に掘り下げたため、一括して包含層出土遺物として遺物の取り上げを行った。ここでは、古代に比定される遺物を抽出し、第26図に掲載した。

包含層出土遺物（第26図）

50は須恵器坏蓋である。口縁部は下内方へ屈曲し、端部は丸く仕上げる。小片。51～56は須恵器坏である。51～53は高台の有無は不明である。口縁部はいずれもやや外反し、端部は尖り気味に丸く仕上げる。53は口縁下位にて稜をなして屈曲する。54～56は高台付の坏である。高台は底部端部付近に付き、54は外方に湾曲している。55・56は短い高台が付くものである。57は壺の脚部片と思われる。脚部上位に径0.9cm大の円孔を３ケ所に穿つ。



第26図　包含層(古代)出土遺物実測図

〔2〕古墳時代の遺構と遺物

本調査において検出された古墳時代の遺構は土坑２基他である。第Ⅴ層上面での検出である。

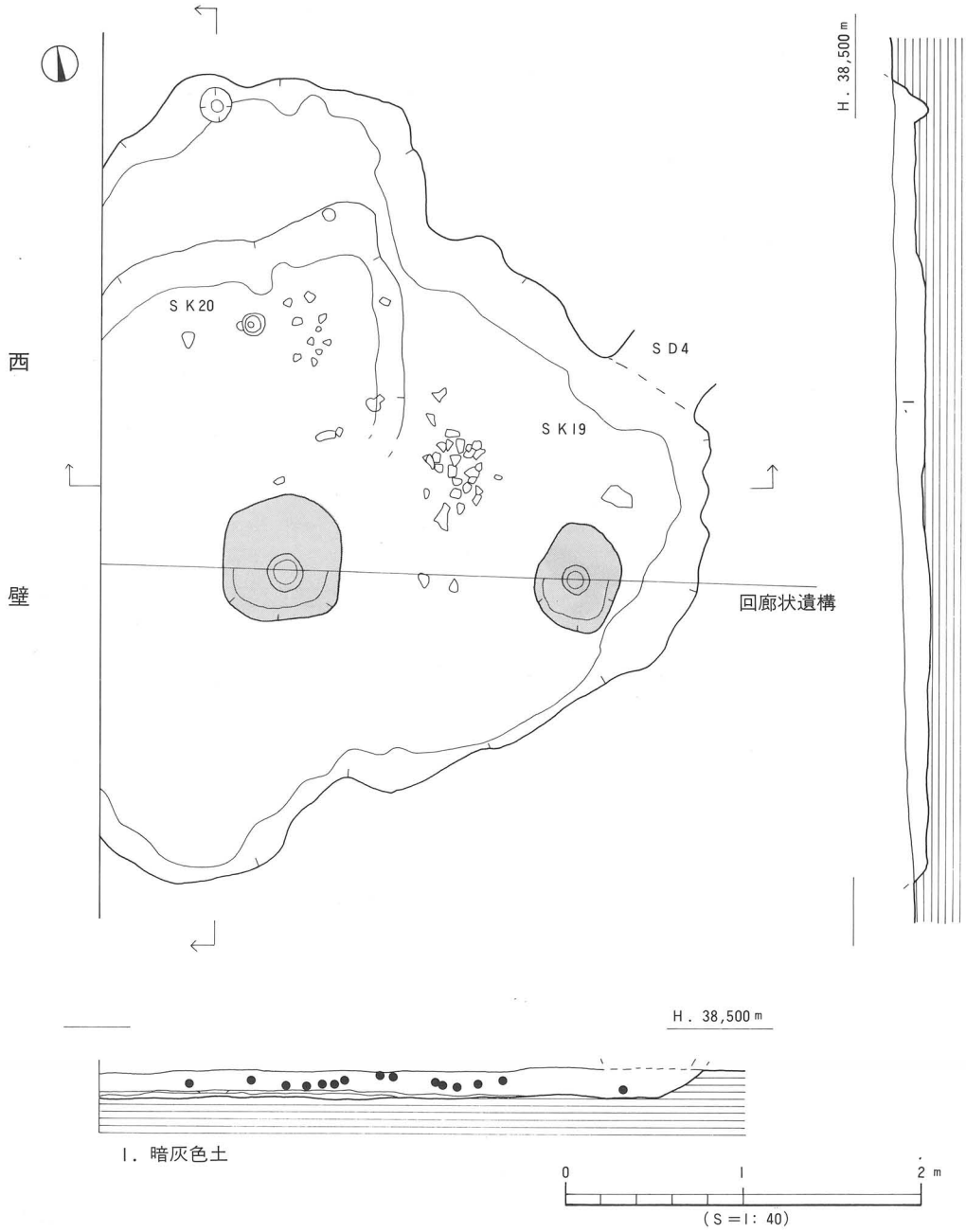
(1) 土　坑

ＳＫ19（第27図、図版11）

調査区南西隅Ｊ36～Ｌ37区に位置する。遺構西半部は調査区外に続く。遺構北東部は溝ＳＤ４と重複するが明確な切り合い関係は判断できなかった。また、遺構中央部は回廊の内列の柱穴によって切られている。

平面形は不整の方形状プランを呈し、規模は南北1.81m、東西1.74m、深さ15cm前後を測る。断面形は浅い逆台形状を呈し、埋土は暗灰色土である。床面はわずかに北から南に向けて傾斜をなす。遺構北部床面にて浅い凹みを検出した(ＳＫ20)。ＳＫ20南半部は消失している。埋土はＳＫ19と同様の暗灰色土であるが、ＳＫ19に伴うものかは判断しえない。ＳＫ20内からは遺物の出土はない。

遺物は遺構中央部付近の埋土中及び床面付近にまとまって出土している。埋土上位より弥生土器、土師器のほか、口縁部を欠損した須恵器瓮（60）が出土し、床面からは須恵器坏身（58）などが出土している。



第27図　ＳＫ19測量図

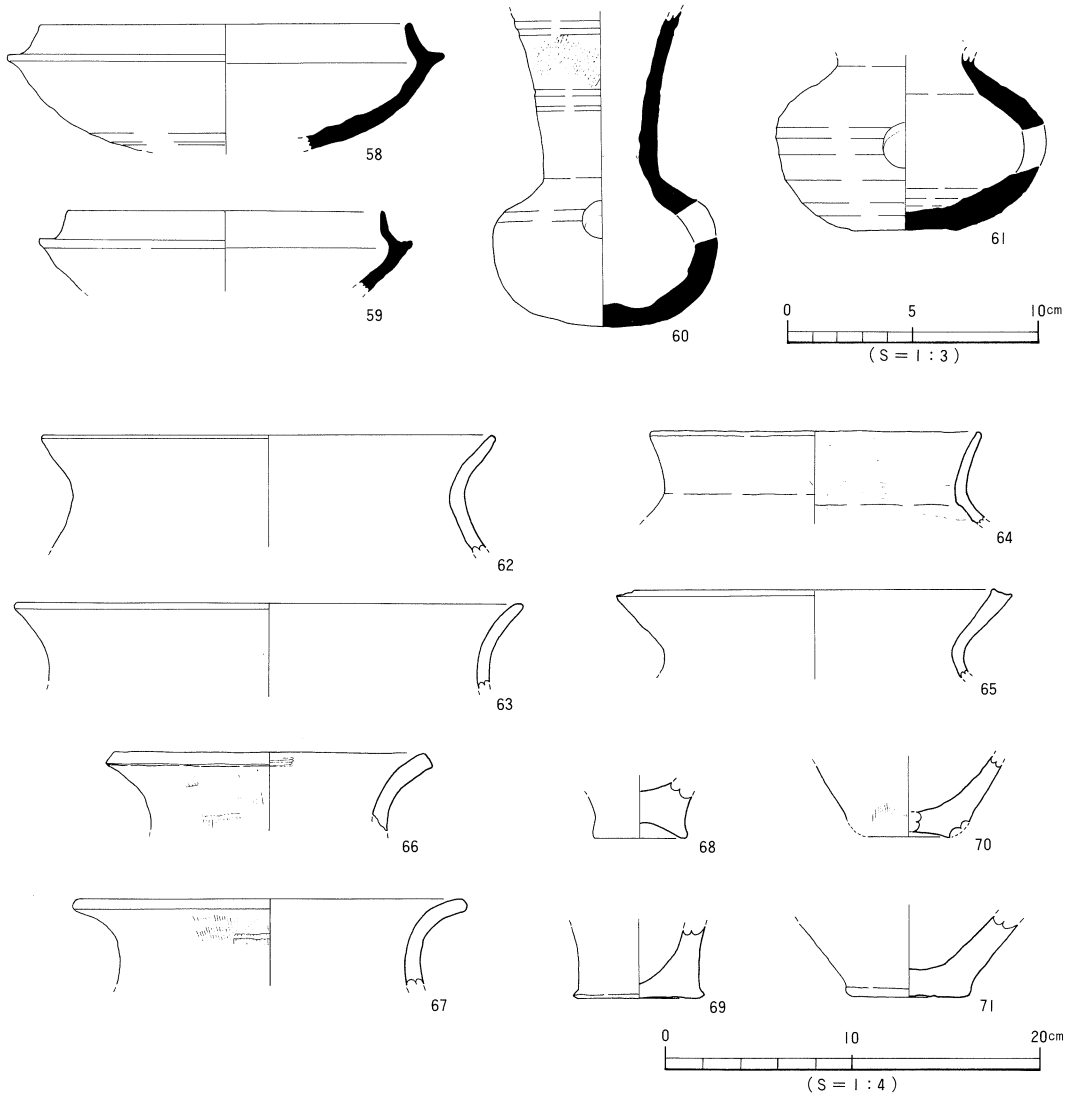
出土遺物（第28図、図版21）

58・59は須恵器坏身である。58は床面出土品である。たちあがりは内傾し、端部は丸く仕上げる。60・61は須恵器甕である。60は埋土上位出土品で、口縁部を欠損している。頸部に２条の沈線を上下に施す。62～65は土師器の甕形土器である。62は口縁部はわずかに内湾するものである。65は口縁端を上方につまみ上げ、口縁端面はわずかに凹む。66・67は弥生土器の壺形土器である。口縁端部を「コ」字状に仕上げる。68・69は甕形土器、70・71は壺形土器の底部である。

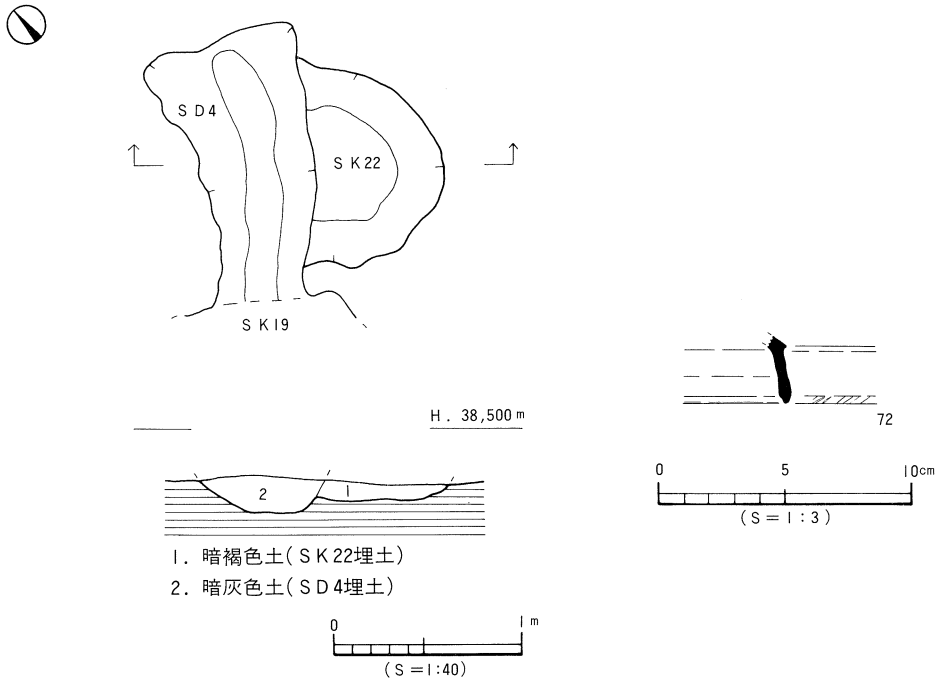
時期：出土した遺物は時期差が見られるが、床面出土の須恵器坏身が時期特定に有効な資料である。その特徴より古墳時代後期、６世紀後半頃に比定されるものであろう。よって本土坑の時期も６世紀後半と考えられる。

ＳＫ22（第29図）

調査区南西部Ｋ35区に位置する。遺構西半部はＳＫ19と重複する溝ＳＤ４（古墳後期）に切られている。平面形は円形を呈するものと考えられ、規模は径1.2m、深さ12cm前後を測る。断面形は皿状を



第28図　ＳＫ19出土遺物実測図



第29図　SK22測量図・出土遺物実測図

呈し、埋土は暗褐色土である。床面はほぼ平坦である。

遺物は埋土中にて弥生土器・土師器・須恵器小片が数点出土している。図化しうるものを1点抽出した。

出土遺物（第29図、図版21）

72は須恵器坏蓋である。小片のため明確な口径はわからない。形態は断面三角形のシャープな稜をもち、口縁端部は内傾する。口縁端外面は面取りがなされ、工具は不明だが刻み目を施している。

時期：出土遺物が僅少であるため明確な時期判断はしかねる。切り合い関係などから、下限を古墳時代後期後半に求められる。

(2) 溝

SD4（第29図、図版10）

調査区南西部J35～K36区に位置する。遺構南側は土坑SK19と重複し、東側はSK22を切っている。短く不定形の溝で、規模は検出長1.46m、幅0.84m、深さは10～13cmを測る。わずかに溝底は北から南に向けて緩傾斜をなす（比高差3cm）。断面形はレンズ状を呈し、埋土は暗灰色土である。

溝内からの遺物の出土は見られなかった。

時期：遺物の出土はなく時期特定は難しいが、土坑SK19と重複することなどから、概ね、古墳時代後期後半の遺構と考えられる。

〔3〕弥生時代の遺構と遺物

本調査において検出された弥生時代の遺構は土坑9基他である。すべて第V層上面での検出である。

(1) 土　坑

ＳＫ２（第30図、図版12・13）

調査区北部Ａ32～Ｂ32に位置する。北壁中央部は掘立１柱穴に切られている。平面形は隅丸の長方形を呈し、規模は長軸2.98m、短軸2.02m、深さは約34cmを測る。断面形は皿状を呈し、埋土は黒褐色土である。床面はほぼ平坦である。南壁中央部床面にて径15cm前後の小ピットを検出した。埋土が土坑埋土と同様であることから、本土坑に伴うものと思われる。遺物は埋土中より弥生土器の甕形土器・壺形土器などの口縁部片や底部片などが出土している。

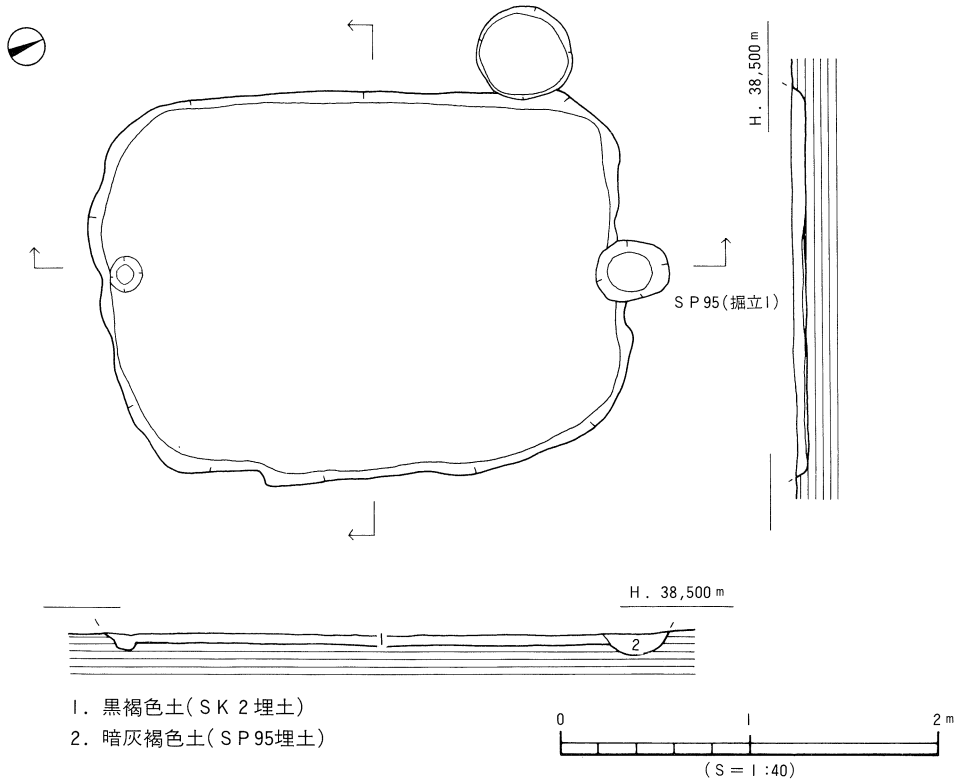
出土遺物（第31図、図版22）

73・74は甕形土器である。73・74共に口縁部を貼り付けする。73は口縁部端面にヘラ状工具による刻み目を施す。胴部の張りは強く、胴上位にヘラ描き沈線文を７条施す。胴中位外面にはヘラミガキ調整を施す。75は壺形土器。頸部は直立し、口縁部は外反する。頸部外面にヘラ描き沈線文を３条施す。76は甕形土器の底部。わずかに上げ底を呈する。

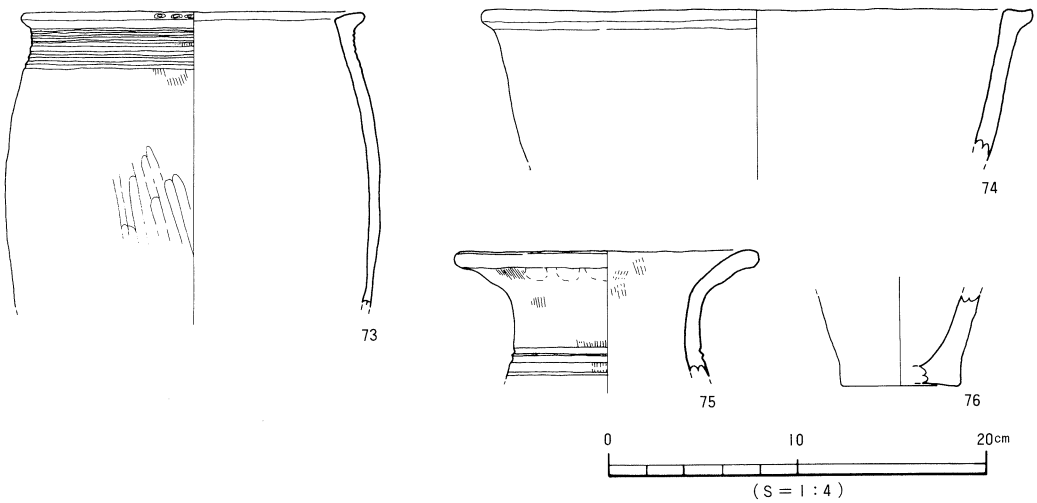
時期：出土遺物の特徴から本土坑の時期は弥生時代前期末から中期初頭と考える。

ＳＫ６（第32図）

調査区北西部Ｆ35・36区に位置する。平面形は不整の長方形を呈し、規模は長軸1.87m、短軸1.41m、深さは50cm前後を測る。埋土は黒褐色土を基調とし、床面付近には一部黄褐色土が混入する層が厚さ10cm程度みられた。断面形は逆台形状を呈する。床面は北から南に向けて緩傾斜をなす（比高差約５cm）。遺構床面にて大小４基のピットを検出した。遺構南側床面では不整形状のピット及び、径50cm前



第30図　ＳＫ2 測量図



第31図　ＳＫ２出土遺物実測図

後のピットを検出した。両者ともに埋土は茶褐色土である。その他、遺構北側床面及び壁体に径15cm前後の小ピットを検出した。埋土は黒褐色土に黄褐色土が混入するものである。遺構埋土から考えると、北側検出の小ピットは本土坑に伴う可能性がある。

遺物は埋土中から弥生土器片が数点出土している。図化しうるものを２点掲載した。

出土遺物（第33図、図版22）

77は甕形土器。断面三角形の口縁部を貼り付ける。口縁端面にヘラ状工具による刻み目を施す。胴部外面に６～８条のヘラ描き沈線文と刺突文を施す。78は壺形土器の頸部。長頸で上方に開く口頸部をもつものである。頸部下位に断面三角形状の凸帯を貼り付け、凸帯上に刻み目を施す。口頸部内面に凸帯を貼り付けする。

時期：出土した弥生土器の持徴などから本土坑の時期は弥生時代前期末～中期初頭と考えられる。

ＳＫ８（第32図）

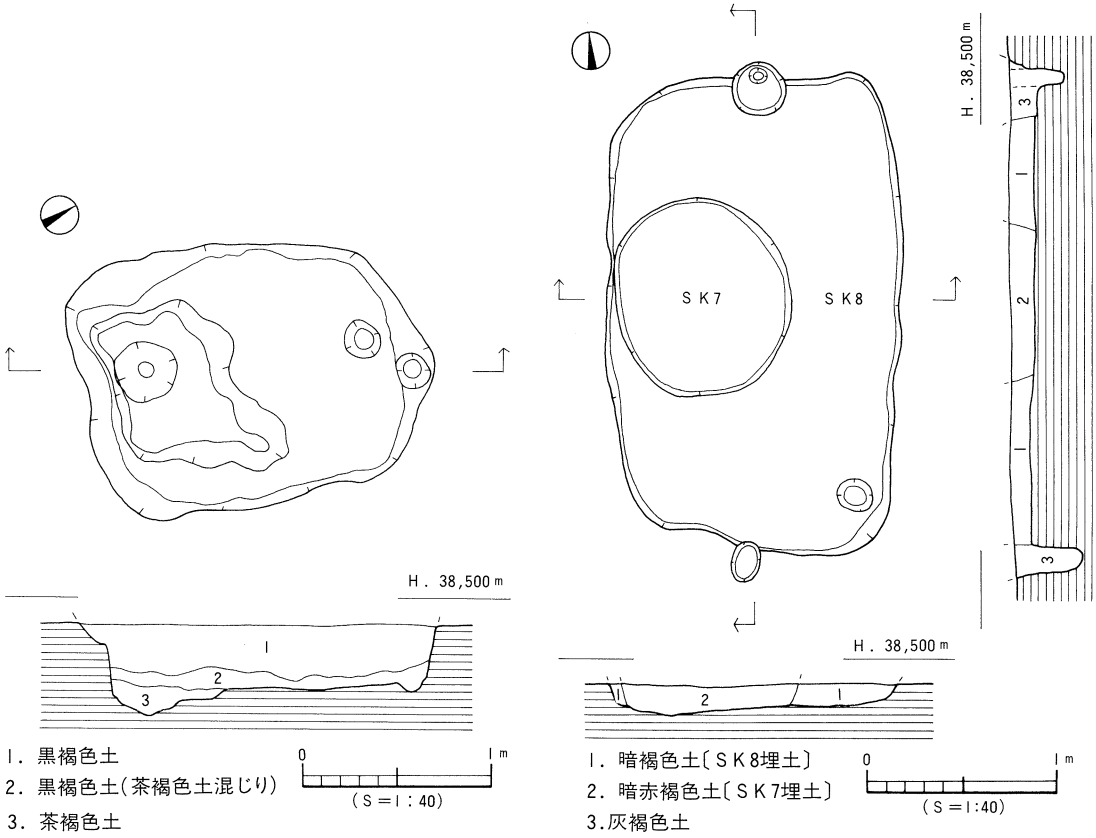
調査区北西部Ｇ35・36区に位置する。遺構中央部はＳＫ７に切られ、北壁及び南壁中央部はピットに切られている。平面形は隅丸の長方形を呈し、規模は長軸2.53m、短軸1.53m、深さ約14cmを測る。埋土は暗褐色土である。断面形は浅い逆台形状を呈する。床面はほぼ平坦であるが、遺構南側では床面がわずかに高くなっている。床面にて小ピットを１基検出したが、本土坑に伴うものかは判断できなかった。

遺物は埋土下位にて弥生土器片が数点出土している。

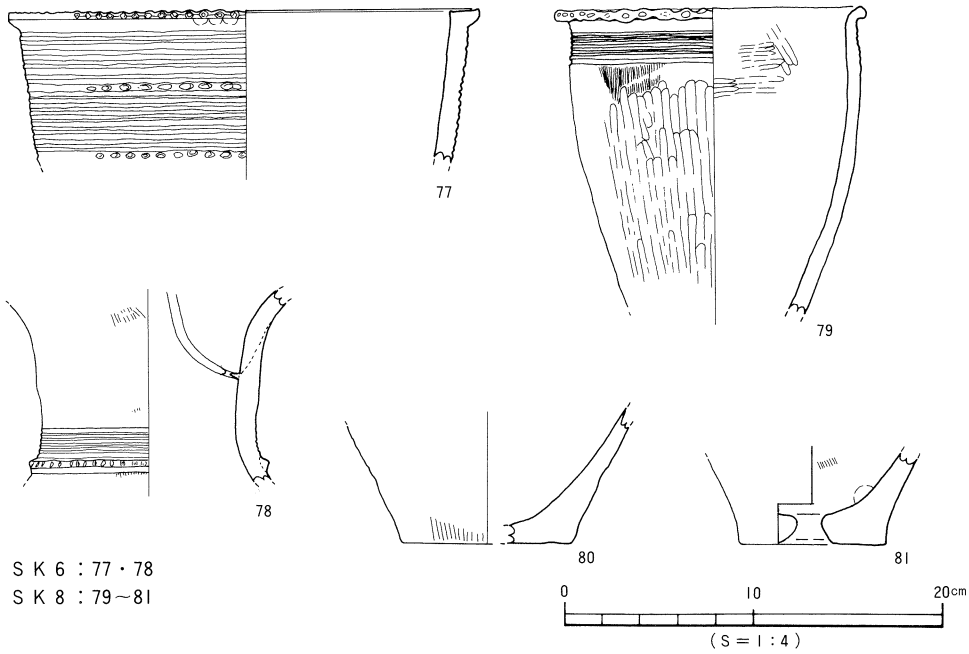
出土遺物（第33図、図版23）

79は甕形土器。口縁部は折り曲げにより形成する。口縁端面に刻み目を施す。胴部は張りをもち、ヘラ描き沈線文を６条施す。胴部外面はタテ方向、内面はヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。80は壺形土器の底部。平底。81は所謂「コシキ」用の土器の底部である。甕形土器からの転用品である。径0.7～１cm大の孔を穿つ（焼成後穿孔）。

時期：出土した弥生土器の特徴などから本土坑の時期を弥生時代前期末から中期初頭と考えられる。



第32図　SK6〔左〕 SK7・SK8〔右〕測量図



第33図　SK6・SK8 出土遺物実測図

ＳＫ10（第34図）

調査区西壁中央部Ｇ36・Ｈ36区に位置する。遺構西半部は調査区外に続き南東部はピットに切られている。平面形は円形を呈するものと考えられる。規模は南北検出長1.90m、東西検出長0.68m、深さ約13cmを測る。埋土は暗褐色土である。断面形はレンズ状を呈する。

遺物は埋土中にて弥生土器片が数点出土した。

出土遺物（第36図、図版23）

82は甕形土器。断面三角形状の短く丸い口縁部を貼り付けする。胴部最大径が口縁屈曲部にあり、長胴傾向を示す。胴部外面にタテ方向のヘラミガキ調整を施す。83は壺形土器の口頸部片。口縁端面にヨコ沈線文を施し、その後、口縁上端部と下端部に刻み目を施す。口縁端部内面には２列に刺突文を施す。

時期：出土した弥生土器の特徴から本土坑の時期は弥生時代前期末から中期初頭と考えられる。

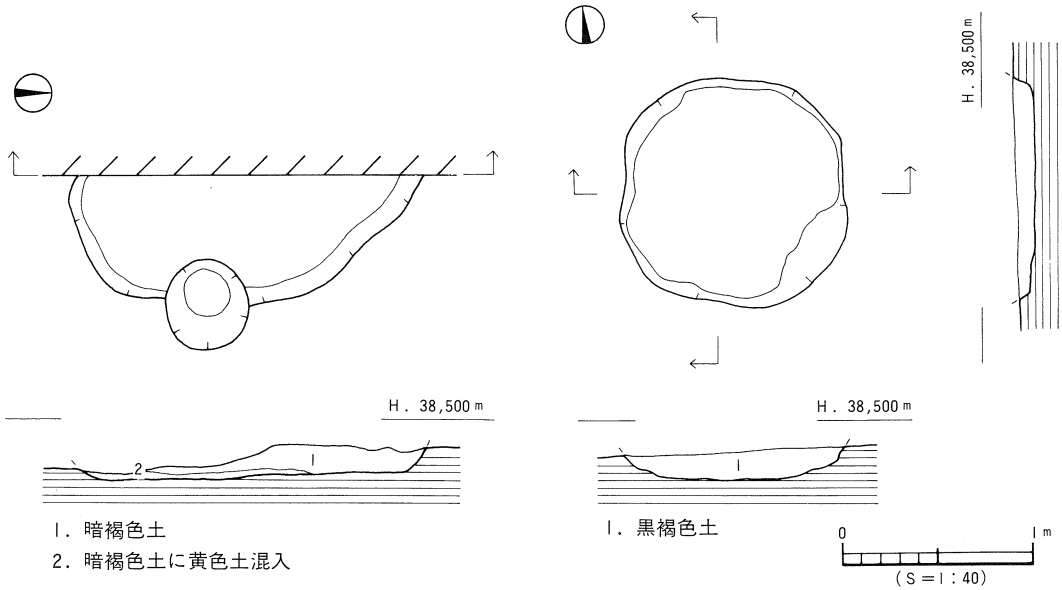
ＳＫ11（第34図）

調査区西寄りＨ35･36区に位置する。平面形は円形を呈し、規模は径1.18～1.21m、深さ約14cmを測る。埋土は黒褐色土である。断面形はレンズ状を呈する。遺物は埋土中より弥生土器片が数点出土している。図化しうるものを２点掲載した。

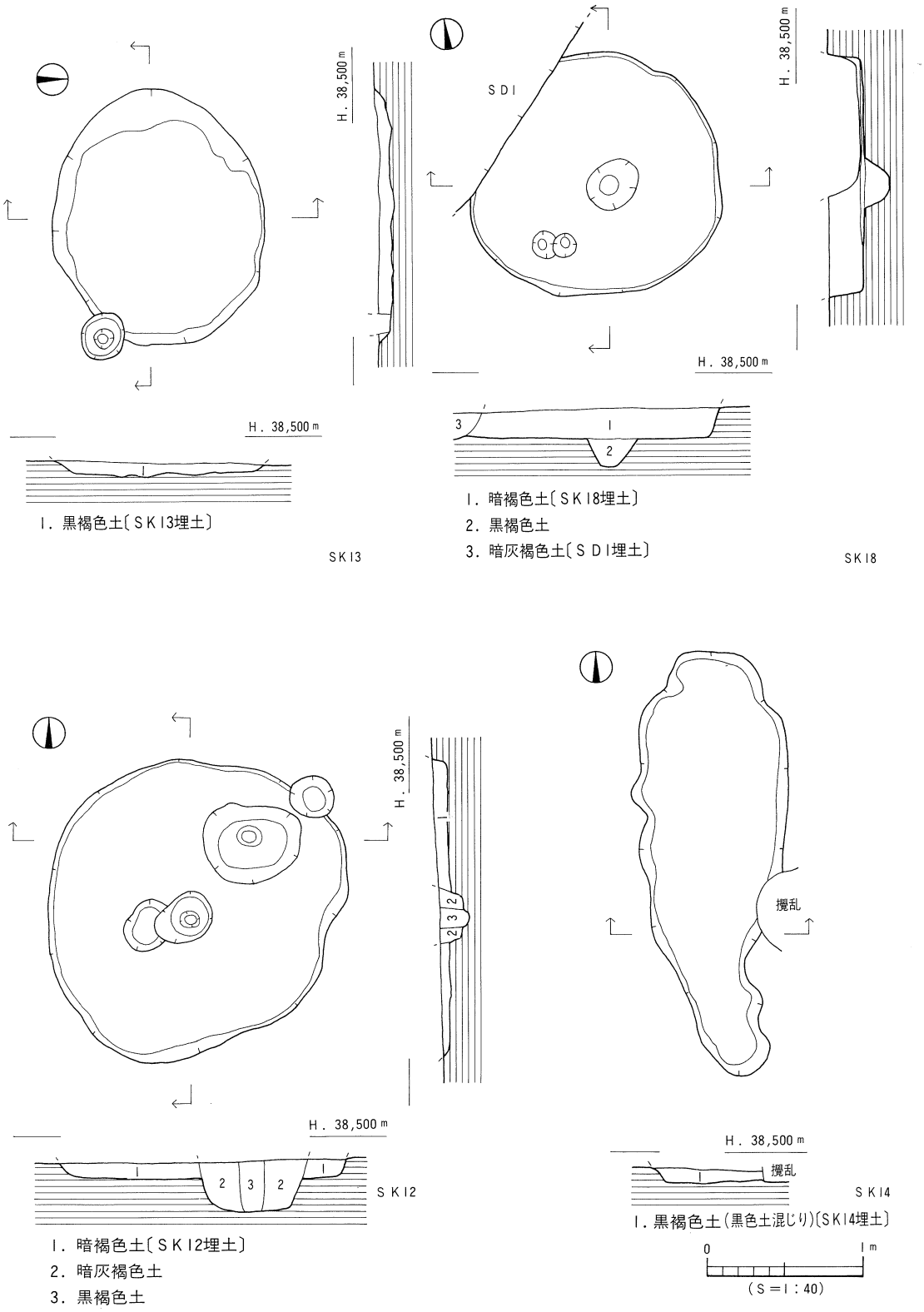
出土遺物（第36図、図版23）

84は甕形土器の口縁部小片。折り曲げにより口縁部を形成する。口縁端面に刻み目を施す。胴部の張りはみられ、胴上位にヘラ描き沈線文を４条以上施す。85は壺形土器の口縁部。口縁端部は丸くおさめる。

時期：出土遺物が僅少であり時期の特定は難しいが、概ね、本土坑の時期は弥生時代前期末～中期初頭と考えられる。



第34図　ＳＫ10〔左〕ＳＫ11〔右〕測量図



第35図　SK12～14・18測量図

ＳＫ12（第35図）

調査区西寄りＨ35・Ｉ35区に位置する。遺構北東部及び中央部はピットに切られている。平面形は円形を呈し、径1.89～1.94m、深さ10cm前後を測る。埋土は暗褐色土である。断面形は皿状を呈する。床面は比較的平坦である。

遺物は埋土中にて弥生土器片が少量出土している。図化しうるものを２点掲載した。

出土遺物（第36図）

86は甕形土器の口縁部片。短く丸味のある口縁部を貼り付ける。口縁端面に刻み目を施す。87は甕形土器の底部。わずかに上げ底を呈する。外面にタテ方向、内面にヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。

時期：遺物が小片でかつ僅少であるため時期特定は難しいが、概ね本土坑の時期は弥生時代前期末～中期初頭と考えられる。

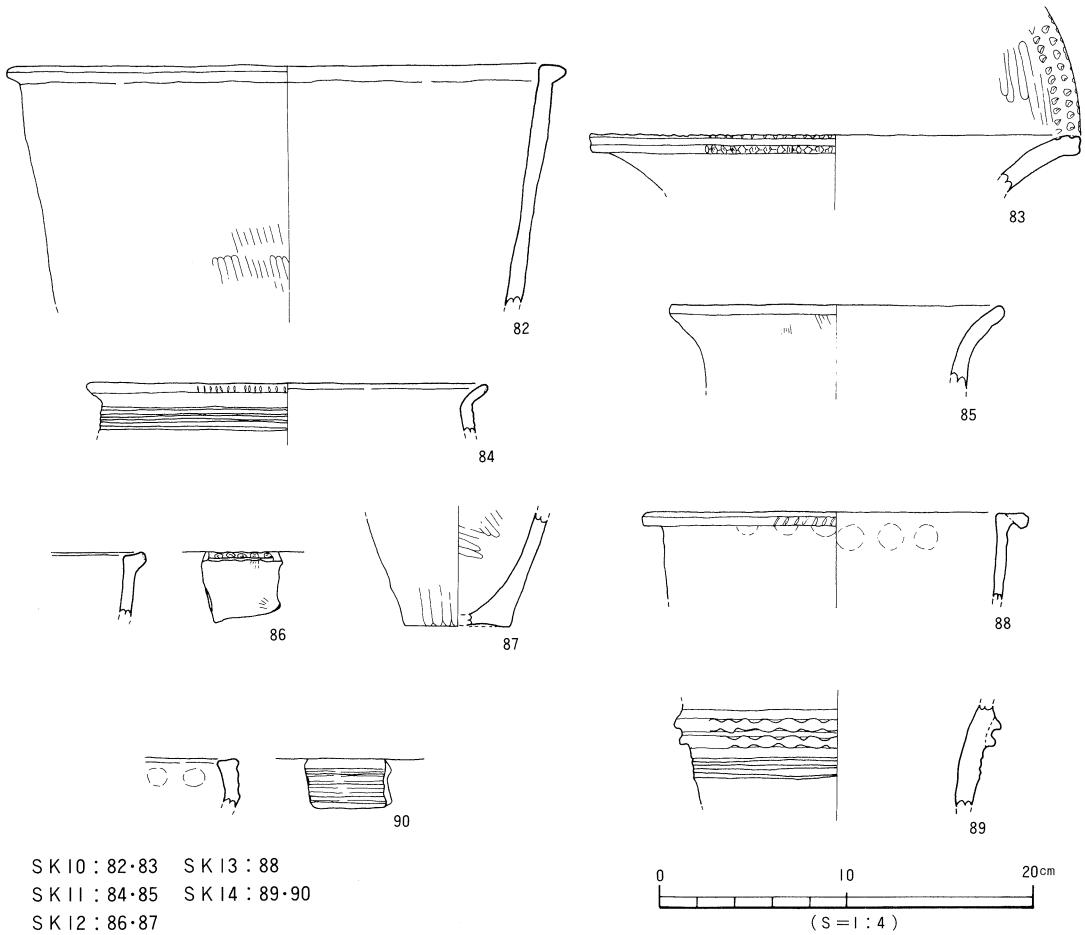
ＳＫ13（第35図）

調査区西寄りＩ34区に位置する。遺構東側は小ピットに切られている。平面形は楕円形を呈し、規模は長径1.60m、短径1.34m、深さ10cm前後を測る。断面形はレンズ状を呈し、埋土は黒褐色土である。床面は凹凸が激しく、わずかに北から南に向けて緩傾斜をなす。

遺物は埋土中にて弥生土器片が数点出土している。図化しうるものを１点掲載した。

出土遺物（第36図、図版23）

88は甕形土器の口縁部。断面方形状の口縁部を貼り付けする。口縁端面に刻み目を施す。



第36図　ＳＫ10～14出土遺物実測図

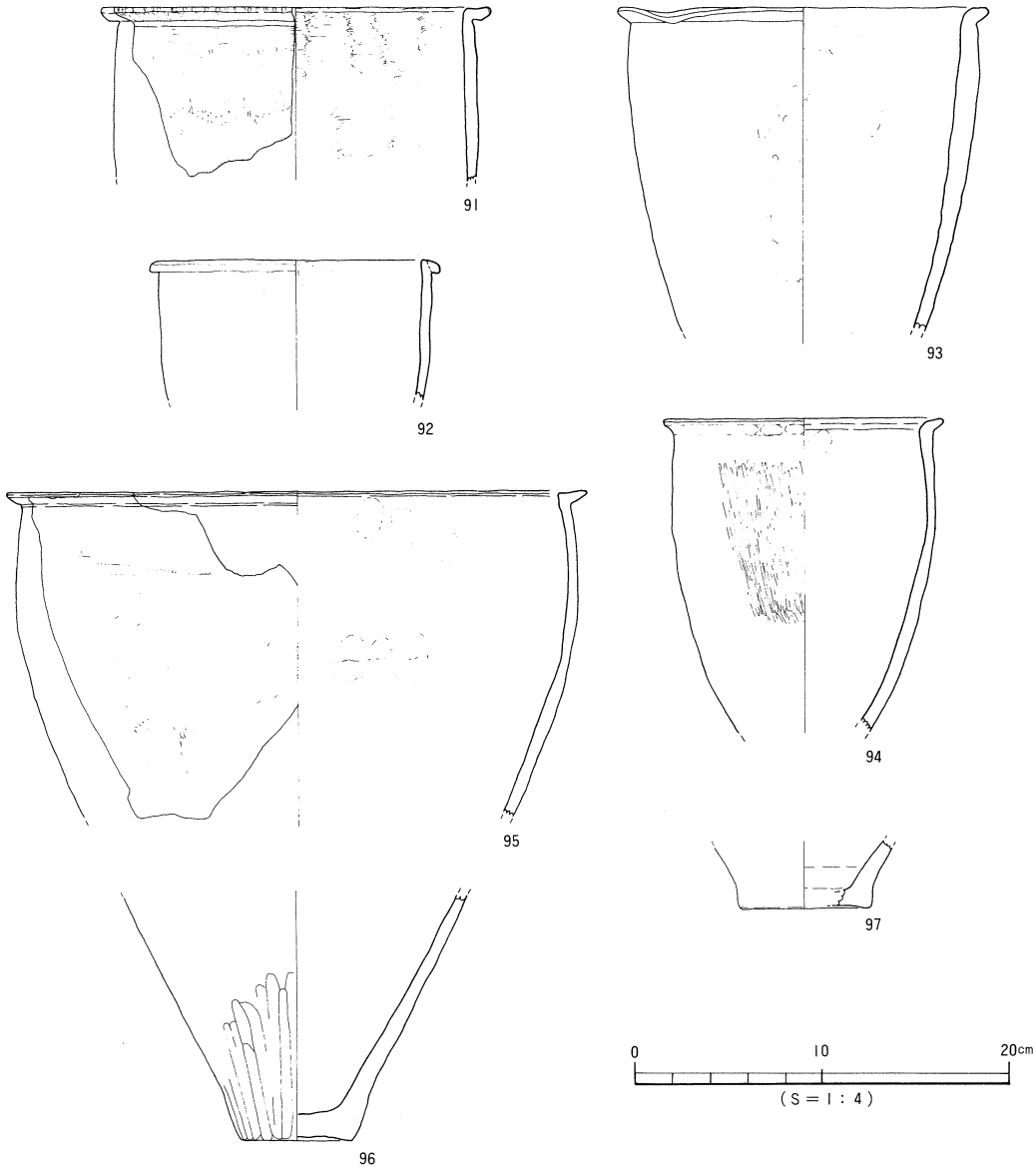
時期：出土した遺物がわずかであり時期特定は難しいが、概ね、弥生時代前期末以降の遺構と考えられる。

ＳＫ14（第35図）

調査区西寄りH33・34区に位置する。東壁中央部は攪乱により削平されている。平面形は不整の楕円形を呈し、規模は長軸2.73m、短軸1.02m、深さ８㎝前後を測る。埋土は黒褐色土に黄色土が混入するものである。断面形は浅い皿状を呈する。床面は北から南に向けてわずかに傾斜をもつ。遺物は埋土中にて弥生土器片が数点出土している。図化しうるものを２点掲載した。

出土遺物（第36図、図版23）

89は壺形土器の頸部片。断面三角形状の凸帯を２条貼り付け、凸帯上に押圧痕を残す。凸帯下にへ



第37図　ＳＫ18出土遺物実測図

ラ描きの沈線文を３条施す。90は凹線文期の高坏の坏部片。口縁端面はナデにより、わずかに凹む。３条の凹線文を施す。

時期：出土した遺物が数点であり、それぞれにわずかに時期差をもつが、概ね弥生時代前期末以降の遺構であろうと考える。

ＳＫ18（第35図、図版13）

調査区南西部Ｌ36～M36区に位置する。遺構西半部は溝ＳＤ１に切られている。平面形は円形を呈し、規模は径1.56～1.60m、深さ約20cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色土である。床面はほぼ平坦である。床面にて大小３基のピットを検出したが、本土坑に伴うものかは判断できなかった。

遺物は遺構中央部床面にて甕形土器などが横たわった状態で多数出土している。遺物の出土状況などから貯蔵穴の可能性がある。

出土遺物（第37図、図版24）

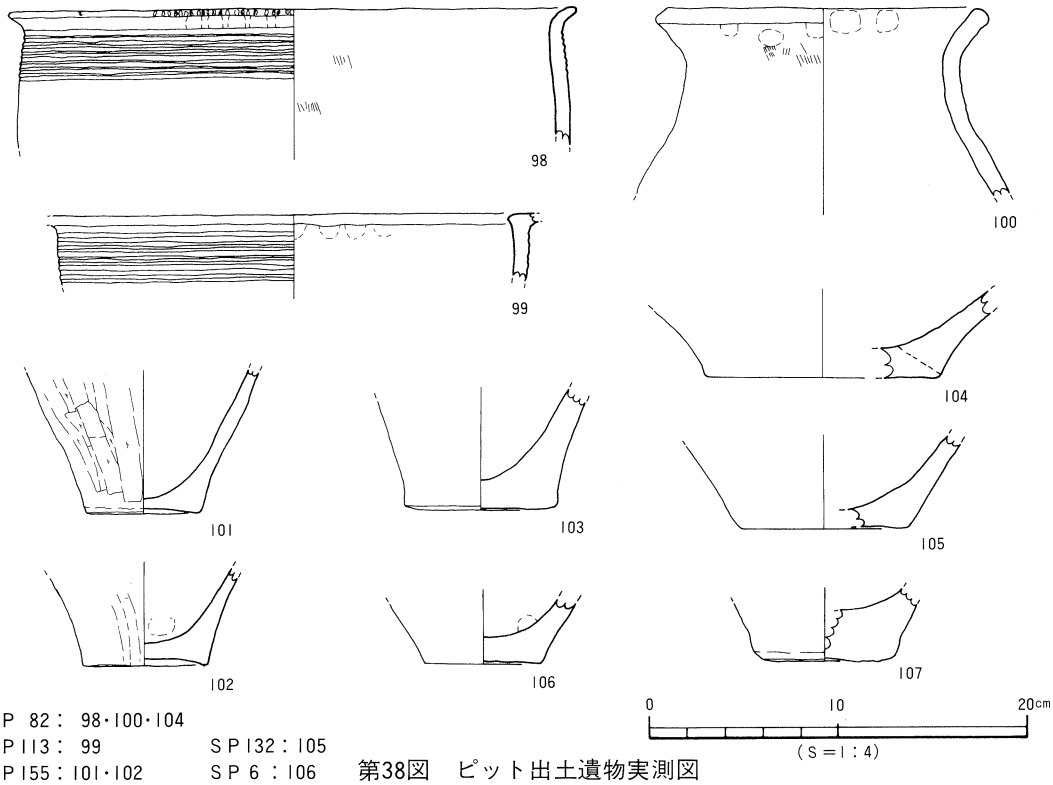
91・92・95は貼り付け、93・94は折り曲げにより口縁部を形成する甕形土器である。91のみ口縁端面に刻み目を施す。92は丸味のある断面方形の粘土紐を貼り付けする。93は器形にヒズミがみられるものである。93・94共に胴部外面に施文を施さない。95は胴部の張りが強く、口縁部が比較的長いものである。96・97は甕形土器の底部。96はわずかに上げ底を呈し、外面にヘラミガキ調整を施す。

時期：出土した遺物は出土状況などから一括性の高いものと考えられる。遺物の特徴などから本土坑の時期は弥生時代中期前半頃と考える。

(2) その他の遺構と遺物

本調査においてピット内及び包含層中から弥生時代の遺物が出土している。

１）ピット出土遺物（第38図、図版25）



ＳＰ 82： 98・100・104
ＳＰ113： 99
ＳＰ155：101・102
ＳＰ 16：103
ＳＰ132：105
ＳＰ 6 ：106
ＳＰ206：107

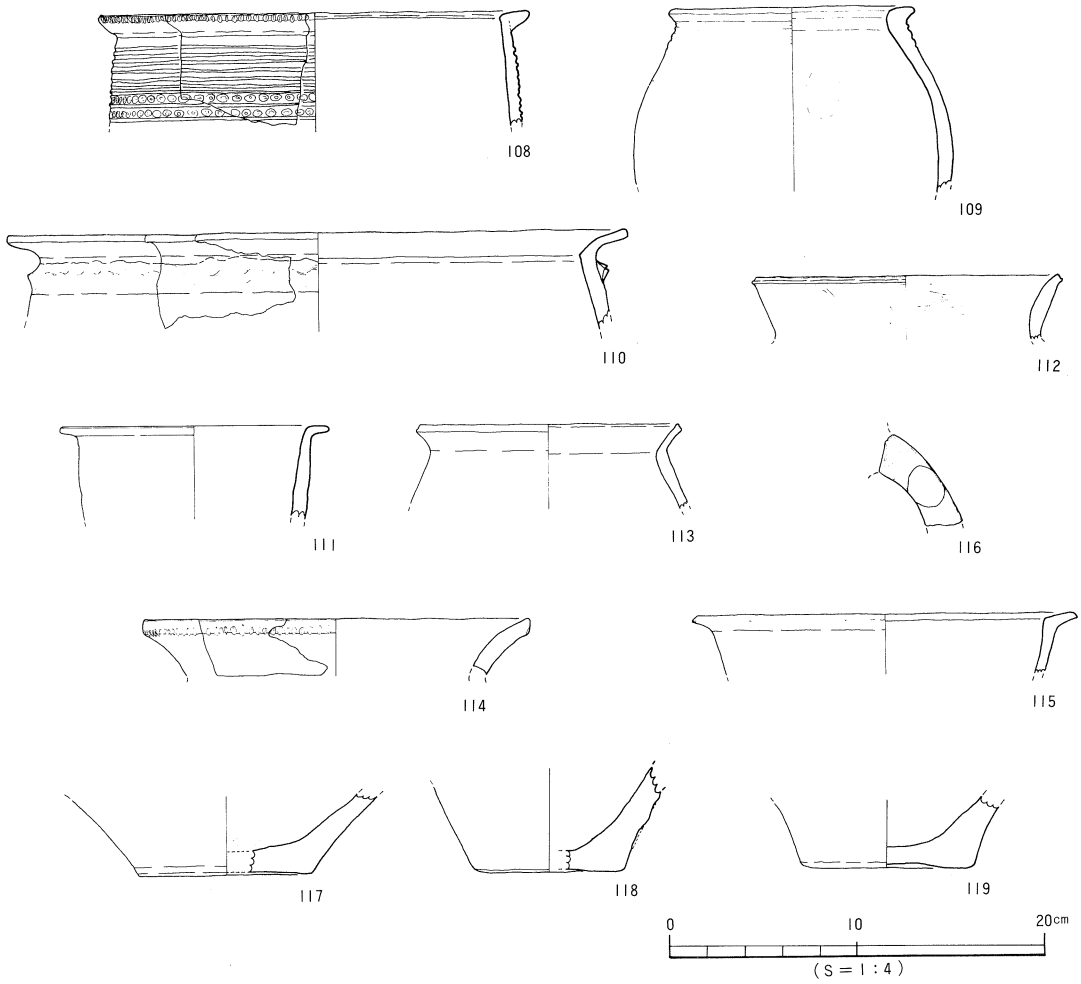
第38図　ピット出土遺物実測図

98・100・104はＳＰ82、99はＳＰ113、101、102はＳＰ155、103はＳＰ16、105はＳＰ132、106はＳＰ６、107はＳＰ206出土の弥生土器である。

98・99は甕形土器の口縁部片である。98は折り曲げにより口縁部を形成するもので、口縁端面に刻み目を施す。胴部に櫛描き沈線文を８条施す。99は貼り付けにより口縁部を形成するもので胴部に櫛描き沈線文を７条以上施す。100は壺形土器。内傾する頸部をもつものである。101～103は甕形土器の底部。平底ないしわずかに上げ底の底部となるものである。104～107は壺形土器の底部。大きくやや厚い平底のものがほとんどである。

２）包含層出土遺物（第39図、図版25）

108～113は甕形土器の口縁部である。108は貼り付けによる比較的長い口縁部をもつもので口縁端面に刻み目を施す。胴部外面にヘラ描き沈線文８条と刺突文を施す。109は折り曲げによる短い口縁部をもつもので、胴部の張りは強い。胴上位にヘラ描き沈線文を４条施す。弥生前期末～中期初頭。110は逆「Ｌ」字状口縁を呈するもので、口縁下に指頭押圧による凸帯文を貼り付けする。中期中葉。111は折り曲げ口縁をもつものである。中期前半。112･113は外反する口縁部をもつものである。後期初頭。114は壺形土器。口縁下端部に刻み目を施す。前期末～中期初頭。115は鉢形土器。外反する口縁部を



第39図　包含層(弥生時代)出土遺物実測図

もつものである。116はジョッキ形土器の把手である。117～119は壺形土器の底部。平底ないし、わずかに上げ底の底部となるものである。

〔4〕時期不明の遺構と遺物

本調査において時期比定の困難な遺構・遺物がある。遺構は切り合いや、出土遺物がなく、掘り方も不明なものや様々な時期の遺物を含むものなどである。また、遺物は包含層中より石器が３点出土しているが時期特定が難しいため時期不明遺物として掲載する。

遺構：本調査において土坑を45基検出した。そのうち時期不明なものは24基ある。遺構埋土は、黒褐色土・暗褐色土・暗灰褐色土・暗灰色土などである。ＳＫ32は不整の長方形状プランを呈する土坑で土坑内からは弥生土器・土師器・須恵器・陶器などが出土している。遺物にはかなりの時期幅があるため時期の特定は難しく時期不明遺構として扱った。出土遺物を第40図に掲載した。

ＳＫ32出土遺物（第40図、図版25）

120は須恵器坏蓋片である。121は須恵器高坏の脚部で脚中位に１条の沈線が巡る。古墳後期。122は土師器の坏である。口縁部はやや外反し、底部はわずかに上げ底状となる。底部の切り離しは回転糸切り技法による。13～14世紀。123は近世の肥前系陶器碗である。半透明のごく薄い青緑色の釉が全体を覆う。たたみ付けには、薄く目砂が付着する。124は弥生土器の壺の底部である。わずかに上げ底を呈する。

本調査検出の土坑の詳細は一覧表に記す（表11）。

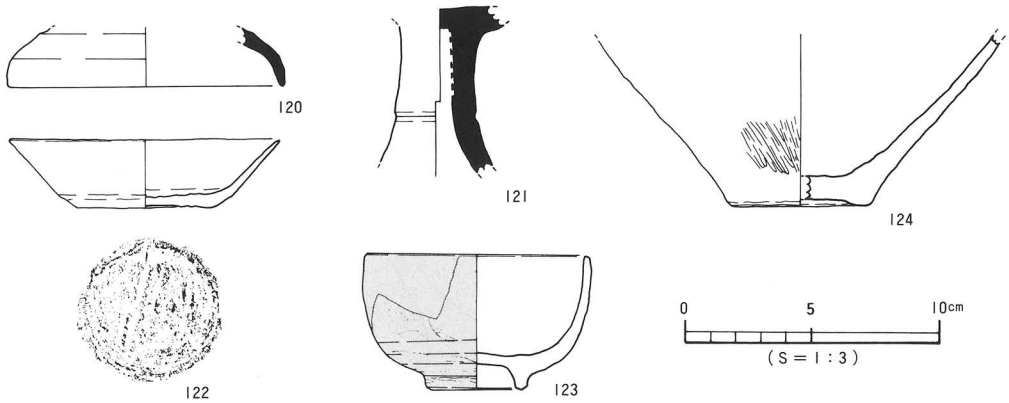
溝は７条を検出した。そのうち時期の不明のものは２条ある。ＳＤ５・６はその形状から同一の溝の可能性もある。溝内から遺物の出土はなく、明確な時期はわからない。

本調査検出の溝に関する詳細は一覧表に記す（表12）。

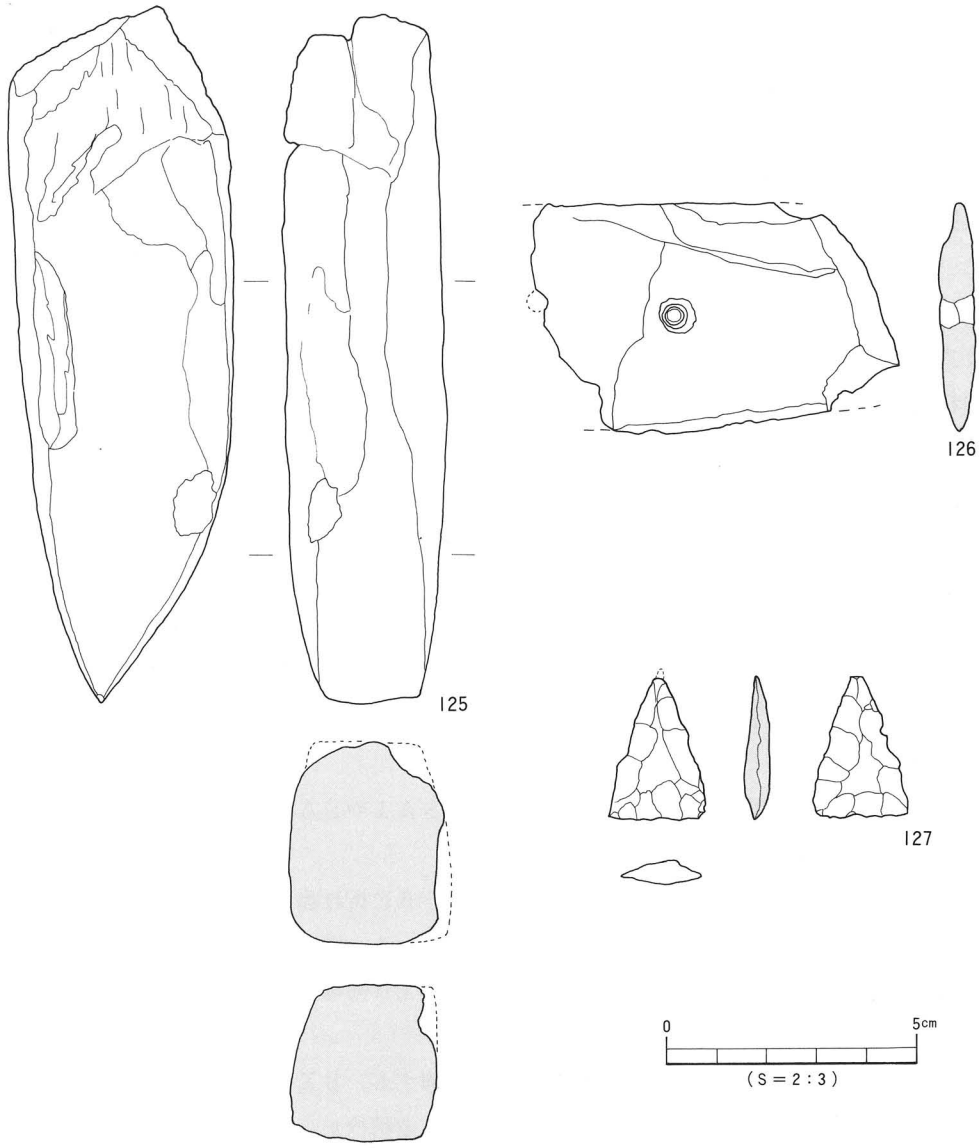
遺物：本調査において包含層中より石器３点が出土した。

包含層出土遺物（第41図、図版26）

125は、ほぼ完形品の柱状片刃石斧である。重さ304.9gを測る。結晶片岩製。126は石庖丁である。孔を２個穿つ。結晶片岩製。127は、ほぼ完形品の石鏃である。重さ2.05gを測る。サヌカイト製。



第40図　ＳＫ32出土遺物実測図



第41図　包含層出土遺物実測図

4．結　　び

本調査において、弥生時代から近世に至る遺構・遺物を検出した。とりわけ、古代においては回廊状遺構の南面とそれに付随する門を確認することができた。回廊状遺構の南東及び南西コーナーは過去の調査で確認済みではあるが、今回、これに続く柱列を新たに確認したことになる。

(1)　古　代

前述のとおり、回廊については外側柱列、内側柱列共に13間分を検出した。両柱列は柱列を構成する柱穴の平面形や規模、柱穴間隔などにおいてやや異なった様相を呈している。

まず、柱穴の平面形であるが、外側柱列が方形～長方形であるのに対し、内側柱列は円～楕円形である。規模は、外側柱列に比べ内側柱列がやや小さくなっている。深さについても第Ⅴ層上面下の数

値ではあるが、内側柱列がやや浅い掘り方となっている。各柱穴間隔は、外側柱列がほぼ等間隔であるのに対し、内側柱列は一定ではない。各柱穴の並びについても、外側柱列がほぼ一直線上になるのに対し、内側柱列は一直線上からはずれるものが多くみられる。

これらのことは、先に調査が行われている北、東、西回廊とほぼ同じ状況を示している。その他、外側柱列と内側柱列の位置関係では、外側柱列の並びに対して内側柱列は直交せず、やや東方向に柱穴の位置が振っている点は興味深い事象である。

次に、回廊に付随する門を検出した。3×2間の建物址で、東西に棟持柱が付く構造となっている。建物を構成する柱穴は方形～長方形プランを呈するが、柱掘り方や柱痕ともに回廊の柱穴にくらべ、一回り大きくなっている。各柱穴は、ほぼ等間隔に並び、建物中央部、棟持柱に続く東西に並ぶ柱穴が他の柱穴にくらべ掘り方は深くなっている。

回廊・門を構成する柱穴は、埋土は黒褐色土を基調とし、黄色土がブロック状に混入する柱穴もいくつかある。方向性についても、回廊・門ともに真北より約4°東に振った方位をとっている。柱穴内からは、須恵器片が数点出土している。小片ではあるが、遺物の特徴が概ね7世紀第3四半期、7世紀後半までは下がらないものと考えられる。よって、回廊が7世紀後半、すなわち来住廃寺創建以前のものとするこれまでの調査研究成果を補充する資料である。また、調査区の南西壁沿いに回廊を取り囲む区画溝と思われる溝を検出した。回廊外側柱列の柱筋とは約4mの幅で空間が残されている。溝内から遺物の出土はみられなかったが、過去の調査結果などをふまえたうえで、区画溝に相当する溝であると判断した。

このほか、久米官衙や寺院に絡む遺構として、柵列ＳＡ１やＳＡ２、掘立柱建物址、性格不明遺構ＳＸ１を検出した。

柵列ＳＡ１は回廊の内側に検出されたもので「Ｌ」字状に折れ曲がる形状をなす。おそらく方形状に巡るものと考えられる。回廊とほぼ同じ方位をとっている。柵列を構成する柱穴は方形～長方形プランを呈し、回廊の柱穴より一回り大きくなっている。埋土は回廊が黒褐色土を基調とするのに対し、ＳＡ１は、やや灰色が強い暗灰褐色土である。

ＳＡ１の南北柱列の一部は性格不明遺構ＳＸ１と重複する。ＳＸ１は7次調査において、すでに確認されており、今回は遺構の西半部の一部を検出した。遺構内からは来住廃寺創建期と考えられる瓦の他、須恵器・土師器片が出土している。特に瓦類は出土状況などから投棄されたものと考えられる。ＳＡ１はその性格や構造など今後の課題を残す遺構である。

ＳＡ１とＳＸ１が重複する部分は7次調査の際に何度も切り合いを確認したがＳＸ１上面ではＳＡ１は検出されなかった。遺構埋土が酷似しているため、断定はできないが、現時点ではＳＡ１がＳＸ１に先行するものと考えている。

一方、来住廃寺の寺域に関する遺構については検出されなかったが、関連する遺構として掘立柱建物址や柵列ＳＡ２を検出した。掘立柱建物址は規模の異なる3棟を検出した。掘立1は4×2間以上の大型建物址で掘立2・3は、やや小型の建物址である。遺物は、掘立1より細縄叩きを施した平瓦片が2点、掘立2より格子叩きを施した平瓦が1点出土している。いずれの建物址も回廊や柵列ＳＡ１とは異なり、柱穴埋土は暗灰色土であり、建物方位は、ほぼ真北に等しい方位をとっている。

掘立1と2は建物が重複しており、多少の時期差が考えられる。来住廃寺周辺から出土する瓦の特徴から格子叩きのものが細縄叩きのものに先行する傾向がある(丸山美和　1993)。これを踏襲すると

掘立２が掘立１に先行することになる。掘立３は出土遺物がなく時期決定は難しいが、建物方位や規模・柱穴埋土などから、掘立２とほぼ同時期の建物址と考えておく。

今回検出した３棟の掘立柱建物址は出土遺物の特徴などから、いずれも来住廃寺存続期の建物址と考えられる。このほかに、柵列ＳＡ２があげられる。全容は不明であるが、遺物方位や柱穴埋土がＳＡ１とは異なっている。建物は真北に等しい方位をとり、埋土は灰褐色を呈する。柱穴内からの遺物の出土はなく明確な時期判断は難しいが、掘立柱建物址とほぼ同様の方位をとることなどから、来住廃寺存続期の建物址と考えられる。そのほか、包含層中から古代に比定される遺物が出土している。

(2)　古墳時代

古墳時代に時期比定される遺構は土坑ＳＫ19があげられる。不定形状の土坑で回廊に先行する。土坑内からは弥生土器・土師器・須恵器が混在して出土したが、特に須恵器は瑠や坏身など形状をとどめるものが部分的に集中して出土している。炉や周壁溝などの施設は未検出であるが、規模や平面形、遺物の出土状況などから住居址の可能性も考えられる。

全体的にみて、古墳時代の遺構・遺物の検出が少ないことが目を引く。特に、古墳時代前・中期の資料はほとんどなく、後期の資料が大半を占めている。各遺構の遺存状況は決して良好なものではなく古墳期のものが削平された可能性もあるが、本調査地が古墳時代には集落が経営されなかった可能性も考えている。

来住台地上での官衙遺構を考えるうえでは、古墳時代における集落の広がりや構造を解明し、古代官衙成立以前の状況をも把握する必要性があるだろう。それとともに、松山平野における古墳時代から古代の須恵器編年を確立し、検出遺構の時期特定がスムーズに行われることを期待するものである。

(3)　弥生時代

弥生時代に時期比定される遺構は土坑９基があげられる。平面形態で円形と長方形の２つに分類される。円形の土坑は径1.5～２m前後、長方形の土坑は長軸2.5～３m前後、短軸1.5～２m前後の規模のものである。土坑内からは弥生時代前期末から中期前半に比定される遺物が出土している。特に長方形の土坑については、短軸の壁体中央部に小ピットが検出されるものが３基みられた。この種の土坑は来住台地上でのこれまでの発掘調査において比較的多く検出されており、土坑内から前期末から中期前半の遺物が出土している。しかしながら、その性格はいまだ不明な点が多い。規模的にみると、やや小さいが住居址の可能性も考えられる。松山平野における前期～中期前半の住居址は検出例が少ない。当該期の住居址を考えるうえでもこれら長方形土坑はその性格と共に研究課題のひとつとなるであろう。

また、来住台地上では、これまでの調査において、弥生時代の遺構や遺物は多数検出されているが、とりわけ前期末から中期にかけての遺構・遺物が比較的多く検出されている。今回の調査においても土坑のほか、ピットや包含層中より弥生時代前期末から中期にかけての遺物が多数検出しており、来住台地における当該期の集落の広がりを考えるうえでは、好資料となるものである。

(4)　ＳＸＩ出土瓦の概要

回廊の内側部分にて検出されたＳＸ１から軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦・熨斗瓦など来住廃寺創建期と考えられる瓦類が出土している。

軒丸瓦は小片ではあるが単弁の10弁蓮華文軒丸瓦と推測される。軒平瓦は重弧文を３重に施すもので粘土板桶巻き作りで製作されている。凹凸面に糸切り痕を残し、凸面側には叩きを施した痕跡はなく、ヨコ方向にナデイタで平滑にされている。丸瓦は２点出土しているが、凸面側には叩きの痕跡は

ない。平瓦は凹面に格子・斜格子を施すものがそれぞれ１点ずつ、叩き目をナデ消したものが１点である。

また、平瓦を転用した平蓋式の瓦が２点出土している。ともに釘穴は穿たれておらず、凸面側にはそれぞれ別の格子叩きを施している。熨斗瓦は１点出土している。凸面側に斜格子叩きを施すもので、桶巻き作りで製作した平瓦を半裁したものである。以上のように、ＳＸ１出土瓦は凸面側には格子及び斜格子叩きを施すものが大半を占めている。

過去の調査では、寺院に関する遺構周辺から出土している平瓦は、ほとんどが縄目叩きを施している。逆に回廊と同一軸方向をなす遺構周辺からは、斜格子・格子叩きが大半を占めている。ＳＸ１出土の平瓦には縄目叩きを施したものはなく、ほとんどが格子叩きであることなどから、寺院建立後、寺院に先行して存在していた施設に使用された瓦と考えられる。

〔参考文献〕

西尾　幸則　1993　『来住廃寺遺跡第15次調査報告書』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

1989　「来住廃寺跡寺域調査」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会

樋口　隆康　1982　『丹波周山窯跡』京都大学文学部考古学研究室

佐原　　真　1972　「平瓦桶巻き作り」『考古学雑誌 第58巻 2号』

橋本　雄一　1994　「来住廃寺22次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報VI』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

小笠原好彦
森　　光晴　1979　『来住廃寺』松山市教育委員会

丸山　美和　1993　「来住廃寺出土瓦について」『来住廃寺遺跡第15次調査報告書』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

遺構・遺物観察表

―凡　例―

(1)　以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2)　遺構の一覧表中の出土遺物欄は略記した。

例）弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器

(3)　遺物観察表の各記載について

法量欄　　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記した。

例）口→口縁部、胴→胴部、底→底部、天→天井部、坏上→坏部上部、坏下、坏部下部、脚柱→脚部柱部、脚裾→脚部裾部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製士

（　）内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（１～３）→「１～３㎜大の石英・長石を含む」である。

焼成欄では焼成具合を略記した。

例）◎→良好、○→良、△→不良

表 2　回廊状遺構 柱穴（外側）一覧

柱穴（SP）	地　区	平面形	柱痕	柱穴埋土	柱穴規模 長さ×幅×深さ(m)	柱痕規模 長さ×幅×深さ(m)	出土遺物	備　　考
1	L36	方形	○	黒褐色土	0.74×0.74×0.24	0.18×0.18×0.32	須恵・弥生	
2	L36	長方形	○	Ⓛ黒褐色土 Ⓟ黒褐色土（黄色土混入）	0.80×0.71×0.24	0.18×0.18×0.22	弥生	SD1を切る
3	L35	方形	○	Ⓛ黒褐色土 Ⓟ黒褐色土（黄色土混入）	0.88×0.78×0.26	0.20×0.19×0.37		
4	L35	方形	○	黒褐色土	0.84×0.74×0.16	0.18×0.18×0.14		
5	L34	長方形	○	Ⓛ黒褐色土 Ⓟ黒褐色土（黄色土混入）	0.80×0.64×0.25	0.17×0.17×0.26		
6	L33	方形	○	Ⓛ黒褐色土 Ⓟ黒褐色土（黄色土混入）	0.56×0.48×0.30	0.17×0.17×0.32		
7	L33	不整長方形	○	Ⓛ黒褐色土 Ⓟ黒褐色土（黄色土混入）	0.96×0.66×0.30	0.18×0.18×0.29		
8	L32	方形	○	黒褐色土	0.56×0.55×0.20	0.19×0.18×0.19		
9	L32	長方形	○	黒褐色土（黄色土混入）	0.80×0.60×0.18	0.19×0.18×0.32		
10	L31・M31	方形	○	Ⓛ黒褐色土 Ⓟ黒褐色土（黄色土混入）	0.96×0.72+α×0.24	0.20×0.19×0.28		
11	L30～M31	不整方形	○	黒褐色土	0.80×0.68×0.22	0.24×0.22×0.20		
12	M30	長方形	○	黒褐色土	0.90×0.54×0.32	0.20×0.18×0.31		
13	M29	方形	○	黒褐色土	0.83×0.51×0.16	0.17×0.17×0.17		
14	M29	不整方形	○	黒褐色土	0.72×0.57×0.14	0.17×0.17×0.17		
15	M24	円形	○	黒褐色土	0.56×0.35×0.22	0.18×0.17×0.24		

表 3　回廊状遺構 柱穴（内側）一覧　(1)

柱穴（SP）	地　区	平面形	柱痕	柱穴埋土	柱穴規模 長さ×幅×深さ(m)	柱痕規模 長さ×幅×深さ(m)	出土遺物	備　　考
1	K36	円形	○	黒褐色土	0.66×0.64×0.16	0.22×0.22×0.14		SK19を切る
2	K36	円形	○	黒褐色土	0.54×0.50×0.17	0.21×0.21×0.24		SK19を切る
3	K35	円形		黒褐色土	0.48×0.42×0.17			
4	K34～L35	方形	○	Ⓛ黒褐色土 Ⓟ黒褐色土（黄色土混入）	0.57×0.56×0.17	0.17×0.16×0.27		
5	K34・L34	円形	○	黒褐色土	0.72×0.62×0.16	0.16×0.16×0.16		
6	L33	円形		黒褐色土	0.40×0.32×0.14			
7	L33	不整楕円形	○	黒褐色土（黄色土混入）	1.00×0.64×0.19	0.18×0.17×0.24		
8	L32	方形	○	黒褐色土（黄色土混入）	0.80×0.70×0.16	0.18×0.18×0.19		
9	L32	円形		黒褐色土	0.57×0.49×0.13			

回廊状遺構 柱穴（内側）一覧

(2)

柱穴（SP）	地　区	平面形	柱痕	柱穴埋土	柱穴規模 長さ×幅×深さ(m)	柱痕規模 長さ×幅×深さ(m)	出土遺物	備　　考
10	L31	円形		黒褐色土(黄色ブロック含む)	0.57×0.42＋α×0.16			
11	L30・31	不整方形	○	ⓐ黒褐色土 ⓑ黒褐色土(黄色ブロック含む)	0.84×0.64×0.24	0.16×0.16×0.21		
12	L30	円形	○	黒褐色土（黄色土混入）	0.49×0.43×0.16	0.19×0.17×0.15		SK31を切る
13	L29	円形	○	黒褐色土	0.40×0.40×0.19	0.16×0.16×0.20		
14	L28・29	円形	○	黒褐色土（黄色土混入）	0.52×0.51×0.17	0.16×0.16×0.16		SK35を切る
15	L23	不整円形		黒褐色土(黄色ブロック含む)	0.56×0.52×0.13			

表 4　回廊状遺構 柱穴間隔一覧

柱穴間	外側柱穴間隔(m)	内側柱穴間隔(m)
1—2	1.90	1.62
2—3	1.62	1.82
3—4	1.92	1.98
4—5	1.76	1.98
5—6	1.74	1.76
6—7	1.84	1.92
7—8	1.90	1.80
8—9	1.80	1.74
9—10	1.66	1.68

柱穴間	外側柱穴間隔(m)	内側柱穴間隔(m)
10—11	1.98	1.82
11—12	1.54	1.84
12—13	2.06	1.88
13—14	1.86	1.98

柱穴間	外側柱穴間隔(m)	内側柱穴間隔(m)
最大値	2.06	1.98
最小値	1.54	1.62
平均値	1.81	1.83

表 5　回廊状遺構 外側柱穴－内側柱穴間隔一覧

柱穴番号	外側－内側柱穴間隔(m)
1	2.46
2	2.40
3	2.16
4	1.82
5	1.80
6	1.80
7	2.08

柱穴番号	外側－内側柱穴間隔(m)
8	1.90
9	1.80
10	1.90
11	1.88
12	1.96
13	1.90
14	2.22

柱穴間	外側－内側柱穴間隔(m)
最大値	2.46
最小値	1.80
平均値	2.00

表6　門柱穴一覧

柱穴(SP)	地　区	平面形	柱痕	柱穴埋土	柱穴規模 長さ×幅×深さ(m)	柱痕規模 長さ×幅×深さ(m)	出土遺物	備　　考
1	L28	楕円形	○	暗灰褐色土	1.16×0.80×0.12	0.30×0.28×0.12		
2	L26・27	楕円形	○	暗灰褐色土（黄色土混入）	1.26×0.82×0.16	0.30×0.28×0.16	弥生	
3	L25・26	方形	○	暗灰褐色土	0.84×0.78×0.10	0.29×0.28×0.10		
4	L24・25	不整円形	○	暗灰褐色土	1.00×0.92×0.17	0.38×0.35×0.19		
5	N25	方形	○	暗灰褐色土	1.20×0.90+α×0.14	0.24×0.36+α×0.16		調査区外に続く
6	N26	不整方形	○	暗灰褐色土	1.56×0.82+α×0.12	0.37×0.36×0.16		調査区外に続く
7	N27	不整円形	○	暗灰褐色土	1.00×0.77+α×0.08	0.32×0.26+α×0.15		撹乱に削平される
8	N28	円形	○	暗灰褐色土	1.00×0.88×0.08	0.36×0.35×0.15		
9	M28	不整方形	○	暗灰褐色土（黄色土混入）	0.84×0.82×0.16	0.24×0.22×0.15		
10	M27・28	長方形	○	Ⓑ暗灰褐色土(黄色ブロック混入) Ⓚ暗灰褐色土	1.18×0.80×0.36	0.22×0.21×0.33		
11	M27	円形	○	Ⓑ暗灰褐色土(黄色土混入) Ⓚ暗灰褐色土	1.00×1.00×0.38	0.24×0.22×0.37		
12	M26	方形	○	暗灰褐色土	0.94×0.90×0.32	0.26×0.22×0.30	須恵	
13	M25	円形	○	暗灰褐色土	0.80×0.66×0.30	0.28×0.24×0.28		
14	M24	円形	○	暗灰褐色土	0.62×0.60+α×0.11	0.20×0.20×0.11		撹乱に削平される

表7　ＳＡ１柱穴一覧

(1)

柱穴(SP)	地　区	平面形	柱痕	柱穴埋土	柱穴規模 長さ×幅×深さ(m)	柱痕規模 長さ×幅×深さ(m)	出土遺物	備　　考
1	(6AKA-G) Y31	方形	○	暗灰褐色土	0.68×0.30+α×0.25	0.20×0.20×0.25		
2	A31	方形	○	暗灰褐色土（黄色土混入）	0.70×0.60×0.22	0.20×0.18×0.22		
3	B31・32	方形	○	Ⓑ暗灰褐色土 Ⓚ暗灰褐色土(黄色土混入)	0.85×0.72×0.28	0.28×0.26×0.25		
4	C31・32	円形	○	暗灰褐色土（黄色土混入）	1.02×0.90×0.30	0.22×0.22×0.25		
5	C31・32	楕円形	○	暗灰褐色土（黄色土混入）	1.11×0.85×0.25	0.23×0.22×0.22		
6	D32	方形		暗灰褐色土	0.60×0.60×0.11			ＳＸ１と重複
7	E32	円形		暗灰褐色土	0.83×0.80×0.20			ＳＸ１と重複
8	G32	方形	○	暗灰褐色土（黄色土混入）	1.00×0.82×0.15	0.25×0.22×0.17		
9	H32	方形		Ⓑ暗灰褐色土(黄色土混入) Ⓚ暗灰褐色土	0.95×0.90×0.18			
10	H31	方形	○	暗灰褐色土（黄色土混入）	0.82×0.80×0.20	0.22×0.22×0.20		
11	H30	長方形	○	Ⓑ暗灰褐色土(黄色土混入) Ⓚ暗灰褐色土	1.11×0.75×0.20	0.28×0.28×0.18		

ＳＡ１柱穴一覧

(2)

柱穴(ＳＰ)	地　区	平面形	柱痕	柱穴埋土	柱穴規模 長さ×幅×深さ(m)	柱痕規模 長さ×幅×深さ(m)	出土遺物	備　　考
12	H29・30	長方形	○	Ⓐ暗灰褐色土(黄色土混入) Ⓑ暗灰褐色土	0.82×0.62×0.16	0.22×0.22×0.15		
13	H29	円形	○	暗灰褐色土	0.52＋α×0.52×0.25	0.21＋α×0.21×0.28		撹乱に切られる
14	H28	円形	○	Ⓐ暗灰褐色土(黄色土混入) Ⓑ暗灰褐色土	0.88×0.70×0.15	0.20×0.20×0.14		
15	H28・Ｉ28	円形	○	暗灰褐色土（黄色土混入）	0.90×0.80×0.20	0.25×0.24×0.25		
16	H26～Ｉ27	円形	○	暗灰褐色土（黄色土混入）	0.90×0.85×0.18	0.20×0.20×0.18		
17	H26・Ｉ26	楕円形	○	暗灰褐色土（黄色土混入）	0.80×0.62×0.13	0.28×0.26×0.20		ＳＫ25を切る
18	Ｉ25	楕円形	○	暗灰褐色土（黄色ブロック含む）	0.90×0.70×0.16	0.30×0.28×0.18		
19	Ｉ24	円形	○	暗灰褐色土（黄色ブロック含む）	0.75×0.65×0.12	0.28×0.28×0.12		
20	Ｉ23・24	楕円形	○	暗灰褐色土（黄色ブロック含む）	0.78×0.58×0.12	0.27×0.25×0.12		

表８　ＳＡ１柱穴間隔一覧

柱穴間	柱穴間隔(m)
１－２	2.40
２－３	2.14
３－４	2.48
４－５	2.20
５－６	2.20
６－７	4.43
７－８	4.85
８－９	2.20

柱穴間	柱穴間隔(m)
最大値	2.48
最小値	2.14
平均値	2.27

＊柱穴間６－７・７－８についてはＳＡ１が性格不明遺構ＳＸ１と重複して２基の柱穴が未検出である。そのため柱穴間隔は他のものより大きい数値になっている。平均値を求める場合、これら２箇所の数値は省いている。

柱穴間	柱穴間隔(m)	柱穴間	柱穴間隔(m)
９－10	2.30	17－18	2.20
10－11	2.25	18－19	2.35
11－12	2.30	19－20	2.20
12－13	1.80		
13－14	2.80		
14－15	2.26		
15－16	2.28		
16－17	2.25		

柱穴間	柱穴間隔(m)
最大値	2.80
最小値	1.80
平均値	2.27

表９　ＳＡ２柱穴一覧

柱穴(ＳＰ)	地　区	平面形	柱痕	柱穴埋土	柱穴規模 長さ×幅×深さ(m)	柱痕規模 長さ×幅×深さ(m)	出土遺物	備　　考
1	A36	円形	○	灰褐色土	0.74×0.73×0.12	0.21×0.20×0.24		
2	A35	方形	○	Ⓐ灰褐色土 Ⓑ茶褐色土	0.75×0.75×0.12	0.18×0.16×0.23		
3	A35	円形	○	灰褐色土	0.90×0.82×0.12	0.25×0.23×0.14		
4	A34	方形	○	灰褐色土	0.67×0.61×0.12	0.26×0.24×0.16		
5	A33	方形	○	灰褐色土（黄色土混入）	0.62×0.59×0.20	0.28×0.24×0.26		
6	A33	(円形)	○	灰褐色土		0.28×0.26×0.20		柱痕のみ
7	A32	方形	○	灰褐色土	0.91×0.42＋α×0.14	0.20×0.12×0.18		

表10　掘立柱建物址一覧

掘立	方位	規模（間）	桁行		梁行		床面積（㎡）	備考	時期
			実長（m）	柱間寸法（m）	実長（m）	柱間寸法（m）			
1	東西	4×2＋α	8.80	2.3・2.0・2.3・2.2	7.3	2.8・2.8・（1.7）	64.24		古代
2	東西	2×2＋α	5.80	2.2・2.2・（1.4）	3.90	2.0・1.9	22.62	ＳＫ１を切る	古代
3	東西	5×1	8.30	1.6・1.6・1.7・1.7・1.7	3.70	3.70	30.71	ＳＫ２を切る	古代

表11　土坑一覧

（1）

土坑（ＳＫ）	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ（m）	埋土	出土遺物	時期	備考
1	A35～B35	円形	皿状	2.50×1.82×0.09	暗褐色土	弥生・土師	古代以前	掘立１に切られる １区
2	A32～B32	長方形	皿状	2.98×2.02×0.34	黒褐色土	弥生	弥生前期末～中期初頭	掘立１に切られる １区
3	G31	方形	皿状	0.90×0.62×0.12	暗灰褐色土		古代以前	ＳＸ１に切られる ２区
4	E34・F34	方形	レンズ状	1.96×1.74×0.12	黒褐色土		古代以前	ＳＸ１に切られる ２区
5	E35～F36	円形	皿状	1.36×1.22×0.11	黒褐色土		不明	２区
6	F35・36	不整長方形	逆台形状	1.87×1.41×0.50	黒褐色土	弥生	弥生前期末～中期初頭	２区
7	G35・36	円形	皿状	1.03×0.90×0.10	暗赤褐色土		弥生以降	ＳＫ８を切る ２区
8	G35・36	長方形	逆台形状	2.53×1.56×0.14	暗褐色土	弥生	弥生前期末～中期初頭	ＳＫ７に切られる ２区
9	G34～H34	不整長方形	レンズ状	3.22×1.78×0.11	黒褐色土		不明	２区
10	G36～H36	円形	レンズ状	1.90×0.68×0.13	暗褐色土	弥生	弥生中期	２区
11	H35・36	円形	レンズ状	1.21×1.18×0.14	黒褐色土	弥生	弥生前期末～中期初頭	２区
12	H35・I35	円形	皿状	1.94×1.89×0.10	暗褐色土	弥生	弥生前期末～中期初頭	２区
13	I34	楕円形	レンズ状	1.60×1.34×0.10	黒褐色土	弥生	弥生前期末～中期初頭	２区
14	H33・34	不整楕円形	皿状	2.73×1.02×0.08	黒褐色土（黄色土混じり）	弥生	弥生中期後半以降	２区
15	M32	長方形	皿状	1.70×0.90×0.06	暗褐色土		不明	３区
16	M32・33	長方形	逆台形状	1.62×0.90×0.12	暗褐色土		不明	３区
17	E35	方形	皿状	1.65×1.55×0.11	暗赤褐色土		不明	２区
18	L36～M36	円形	逆台形状	1.60×1.56×0.20	暗褐色土	弥生	弥生中期初頭	ＳＤ１に切られる ３区
19	K36・37	不整方形	逆台形状	3.90×3.88×0.15	暗灰色土	弥生・土師・須恵	古墳後期～古代	回廊に切られる ３区

土坑一覧

(2)

土坑(ＳＫ)	地　区	平面形	断面形	規　模 長さ×幅×深さ(m)	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
20	J36～L37	不定形	皿状	1.81×1.74×0.06	暗灰色土		古墳後期～古代	ＳＫ19床面検出 3区
21	K32	長方形	レンズ状	1.80×1.50×0.12	暗褐色土		不明	3区
22	K35	円形	皿状	1.20×0.80×0.12	暗褐色土	須恵	古墳後期以前	ＳＤ4に切られる 3区
23	M35	長方形	皿状	1.58×0.76×0.12	暗褐色土		不明	3区
24	I36～H37	円形	レンズ状	2.00×2.00×0.12	暗灰色土		不明	2～3区
25	I26・J26	不整楕円形	皿状	3.22×2.16×0.10	㊤暗灰色土 ㊦暗灰褐色土		古代以前	ＳＡ1に切られる 4区
26	J31～K32	不定形	レンズ状	4.30×1.80×0.12	暗褐色土		不明	3区
27	G26～H27	不整長方形	レンズ状	1.00×0.90×0.12	暗灰色土		不明	ＳＫ28を切る 4区
28	H27	方形	レンズ状	1.42×1.24×0.07	暗灰褐色土		不明	ＳＫ27に切られる 4区
29	I29～J30	不整方形	レンズ状	3.50×2.68×0.37	暗灰褐色土		不明	ＳＫ30に切られる 4区
30	I30	不整円形	皿状	1.24×1.13×0.24	暗灰色土		不明	ＳＫ29を切る 4区
31	K29～L30	不整楕円形	皿状	2.64×1.88×0.11	㊤暗褐色土 ㊦暗灰色土 (黄色土混じり)		古代以前	回廊に切られる 4区
32	J30・K30	不整楕円形	皿状	2.87×1.95×0.04	灰褐色土		不明	4区
33	M29～N30	不整方形	レンズ状	2.55×1.97×0.16	暗灰褐色土		不明	4区
34	J27～K28	不定形	皿状	4.22×2.50×0.10	暗灰色土		不明	ＳＫ44を切る 4区
35	K28～L29	不定形	レンズ状	3.42×3.40×0.44	暗褐色土		古代以前	回廊に切られる 4区
36	L28・M28	不整方形	逆台形状	1.93×1.65×0.18	㊤暗褐色土 ㊦暗灰色土		古代以前	回廊に切られる 4区
37	J26	不整楕円形	レンズ状	2.08×1.95×0.04	暗灰褐色土		不明	4区
38	I29・J29	円形	皿状	1.40×1.35×0.15	暗灰褐色土		不明	4区
39	L24	円形	逆台形状	1.57×1.36×0.56	㊤暗灰褐色土 ㊦暗灰色土		古代以降	ＳＤ7を切る 4区
40	G25～H25	円形	皿状	1.71×0.48×0.14	暗灰褐色土		不明	4区
41	K25	不定形	皿状	2.60×1.40×0.12	暗灰色土		不明	ＳＤ5・6に切られる 4区
42	K26	方形	皿状	1.09×1.05×0.06	暗灰色土		不明	4区

土坑一覧

(3)

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
43	K25・26	不整楕円形	皿状	1.54×0.74×0.10	暗灰色土		不明	SD5に切られる 4区
44	K27	方形	皿状	0.93×0.84×0.10	暗灰褐色土		不明	SK34に切られる 4区
45	H26	楕円形	皿状	0.92×0.89×0.11	暗灰褐色土		不明	4区

表12 溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	L35～M36	皿状	5.50×0.94×0.21	暗灰色土	弥生・土師	古代以前	SK18を切る SD3に切られる 3区
2	L37～M37	レンズ状	2.17×0.70×0.14	暗灰色土		古代以前	SD1と重複 3区
3	M34～N36	レンズ状	6.25×0.59×0.12	灰褐色土	土師	古代	区画溝 SD1を切る 3区
4	J35～K36	レンズ状	1.46×0.84×0.13	暗灰色土		古墳後期～古代	SK19と重複 SK22を切る 3区
5	J25～K26	皿状	6.36×0.80×0.13	灰褐色土		不明	SK41・43を切る 4区
6	K24～L24	皿状	2.56×0.46×0.04	灰褐色土		不明	SK41を切る 4区
7	L24～M23	皿状	8.16×1.62×0.10	灰褐色土	土師	古代以降	回廊を切る 4区

表13 回廊状遺構・門出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外側) (内側)	胎土 焼成	備考	図版
1	坏蓋	口径 (11.0) 残高 2.5	天井部と口縁部を分ける稜は消失し口縁部は内湾気味に下がる。口縁端部は丸く仕上げる。1/8の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	回廊 外列1	14
2	坏身	残高 2.0	たちあがりは欠損。受部は上外方にのび、端部は尖り気味に丸く仕上げる。1/6の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	回廊 外列1	14
3	坏身	残高 2.9	たちあがりは内傾し、端部は丸く仕上げる。受部は上外方にのび、端部は尖る。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰褐色	密 ◎	門12	14
4	甕	底径 (7.2) 残高 7.2	上げ底を呈する甕の底部。底部付近外面に媒が付着する。1/3の残存。	胴ヘラミガキ 底ナデ	ナデ	赤橙色 赤褐色	石・長(1～3) ◎	回廊 外列2	14
5	甕	底径 (6.8) 残高 4.1	平底の甕の底部。1/6の残存。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	砂粒 ◎	回廊 外列1	14
6	甕	底径 (6.6) 残高 3.0	わずかに外方に突出する平底の甕の底部。1/4の残存。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳黄色 乳黄褐色	石・長(1～6) ◎	門2	14
7	壺	底径 5.6 残高 4.2	わずかに上げ底を呈する壺の底部。底部外面に粘土接合痕を残す。内外面に指頭痕あり。	胴ハケ(7～8本/1cm)→ナデ 底ナデ	ナデ（指頭痕）	赤褐色 暗褐色	石・長(1～3) 金 ◎	門2	14

表14　掘立1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外側)(内側)	胎土 焼成	備考	図版
8	坏	口径 (16.2) 残高 3.6	口縁部は内湾し、端部は丸い。口縁部に凹みあり。器壁は薄い。⅙の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎	SP55	14
9	坏	口径 (11.3) 残高 2.7	内湾する口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。口縁中位がやや膨らむ。⅙の残存。	ヨコナデ	磨滅の為不明	黒褐色 赤褐色	長 (1) ◎	SP76	14
10	皿	口径 (13.9) 残高 2.1	内湾する口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。小片。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳赤褐色 乳赤褐色	石・長 (1) ◎	SP7	
11	皿	口径 (14.0) 残高 2.0	口縁下位でわずかに屈曲し、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く仕上げる。小片。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳赤褐色 乳赤褐色	石・長 (1) ◎	SP73	14
12	皿	底径 (10.2) 残高 1.6	平底の底部。胴部は内湾気味に立ち上がる。口縁部欠損。⅙の残存。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳赤褐色 乳赤褐色	石・長 (1) ◎	SP55	
13	皿	底径 (8.4) 残高 0.6	平底の底部。器壁は薄い。小片。	(胴)ヨコナデ (底)磨滅の為不明	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密 ◎	SP73	
14	坏蓋	口径 (13.6) 残高 3.8	扁平な天井部からなだらかに口縁部に下がり、口縁端部は丸く仕上げる。口縁端外面に面取り痕あり。	(天)回転ヘラケズリ½ (口)回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎	SK95	14
15	坏蓋	口径 (12.0) 残高 1.6	垂下する口縁部。口縁端部はわずかに内傾する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SP60	
16	坏	底径 (7.1) 残高 2.2	円盤高台の付く坏。胴部はやや内湾気味に立ち上がる。底部の切り離しは回転ヘラ切り技法による。	(口)回転ナデ (回)転ヘラケズリ→ナデ	回転ナデ (一部ナデ)	灰色 灰色	密 ◎	SP43	14

表15　掘立1出土遺物観察表　瓦製品

番号	種類	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	調整 凸面	調整 凹面	色調	胎土	焼成	備考	図版
17	平瓦	7.0	13.1	2.7	425	細縄叩き	布目痕 糸切り痕	暗灰色	ち密	硬	SP67	15
18	平瓦	12.0	9.6	2.9	464	細縄叩き	布目痕	乳白色	やや密	軟	SP7	15

表16　掘立2出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外側)(内側)	胎土 焼成	備考	図版
19	坏	口径 (13.3) 残高 2.9	口縁下位で、内方に屈曲し、口縁部は直立する。口縁端部は丸く仕上げる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	SP99	15
20	高坏	口径 (16.8) 残高 2.6	無蓋高坏の坏部か。中位で稜をなし、口縁部はやや外反する。口縁端部はわずかに内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP99	15

表17　掘立2出土遺物観察表　瓦製品

番号	種類	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	調整 凸面	調整 凹面	色調	胎土	焼成	備考	図版
21	平瓦	13.0	12.0	2.5	600	斜格子叩き	布目痕 糸切り痕	灰色	ち密	硬	SP99	15

表18　ＳＸ１出土遺物観察表　瓦製品

番号	種　類	法　量				調　整		色　調	胎土	焼成	備考	図版
		長さ(m)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ (g)	凸　面	凹　面					
22	軒丸瓦	7.4	6.4	4.8	465	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄褐色	密	やや軟		17
23	軒平瓦	44.3	36.7	2.2	7,150	ヨコナデ	布目痕 糸切り痕	淡灰褐色	密	良		16
24	軒平瓦	31.8	28.8	2.7	5,150	ヨコナデ	布目痕 糸切り痕	淡黄褐色	密	軟		17
25	平瓦	46.7	29.2	2.4	4,800	斜格子叩き	布目痕 糸切り痕	淡黄褐色	密	やや軟		18
26	平瓦	30.0	24.4	2.8	3,400	斜格子叩き	布目痕 糸切り痕	淡灰色	密	やや軟		18
27	平瓦	31.2	23.2	2.0	2,850	格子叩き	布目痕 糸切り痕	灰色	密	良		19
28	平瓦	28.8	26.5	2.1	2,900	ヨコナデ	布目痕	淡灰色	密	やや軟		
29	隅木蓋瓦	39.2	33.6	2.5	5,000	格子叩き	布目痕 糸切り痕	淡黄褐色	密	良		19
30	隅木蓋瓦	32.2	29.9	2.1	3,250	斜格子叩き	布目痕 糸切り痕	灰色	密	良		19
31	丸瓦	35.9	22.4	2.8	2,200	ヨコナデ	布目痕 糸切り痕	淡灰色	密	良		20
32	丸瓦	28.6	21.9	2.5	2,300	ヨコナデ	布目痕 糸切り痕	淡黄褐色	密	やや軟		
33	熨斗瓦	41.8	19.5	1.8	2,150	斜格子叩き	布目痕 糸切り痕	淡黄褐色	密	良		20

表19　ＳＸ１出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形　態　・　施　文	調　整		色調 (外側) (内側)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外面	内面				
34	坏蓋	口径 (12.1) 残高　3.3	笠形の天井部からなだらかに下がり稜をなして屈曲し、口縁部は内傾する。口縁端部は丸い。⅙残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		21
35	坏身	口径 (12.4) 残高　3.3	たちあがりは内傾し、端部は内傾する凹面をなす。受部はやや上外方にのび、端部は尖る。⅙の残存。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		21
36	坏身	口径 (12.7) 残高　3.8	たちあがりは内傾した後、直立し、端部は丸く仕上げる。受部は上外方にひねり出される。¼の残存。	口回転ナデ 回転ヘラケズリ½	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		21
37	坏身	口径 (14.6) 残高　3.2	たちあがりは内傾し、端部はわずかに内傾する段をなす。受部は上外方にのびる。⅙の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		21
38	甕	口径 (22.8) 残高　4.5	外反する口縁部。口縁下に断面三角形状の凸帯を貼付する。内外面共に焼成時の煮ぶくれあり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	21
39	甕	口径 (19.0) 残高　3.6	断面三角形の貼付口縁。口縁部上面に２条１組の工具による山形文を施す。胴部外面に横方向のミガキを看取。	口ヨコナデ 胴ハケ→ミガキ	剝離の為不明	黄褐色 乳褐色	石・長(１～３) ◎		21
40	壺	口径 (17.5) 残高　3.0	外反する口縁部。端部は「コ」字状に仕上げる。⅙の残存。	口端ヨコナデ 口ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	乳黄白色 乳橙色	石・長(１～２) 金 ◎		
41	壺	口径 (20.5) 残高　3.3	複合口縁壺。２本１対の櫛描沈線文を４条横方向に、２条縦方向に施す。口縁端部は面取りする。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄色 乳黄色	石・長(１～５) ◎		
42	高坏	残高　9.2	円筒状の柱部。内面にしぼり痕を顕著に残す。坏底部は組み合わせ技法による。	磨滅の為不明	ナデ	乳赤橙色 乳橙色	石・長(１～５) 金 ◎		

ＳＸ１出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外側)(内側)	胎土 焼成	備考	図版
43	高坏	底径 (15.7) 残高 2.3	高坏の脚裾部片。わずかに外反し脚端部は「コ」字状に仕上げる。外面に細かなミガキ調整を施す。	(脚裾)ヘラミガキ (脚端)ヨコナデ	ヨコナデ	乳橙色 乳橙色	石・長(1～2) 金 ◎		
44	高坏	底径 (10.5) 残高 3.9	高坏の脚部片。裾部に3条、脚端面に1条凹線文を施す。裾上部に二等辺三角形状の沈線文を2条ずつ施す。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳黄色 乳黄色	石・長(1～2) 金 ◎		21
45	甕	底径 7.0 残高 8.5	わずかに上げ底を呈する甕の底部。胴部は斜め上方に直線的に立ち上がる。底部内面に指頭痕を残す。	(胴)ヘラミガキ (底)ナデ	磨滅の為不明	乳黄色 乳橙色	石・長(1～2) 金 ◎	黒斑	
46	甕	底径 (7.1) 残高 6.3	わずかに上げ底を呈する甕の底部。1/6の残存。	ナデ (一部ミガキ)	磨滅の為不明	赤褐色 暗褐色	石・長(1～5) 金 ◎		
47	甕	底径 (5.9) 残高 5.9	上げ底を呈する甕の底部。胴部は外反気味に立ち上がる。2/3の残存。	ナデ (一部ケズリ)	磨滅の為不明	赤褐色 赤褐色	石・長(1～7) 金 ◎		
48	甕	底径 (9.0) 残高 4.2	平底の底部。1/6の残存。	ハケ	磨滅の為不明	乳赤褐色 乳黄白色	石・長(1～5) ◎		
49	壺	底径 (9.8) 残高 4.9	平底の底部。1/4の残存。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳黄褐色 乳黄白色	砂粒多し ◎		

表20　包含層（古代）出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外側)(内側)	胎土 焼成	備考	図版
50	坏蓋	口径 (20.4) 残高 1.7	扁平な天井部から稜をなして屈曲し口縁部は下内方へ下がる。口縁端部は丸く仕上げる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
51	坏	口径 (18.7) 残高 3.4	体部は内湾し、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
52	坏	口径 (17.8) 残高 2.7	内湾する口縁部。端部は丸く仕上げる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
53	坏	口径 (18.0) 残高 3.9	高台の付く坏の口縁部片。口縁部は外反し、口縁端部内面は凹む。口縁下位で稜をもつ。	(口)回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
54	坏	口径 (15.0) 残高 3.3	高台の付く坏。高台は外方に湾曲し端部は丸く仕上げる。底部の器壁は厚い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
55	坏	底径 (12.6) 残高 1.8	高台坏。高台は低く、底体部の境界より内側に付く。高台端部は丸く仕上げる。1/6の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
56	坏	底径 (10.4) 残高 3.1	高台は低く、底体部の境界付近に付く。端部は「コ」字状に仕上げる。1/6の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
57	壺	底径 (17.4) 残高 4.5	脚付壺の脚部か。外反する裾部。脚上位に径0.9cm大の円孔を3方向に穿つ。1/3の残存。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		

表21　ＳＫ19出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外側)(内側)	胎土 焼成	備考	図版
58	坏身	口径 (14.6) 残高 5.0	たちあがりは内傾し、端部は丸く仕上げる。受部はほぼ水平にのびる。1/3の残存。	(底)回転ヘラケズリ1/3 (口)回転ナデ	回転ナデ (一部ナデ)	灰黄色 乳褐色	密 ◎	床面出土品	21

ＳＫ19出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
59	坏身	口径 (12.4) 残高 3.2	たちあがりは内傾した後、直立し、端部は尖り気味に丸く仕上げる。受部は短く上外方にのびる。1/6の残存。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		
60	瓶	残高 12.5	口縁部欠損。頸部上位と下位に2条の沈線を施す。沈線間に刺突列点文を施す。径1.7cm大の円孔を穿つ。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		21
61	瓶	残高 7.0	口頸部欠損。扁球形の胴部。胴中位に径1.5cm大の円孔を穿つ。底部内面に粘土紐巻き上げ痕を残す。	(胴)回転ナデ (底)回転ヘラケズリ 1/2	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		21
62	甕	口径 (23.9) 残高 6.0	内湾する口縁部。口縁端部は、丸く仕上げる。口頸部境に内外面共に稜をもたない。1/8の残存。	(口)ヨコナデ (頸)磨滅の為不明	磨滅の為不明	赤褐色 赤褐色	石・長(1～3) 金 ◎		
63	甕	口径 (24.8) 残高 4.2	外反する口縁部。口縁端部はわずかに「コ」字状に仕上げる。小片。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳黄色 乳黄色	砂粒多し 金 ◎		
64	甕	口径 (17.4) 残高 4.9	わずかに外反する口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。口縁部境内面に弱い稜をもつ。	ハケ	ヨコナデ	赤褐色 赤褐色	砂粒多し ◎		
65	甕	口径 (19.2) 残高 4.4	直立気味に立ち上がる口縁部。口縁端は上方につまみ上げ、口縁端面はわずかに凹む。1/6の残存。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳橙色 乳橙色	石・長(1～7) ◎		
66	壺	口径 (16.4) 残高 4.2	外反する口縁部。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。器壁は厚い。1/8の残存。	ハケ→ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	石・長(1～5) ◎	黒斑	
67	壺	口径 (20.4) 残高 4.6	外反する口縁部。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。1/6の残存。	ハケ(6~7本/1cm) →ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄色 乳黄色	石・長(1～3) 金 ◎	黒斑	
68	甕	底径 4.8 残高 2.2	上げ底を呈する甕の底部。	ヨコナデ	ナデ	乳褐色 黒色	石・長(1～3) 金 ◎		
69	甕	底径 6.4 残高 3.8	外方に突出するわずかに上げ底を呈する底部。1/2の残存。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	茶褐色 褐色	石・長(1～4) 金 ◎		
70	壺	残高 3.8	やや上げ底を呈する底部。底端部は剥離している。1/2の残存。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳橙白色 暗褐色	石・長(1～3) ○		
71	壺	底径 5.9 残高 3.9	やや外方に突出する平底の底部。底部外面にヘラ状工具による線刻あり。	ナデ	ナデ	乳色 乳色	石・長(1～5) 金 ◎		

表22　ＳＫ22出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
72	坏蓋	残高 2.6	断面三角形の稜をもち、口縁部は垂下する。口縁端部は内傾する。口唇部に刻み目を施す。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		21

表23　ＳＫ２出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
73	甕	口径 (17.7) 残高 15.6	丸みのある断面三角形の粘土紐の貼付口縁。口縁端面に刻み目を施す。胴張りで、胴上位にヘラ描き沈線文を7条施す。	(口)ハケ→ヨコナデ (胴)ヘラミガキ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3) 金 ◎		22
74	甕	口径 (29.1) 残高 8.0	断面方形状の貼付口縁を呈する甕。口縁部上部は、ナデ凹む。1/6の残存。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳褐色 乳橙色	石・長(1～5) ◎		22

ＳＫ２出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
75	壺	口径 (15.8) 残高 6.7	頸部は直立し、口縁部は外反する。口縁端部は丸い。頸部にヘラ描き沈線文を3条以上施す。¼の残存。	口ヨコナデ 頸ハケ→ナデ	磨滅の為不明	乳黄白色 乳黄白色	石・長(1～2) 金 ◎		22
76	甕	底径 (6.2) 残高 4.8	わずかに上げ底を呈する底部。⅓の残存。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	赤橙色 赤橙色	石・長(1～5) ◎		

表24　ＳＫ６・ＳＫ８出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
77	甕	口径 (25.0) 残高 8.2	断面三角形の貼付口縁を呈する甕。口縁端部に刻み目を施す。胴部にヘラ描き沈線文6～8条と刺突文を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄白色 黄白色	石・長(1～3) 金 ◎	ＳＫ６	22
78	甕	残高 9.3	長頸で、口頸部は上外方に開く。頸部下位に凸帯を貼り付け凸帯上に刻み目を施す。ヘラ描き沈線文5条。口頸部内面に貼り付け凸帯をもつ。	ハケ→ヘラミガキ	ナデ	乳黄色 乳黄色	石・長(1～3) 金 ◎	ＳＫ６	22
79	壺	口径 (16.0) 残高 16.2	折り曲げ口縁の甕。胴部の張りは弱い。口縁端部に刻み目、胴部にヘラ描き沈線文を6条施す。	口ハケ 胴ヘラミガキ	口ナデ 胴ヘラミガキ	乳黄色 乳黄色	石・長(1～3) 金 ◎	ＳＫ８	23
80	壺	底径 (9.0) 残高 6.2	平底の底部。胴部は直立気味に立ち上がる。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳褐色 褐色	石・長(1～2) ◎	ＳＫ８	
81	甑	底径 7.6 残高 4.5	甕の転用品か。径0.7～1cmの孔を穿つ(焼成後穿孔)。	ナデ	ハケ(一部)	乳褐色 褐色	石・長(1～5) 金 ◎	ＳＫ８	23

表25　ＳＫ10～14出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
82	甕	口径 (28.7) 残高 12.6	丸みのある断面三角形の貼付口縁を呈する甕。胴部は無文。¼の残存。	口ヨコナデ 胴ヘラミガキ	口ヨコナデ 胴磨滅の為不明	乳黄色 乳橙色	石・長(1～5) ◎	ＳＫ10	23
83	壺	口径 (26.0) 残高 3.0	外反する口縁部。口縁端両端に刻み目を施す。口縁部上部に刺突文を2列に施す。⅛の残存。	ヨコナデ	ヘラミガキ	乳黄色 黒色	石・長(1～2) 金 ◎	ＳＫ10	23
84	甕	口径 (21.0) 残高 2.6	折り曲げ口縁。口縁端部に浅い刻み目を施す。胴上位にヘラ描き沈線文を4条以上施す。小片。	磨滅の為不明	ヨコナデ	乳黄白色 乳黄白色	石・長(1～3) ◎	ＳＫ11	23
85	壺	口径 (17.6) 残高 4.4	外反する口縁部。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。⅛の残存。	ハケ	磨滅の為不明	乳褐色 乳黄褐色	石・長(1～3) ◎	ＳＫ11	
86	甕	残高 3.5	丸みのある断面三角形の貼付口縁を呈する甕。口縁端部に刻み目を施す。小片。	磨滅の為不明	ヨコナデ	乳黄褐色 乳黄色	石・長(1～3) 金 ◎	ＳＫ12	
87	壺	底径 (5.6) 残高 5.7	わずかに上げ底を呈する底部。内外面共にヘラミガキ調整を施す。⅓の残存。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	乳橙色 乳黄色	石・長(1) ◎	ＳＫ12	
88	甕	口径 (19.8) 残高 4.7	断面方形状の貼付口縁を呈する甕。口縁端部に刻み目を施す。¼の残存。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳黄色 乳橙色	石・長(1～5) ◎	ＳＫ13	23
89	壺	残高 5.4	頸部に断面三角形の凸帯を貼り付け、凸帯上に押圧痕を残す。凸帯下にヘラ描き沈線を3条施す。	ヨコナデ	ヘラミガキ	灰褐色 灰褐色	石・長(1～3) ◎	ＳＫ14	23
90	高坏	残高 2.6	高坏の坏部。小片。口縁部に3条以上の凹線文を施す。口縁部上部はわずかにナデ凹む。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長(1～2) ◎	ＳＫ14	

表26　ＳＫ18出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
91	甕	口径 (20.6) 残高 9.2	丸みのある断面三角形の貼付口縁を呈する甕。口縁端部に刻み目を施す。胴部外面はタテ方向、内面はヨコ方向の細かいヘラミガキを施す。1/6の残存。	(口)ヨコナデ (胴)ヘラミガキ	(口)ヨコナデ (胴)ヘラミガキ	赤褐色 乳赤褐色	石・長(1～3) 金 ◎		24
92	甕	口径 (14.3) 残高 7.5	断面方形状の貼付口縁を呈する甕。胴部の張りは弱い。1/8の残存。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ→ヘラミガキ(一部)	磨滅の為不明	乳黄褐色 乳黄褐色	石・長(1～4) ◎		24
93	甕	口径 (19.3) 残高 17.3	折り曲げ口縁の甕。胴部の張りは弱い。2/3の残存。	(口)ヨコナデ (胴)ヘラミガキ	(口)ナデ (胴)ヘラミガキ	赤褐色 乳赤褐色	石・長(1～5) ◎	黒斑	24
94	甕	口径 (14.4) 残高 16.7	折り曲げ口縁の甕。口径と胴部最大径を等しくする。1/2の残存。	(口)ヨコナデ (胴)ヘラミガキ	(口)ナデ (胴)磨滅の為不明	灰褐色 灰褐色	石・長(1～3) ◎	黒斑	24
95	甕	口径 (31.0) 残高 17.4	断面三角形の貼付口縁を呈する甕。胴部の張りは強い。1/6の残存。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ→ヘラミガキ	ナデ(指頭痕)	赤褐色 乳褐色	石・長(1～3) ◎	黒斑	24
96	甕	底径 (5.8) 残高 13.0	わずかに上げ底を呈る底部。 胴部は直線的に立ち上がる 95と同一個体か。	ヘラミガキ	ナデ	乳黄褐色 乳黄褐色	石・長(1～3) ◎		24
97	甕	底径 (6.8) 残高 3.6	わずかに上げ底を呈する底部。1/2の残存。	ナデ	ナデ	赤褐色 赤褐色	石・長(1～5) ◎		24

表27　ピット出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
98	甕	口径 (30.0) 残高 7.3	折り曲げ口縁の甕。口縁端部に刻み目を施す。胴部の張りは強く櫛描き沈線文を8条施す。	ヨコナデ	ヨコナデ (一部ハケ)	黄灰色 黄灰色	石・長(1～5) ◎	ＳＰ82	25
99	甕	口径 (25.3) 残高 3.7	貼付口縁の甕。口縁端部は欠損。胴部に櫛描き沈線文を7条以上施す。小片。	ナデ	ヨコナデ	暗褐色 暗褐色	石・長(1～3) ◎	ＳＰ113	
100	壺	口径 (16.5) 残高 9.8	頸部は内傾し、口縁部は外反する。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。1/4の残存。	ヨコナデ (一部ハケ)	(口)ヨコナデ (胴)ヘラミガキ	黄白色 黄白色	石・長(1～5) 金 ◎	ＳＰ82	25
101	甕	底部 6.1 残高 7.7	わずかに上げ底を呈する底部。	ナデ	ナデ	茶褐色 暗褐色	石・長(1～7) ◎	ＳＰ155	25
102	甕	底径 6.5 残高 5.1	やや上げ底を呈する底部	ヘラミガキ	ナデ	乳褐色 茶褐色	石・長(1～5) ◎	ＳＰ155	25
103	甕	底径 (8.0) 残高 6.4	平底の底部。	磨滅の為不明	ナデ	乳橙色 褐色	石・長(1～5) ◎	ＳＰ16 黒斑	
104	壺	底径 (12.2) 残高 3.5	大きな平底の底部。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	赤褐色 乳黄色	石・長(1～5) ◎	ＳＰ82	
105	壺	底径 (8.6) 残高 4.4	わずかに上げ底を呈する底部。1/3の残存。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳色 乳白色	石・長(1～7) ◎	ＳＰ132	
106	壺	底径 6.2 残高 3.2	わずかに上げ底を呈する底部。	磨滅の為不明	ナデ	赤橙色 赤橙色	石・長(1～3) ◎	ＳＰ6	
107	壺	底径 (6.7) 残高 3.8	中央部がわずかに凹む底部。器壁は厚い。1/3の残存。	磨滅の為不明	ナデ	乳黄褐色 茶褐色	石・長(1～3) ○	ＳＰ276	

表28　包含層(弥生)出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
108	甕	口径 (22.8) 残高 6.1	断面三角形の貼付口縁の甕。口縁端に刻み目を施す。胴部にヘラ描き沈線文と刺突文を施す。⅛の残存。	ナデ	ナデ	乳黄色 乳黄褐色	石・長(1～5) ◎		25
109	甕	口径 (12.8) 残高 9.8	折り曲げ口縁。胴部の張りは強くヘラ描きの沈線文を4条施す。¼の残存	(口)ヨコナデ (胴)磨滅の為不明	(口)ヨコナデ (胴)一部ハケ	黄灰色 黄灰色	石・長(1～7) ◎		25
110	甕	口径 (32.8) 残高 5.3	逆「L」字型口縁の甕。口縁端は「コ」字状に仕上げる。断面三角形の凸帯を貼付し、凸帯上に押圧痕を施す。	磨滅の為不明	ヨコナデ	乳黄色 乳褐色	石・長(1～5) ◎		25
111	甕	口径 (14.0) 残高 5.0	折り曲げ口縁の甕。器壁は薄い。小片。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳褐色 乳褐色	石・長(1～5) ◎		
112	甕	口径 (16.6) 残高 3.4	外反する口縁部。口縁端部はナデ凹む。小片。	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1～3) ◎		
113	甕	口径 (13.8) 残高 4.5	「く」の字状口縁を呈する甕。口縁端部はわずかに上方につまみ上げられる。小片。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	赤褐色 暗褐色	石・長(1～3) ◎		
114	壺	口径 (20.4) 残高 3.0	外反する口縁部。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。口縁端下面に刻み目を施す。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳黄色 黄灰色	石・長(1～5) 金 ◎		25
115	鉢	口径 (20.0) 残高 3.2	外反口縁を呈する鉢。小片。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	乳褐色 茶褐色	石・長(1～3) ◎		
116	ジョッキ形土器	残高 4.2	ジョッキ形土器の把手	ナデ	ナデ	茶褐色	石・長(1～5) ◎		
117	壺	底径 (9.0) 残高 4.2	わずかに上げ底を呈する底部。⅓の残存	磨滅の為不明	磨滅の為不明	暗褐色 褐色	石・長(1～3) ◎		25
118	壺	底径 (8.0) 残高 5.5	中央部がわずかに上げ底を呈する底部。⅓の残存。	磨滅の為不明	磨滅の為不明	黄白色 黄白色	石・長(1～5) ◎		
119	壺	底径 (8.6) 残高 3.9	上げ底を呈する底部。¼の残存。	ナデ	ナデ	乳褐色 暗褐色	石・長(1～3) ◎		

表29　ＳＫ32出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
120	坏蓋	口径 (10.8) 残高 2.3	小片。口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
121	高坏	残高 6.5	高坏の柱部。1条の沈線が巡る。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
122	坏	口径 (14.4) 底径 7.3 器高 3.6	口縁部はやや外反し、端部は先細りする。底部の切り離しは回転系切り技法による。¾の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色 乳褐色	密 ◎		25
123	碗	口径 11.8 底径 4.9 器高 7.2	肥前系の陶器碗。半透明のくすんだ青緑色の釉が全体を覆う。文様は薄い藍色を呈する。たたみ付けには薄く目砂が付着する。⅔の残存。	不明	不明	灰色 灰色	密 ◎		25
124	壺	底径 (7.2) 残高 9.1	上げ底を呈する底部	ヘラミガキ	ナデ	茶褐色 暗褐色	石・長(1～3) ◎		

表30　包含層出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
125	柱状片刃石斧	ほぼ完形	結晶片岩	(14.2)	3.1	4.5	304.9		26
126	石庖丁	½	結晶片岩	(7.3)	(4.7)	0.8	37.9		26
127	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	(2.9)	(1.9)	0.45	2.05		26

第Ⅳ章　調査の成果と課題

来住廃寺19次調査は国指定史跡「来住廃寺」に関する寺域確認と南面回廊状遺構の検出を主目的として実施した。調査・研究の結果、回廊状遺構を含む官衙関連遺構と寺域関連遺構の様相を追求するものとなった。

まず、回廊状遺構は来住廃寺２次調査で東面回廊が検出された当時、来住廃寺の主要伽藍であるとされていた。その後、５次、７次調査で、それぞれ北面、西面回廊の存在が確認され、寺院の西側部分の一部を取り囲む遺構であることが判明した。それと同時に７世紀後葉の造立と考えられる来住廃寺に先行するものであることが明らかとなった。現在では回廊状遺構は寺院建立以前の斉明天皇の「石湯行宮」の一部にあたるものと推定されている（松原弘宣　1990）。

今回の調査では、過去の調査と同様に回廊の外側及び内側柱列をそれぞれ検出した。加えて外側柱列に接続した門と回廊を取り囲む区画溝の一部を検出した。回廊の構造は外側柱列と内側柱列とで掘り方の形状や規模等が異なる点など、これまでの調査成果を追充する結果となった。

注目すべき点は回廊を構成する柱穴の配置である。外側柱列の柱穴の並びに対し、内側柱列の柱穴は直交せず、やや東方向に寄っているのである。これは何に起因するものなのであろうか。回廊自身の構造なのか、それとも、外側柱列と内側柱列が別の要素をもつ遺構であるのか、今後、回廊の全容を解明するとともに、研究課題のひとつになるであろう。

このほか、回廊の内側部分で柵列ＳＡ１を検出した。本稿では来住廃寺に先行する遺構であると考えている。形状はおそらく方形状になるものと思われ、回廊とほぼ同じ方位をとっている。建物方位や柱穴埋土等から判断すると、回廊とＳＡ１とは時期をあまり隔てることなく存在していた可能性が考えられる〔ただし、ＳＡ１と重複するＳＸ１（来住廃寺創建瓦が出土）との前後関係は不明な点があり、今後、周辺の調査の結果次第では、ＳＡ１の時期が来住廃寺創建以降に下る可能性もある〕。

回廊、門及び柵列については、時期を特定できるような遺物の出土はあまりみられなかったが、今後、回廊と柵列との関係や、それぞれの年代などを正確に把握し、寺院創建以前の来住台地の状況などを的確につかむ必要があろう。

次に、来住廃寺に関してであるが、現在までの調査成果を簡単に説明する。来住廃寺は７世紀後葉に前述の回廊を取り壊した後に造営された白鳳期の寺院と考えられている。昭和42年の調査によって現在の長隆寺境内の土壇が塔基壇であることが確認され、その後の調査で、基壇の北方約50mの地点に僧房が確認された。しかしながら、寺院の正確な建物配置や寺域の広がりなどは不明な点が多い。

今回の調査では、来住廃寺に直接関連する資料は残念ながら得られなかったが、寺院存続期に建てられたと考えられる掘立柱建物址及び柵列ＳＡ２を検出した。掘立柱建物柱穴内には細縄叩きを施した平瓦が置かれており、出土した須恵器などとともに、当該期の建物址と判断した。

寺域に関しては調査地内において、その西限を示すような資料は得られなかった。塔基壇の位置や、これまでの調査成果及び今回の調査結果などから判断すると、調査区のやや東方に寺域の西限がある可能性が高いと考えられる。

松山平野には白鳳時代の寺院が８ヶ所知られている。来住廃寺のほか、湯ノ町廃寺・内代廃寺・中村廃寺・朝生田廃寺・中ノ子廃寺・千軒廃寺・上野廃寺である。

白鳳期、日本の政治の中核である近畿地方は別として、これだけの寺院が地方の限られた一地域に存在するところはごく稀である。来住廃寺の調査成果は古代の松山平野、とりわけ来住・久米地区を考えるうえでは貴重な資料となるものである。

今後、寺域の範囲や建物配置などを明確にし、来住廃寺の全貌を明らかにするとともに、それに関連する遺構・遺物に関して詳細な調査成果を上げなければならない。そして、過去の調査成果をふまえて、古代の来住・久米地域の復元、とりわけ、久米官衙及び来住廃寺関連の遺跡群の全容把握を行うことが急務であろう。

〔参考文献〕

松原　弘宣　「伊予国久米評の成立と回廊状遺構」『日本歴史 第504号』

『愛媛県史―原始・古代Ⅰ―』愛媛県史編纂委員会　1982

『松山市史料集　第2巻―考古編Ⅱ―』松山市史料集編集委員会　1988

写真図版

図版例言

1．遺構の撮影は調査担当者及び大西朋子が行った。

使用機材：

カ　メ　ラ	アサヒペンタックス67	レ　ン　ズ	ペンタックス67　55㎜Ｆ４　他
	ニコンニューＦＭ２　他		ズームニッコール28～85㎜　他
フ　ィ　ル　ム	ネオパンＳＳ		

2．遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カ　メ　ラ	トヨ／ビュー45Ｇ　　レ　ン　ズ　　ジンマーＳ240㎜Ｆ5.6　他
ス　ト　ロ　ボ	コメット／ＣＡ―32　２灯・ＣＢ2400　２灯（バンク使用）
スタンド他	トヨ／無影撮影台・ウエイトスタンド101
フ　ィ　ル　ム	白　黒　プラスＸパン　４×５
	カラー　エクタクロームＥＰＰ　４×５

3．遺構写真の焼き付け及び遺物写真のフィルム現像・焼き付けは、大西が行った。

（白黒に限る。）

使用機材：

引　伸　機	ラッキー450ＭＤ	レ　ン　ズ	エル・ニッコール135㎜Ｆ5.6Ａ
	ラッキー90ＭＳ	レ　ン　ズ	エル・ニッコール50㎜Ｆ2.8Ｎ
印　画　紙	インフォードマルチグレードⅢＲＣ		

【参考】　『埋文写真研究』　Vol. 1　1990　Vol. 2　1991　Vol. 3　1992

Vol. 4　1993　Vol. 5　1994

〔大西朋子〕

1．調査前全景（南西より）

2．西壁土層（南東より）

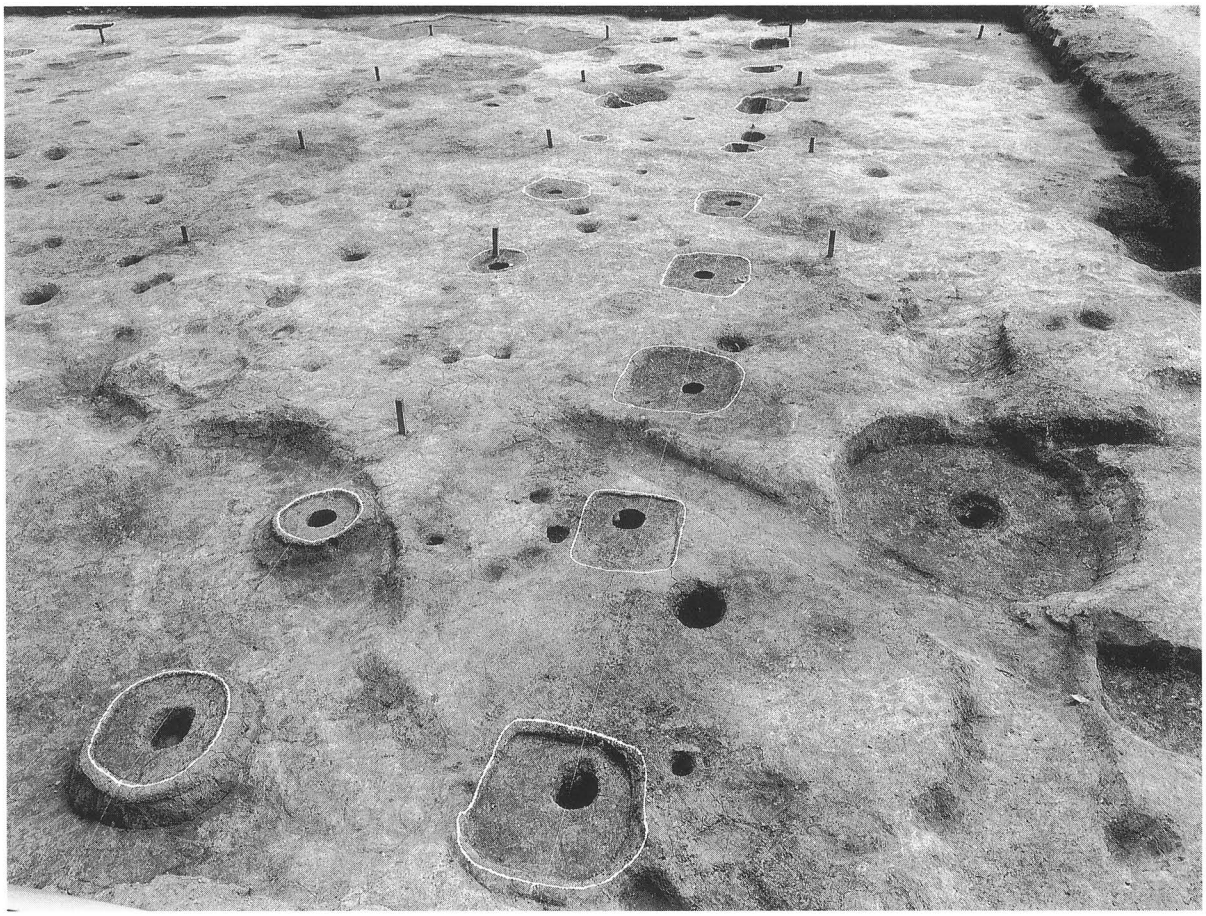
1．遺構検出状況①（南東より）

2．遺構検出状況②（東より）

1．遺構検出状況③（北東より）

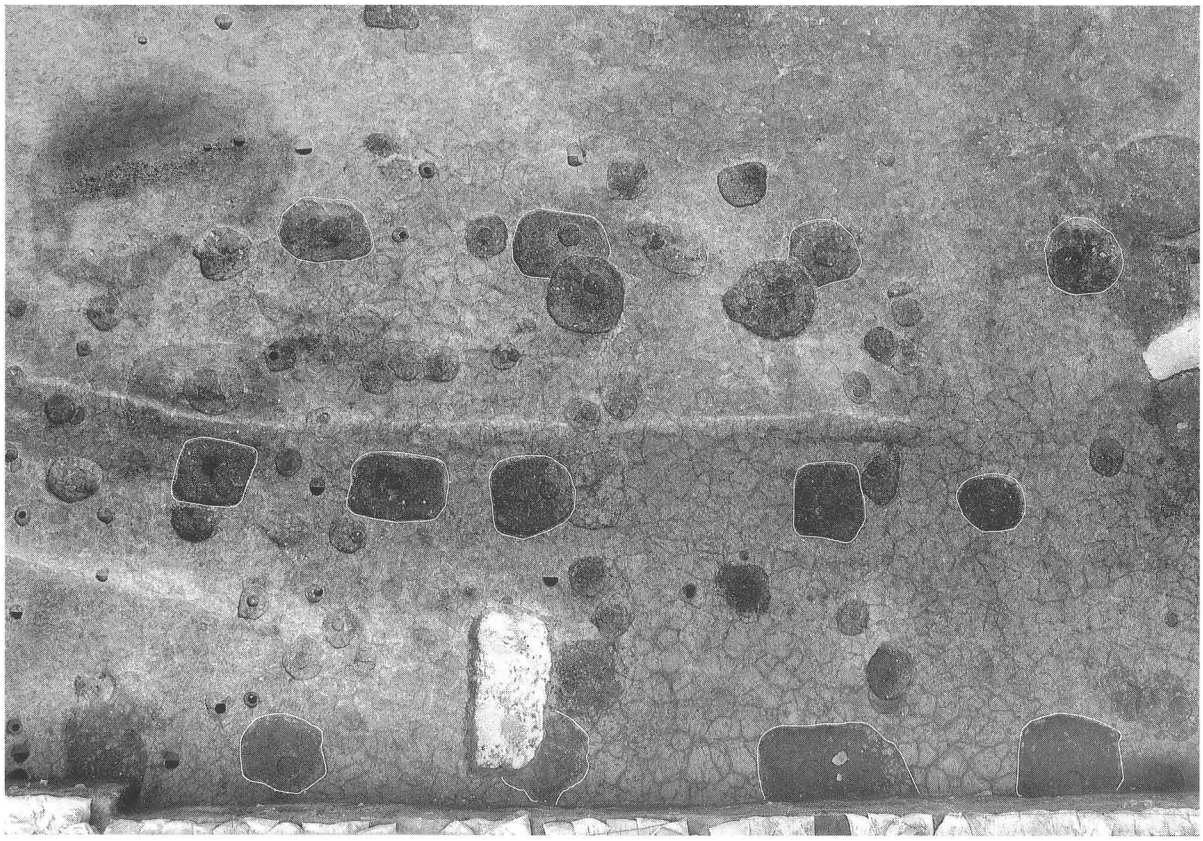
2．回廊状遺構検出状況①（南より）

図版四



1．回廊状遺構検出状況②（西より）

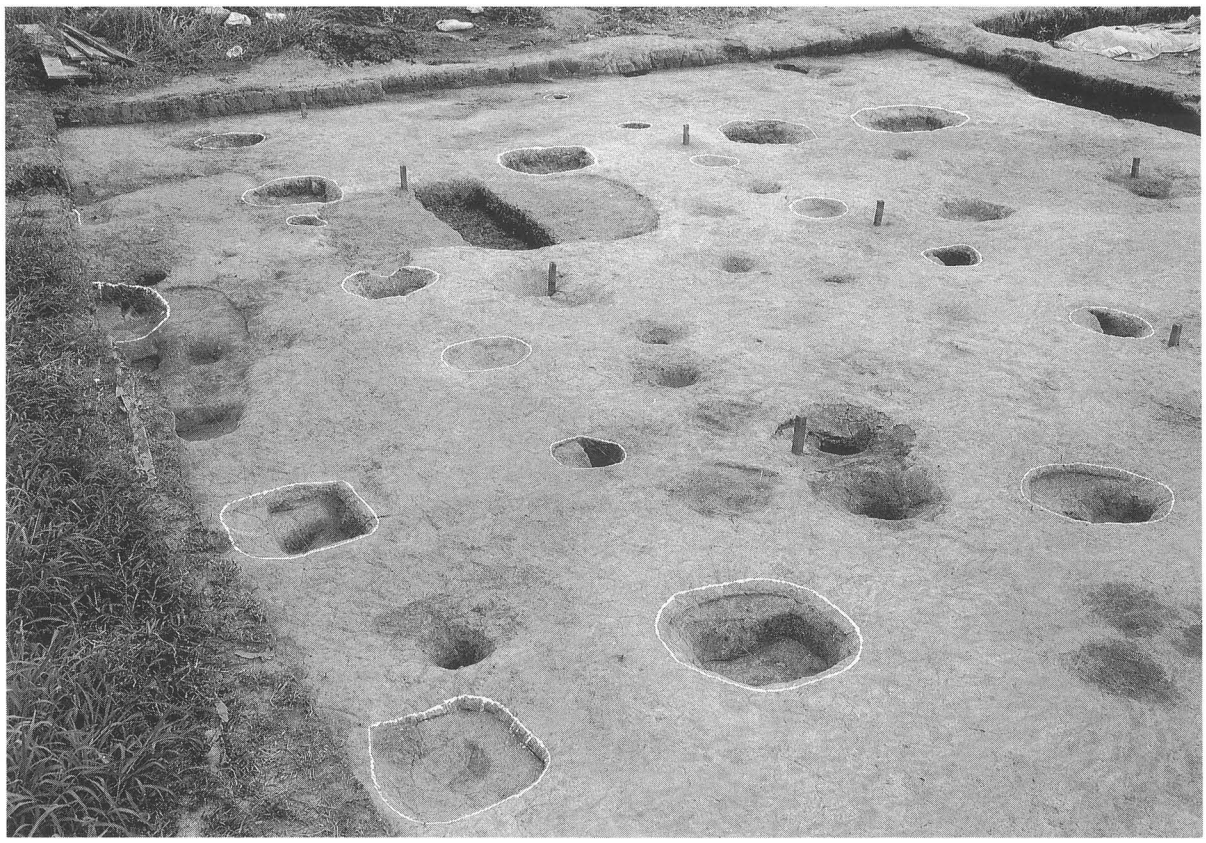
2．回廊状遺構検出状況③（西より）



1．門検出状況（南より）

2．柵列ＳＡ１検出状況（南より）

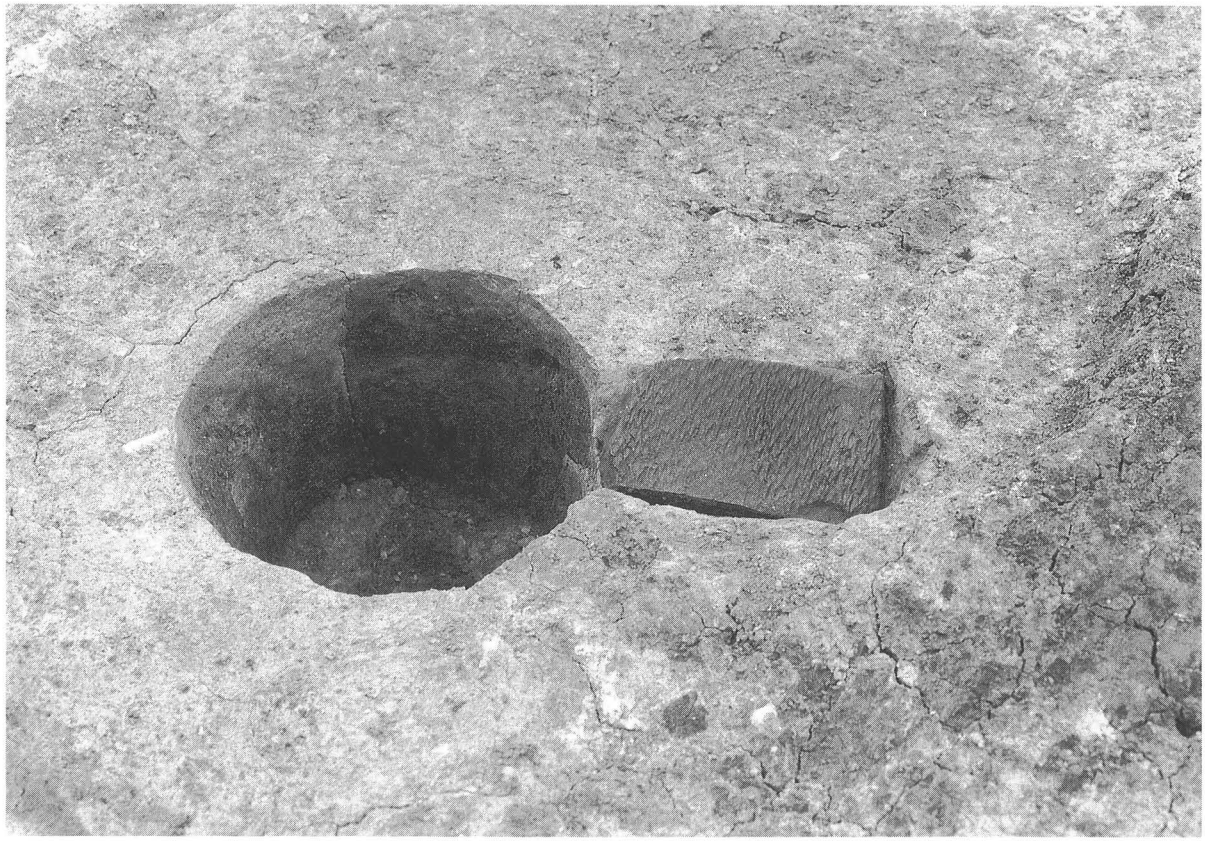
図版六



1．柵列ＳＡ２・掘立３検出状況（北西より）

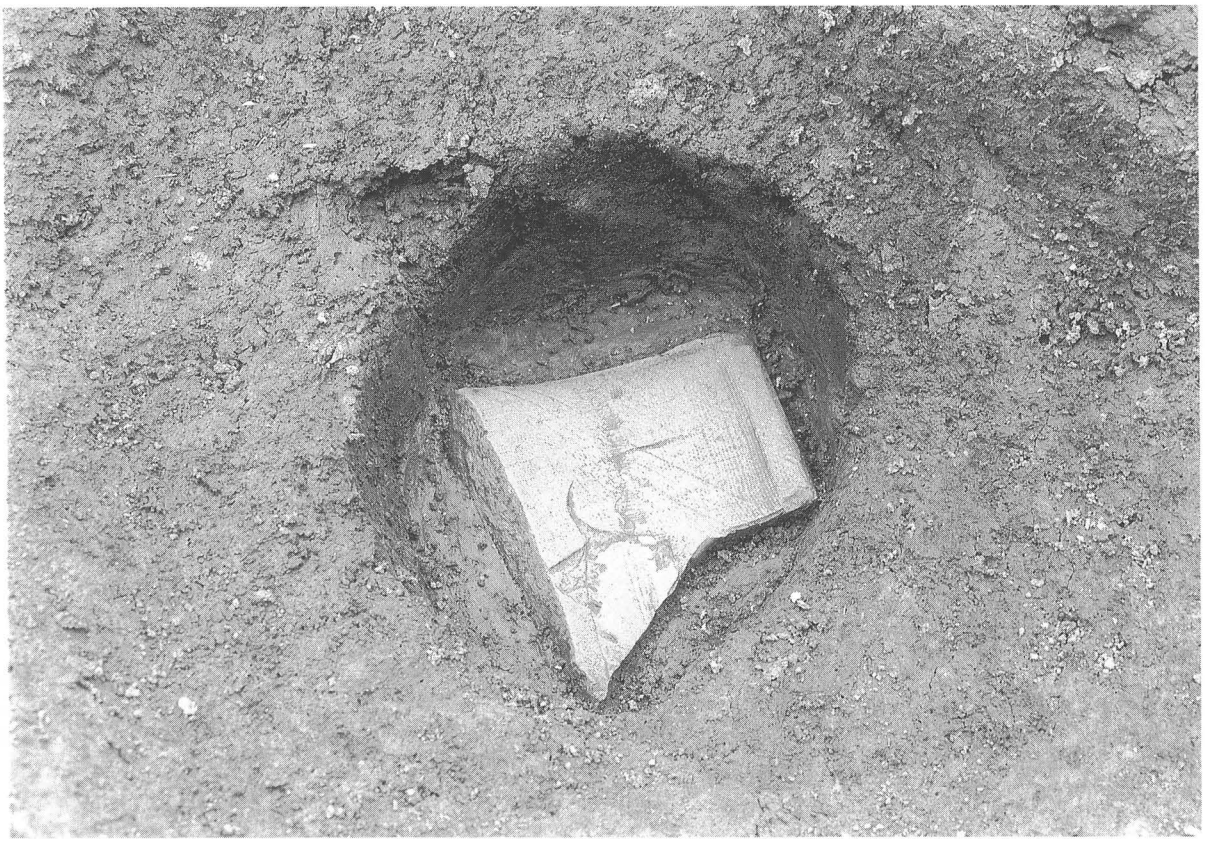
2．掘立１・掘立２検出状況（北東より）

1．掘立１（ＳＰ67）遺物出土状況（西より）



2．掘立１（ＳＰ７）遺物出土状況（南より）

図版八



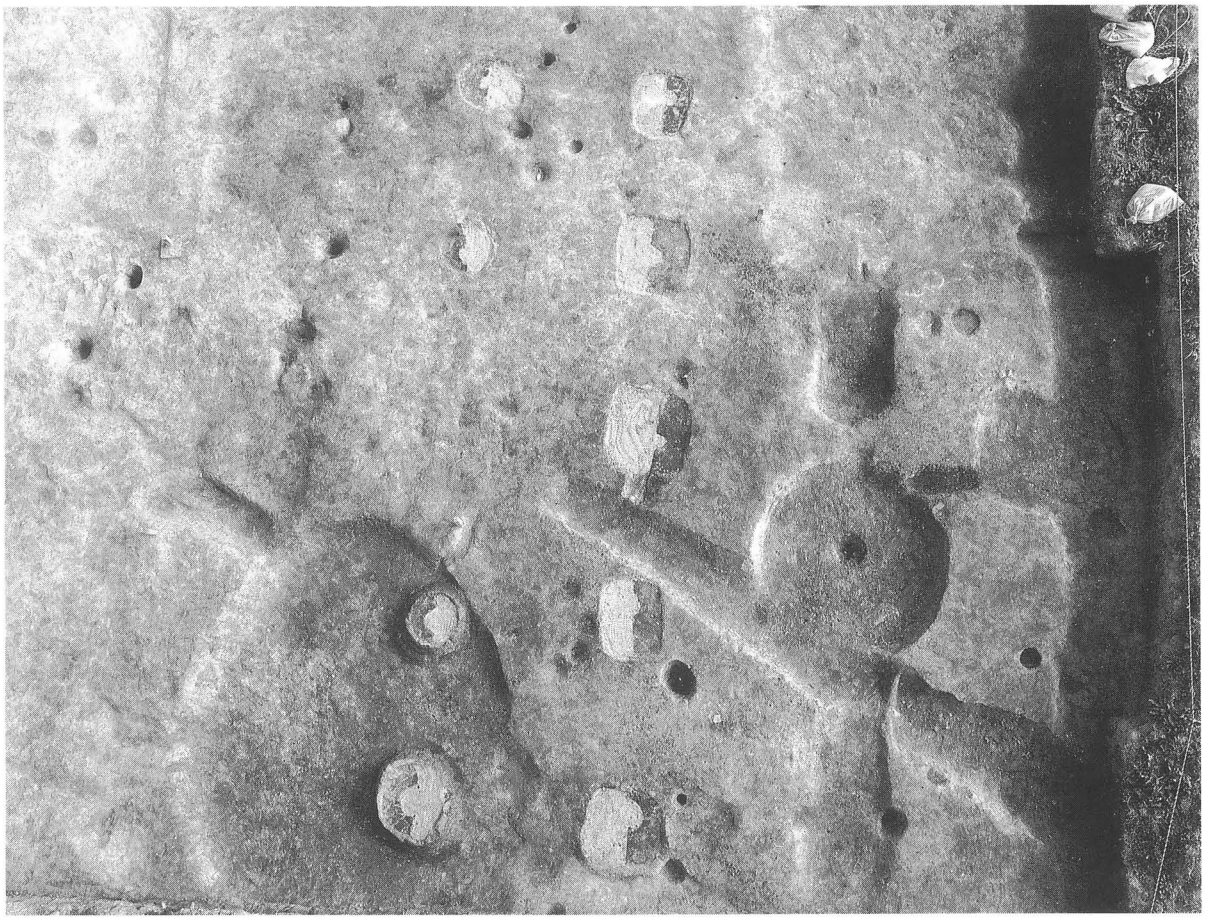
1．掘立２（ＳＰ99）遺物出土状況（南西より）

2．ＳＸ１検出状況（北東より）

1．ＳＸ１遺物出土状況①（南西より）

2．ＳＸ１遺物出土状況②（北より）

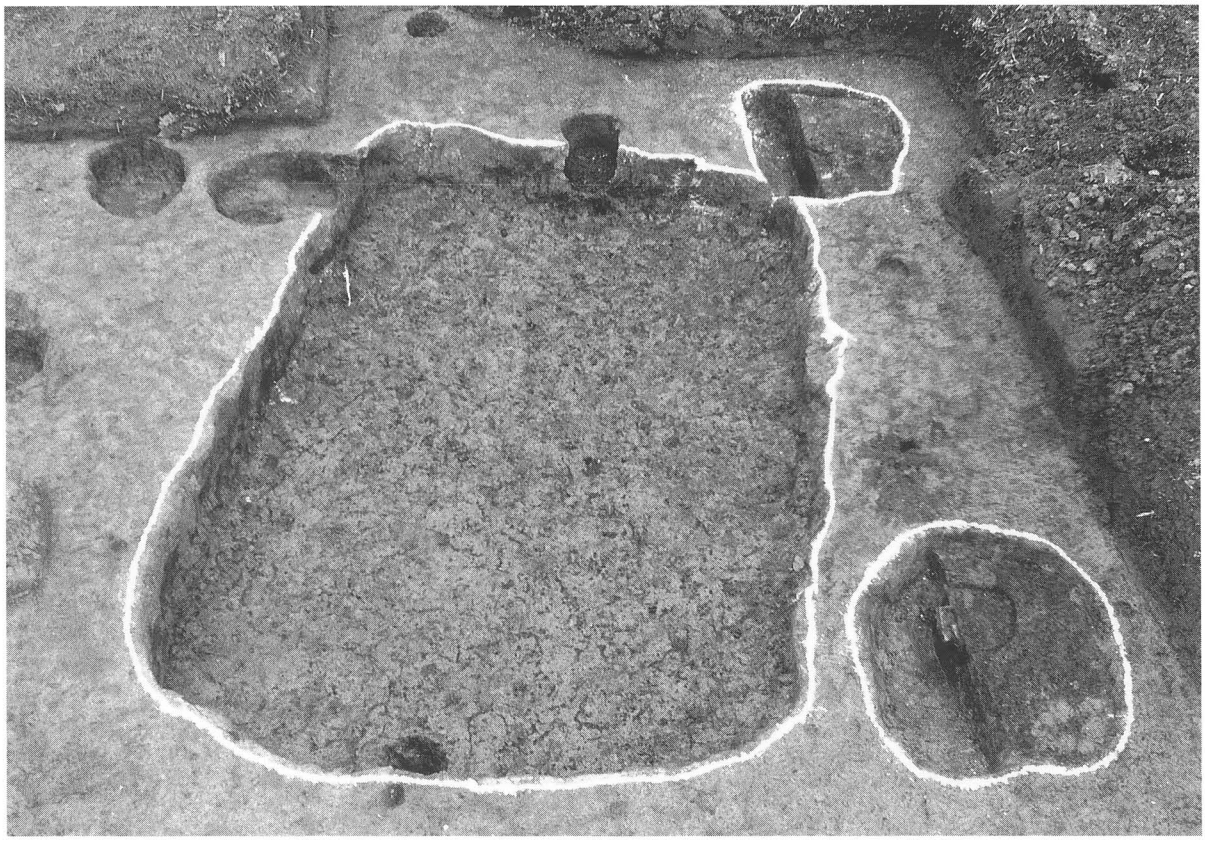
1．ＳＸ１遺物出土状況③（東より）



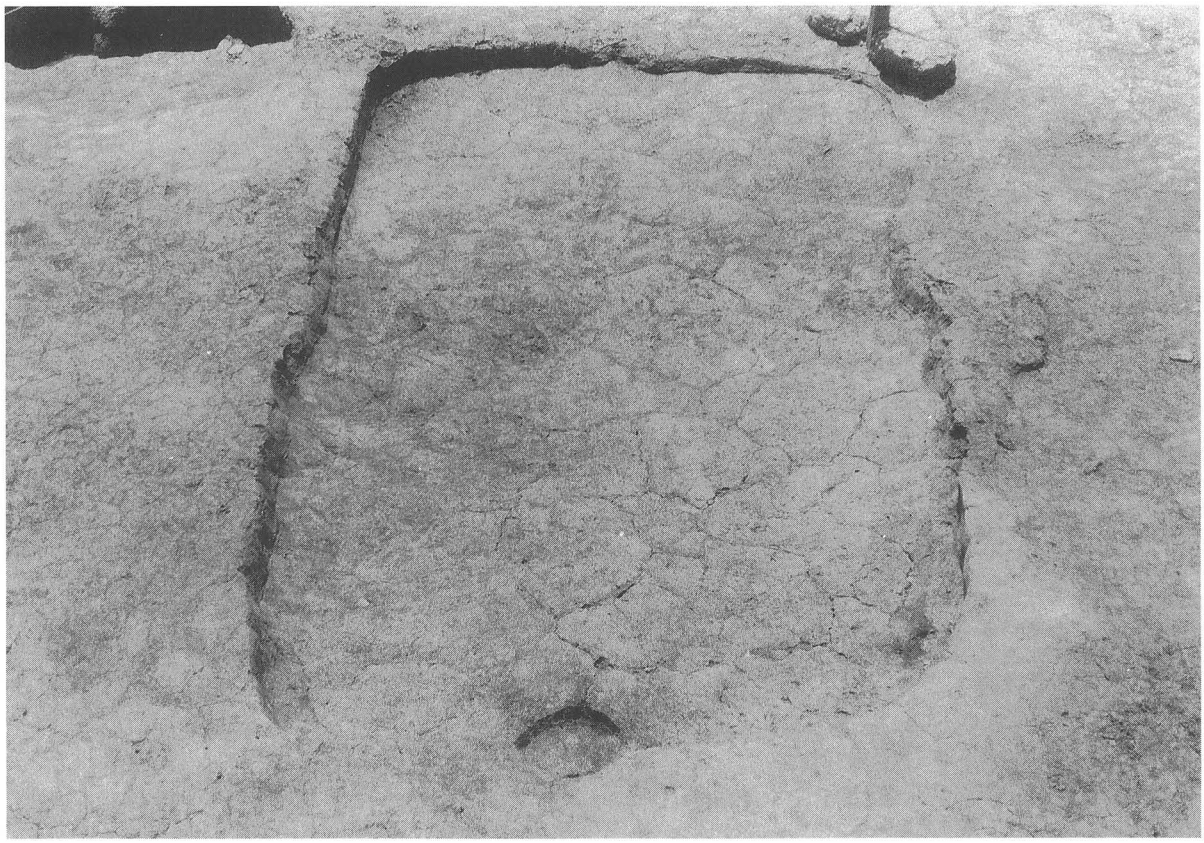
2．ＳＤ１～４・ＳＫ18・ＳＫ19検出状況（西より）

1．ＳＫ19遺物出土状況①（南東より）

2．ＳＫ19遺物出土状況②（南東より）



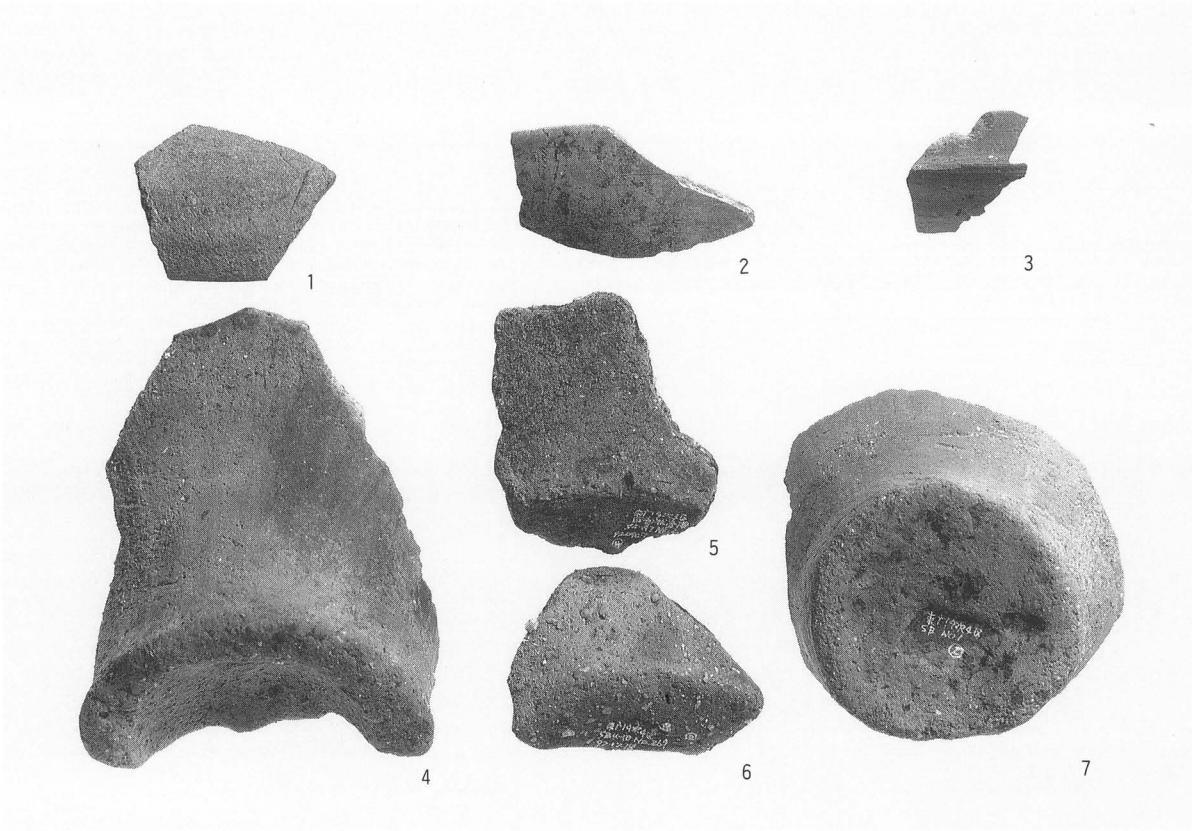
1．ＳＫ２検出状況（南より）



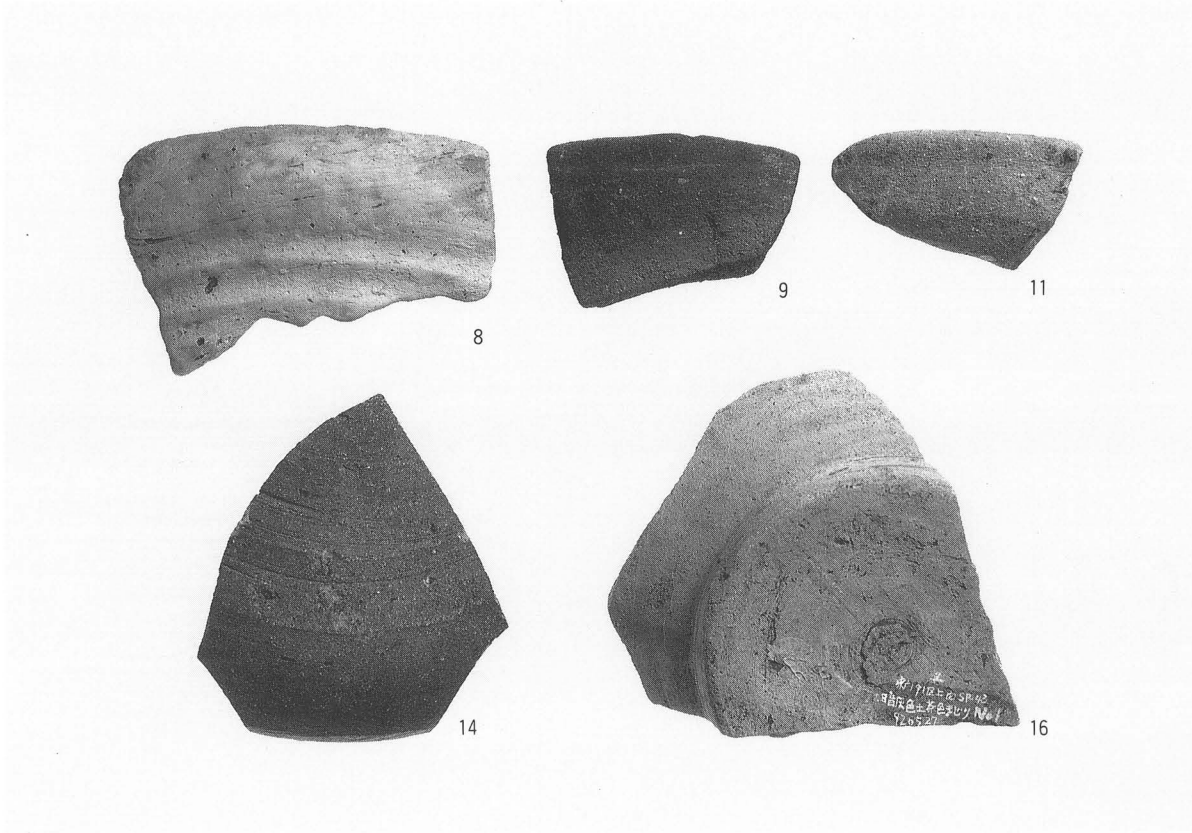
2．ＳＫ８検出状況（北より）

1．ＳＫ２遺物出土状況（南より）

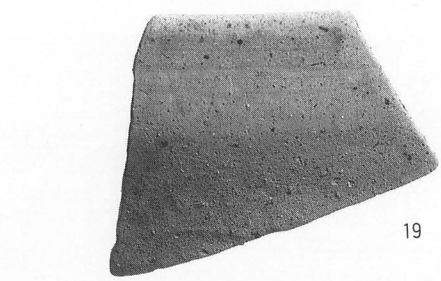
2．ＳＫ18遺物出土状況（南より）



1．回廊状遺構出土遺物（1・2・4・5）門出土遺物（3・6・7）

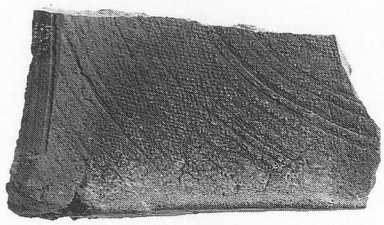


2．掘立１出土遺物①



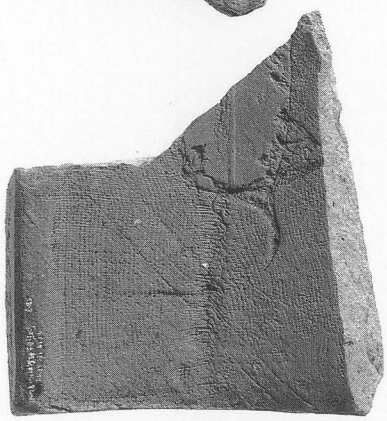
19

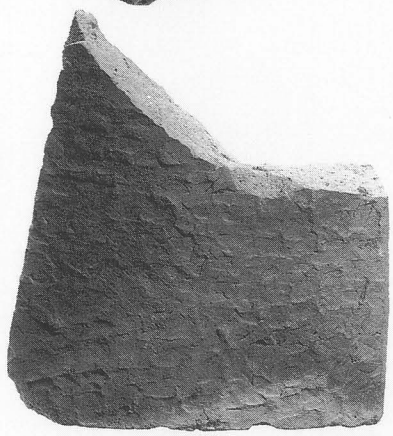
20



17

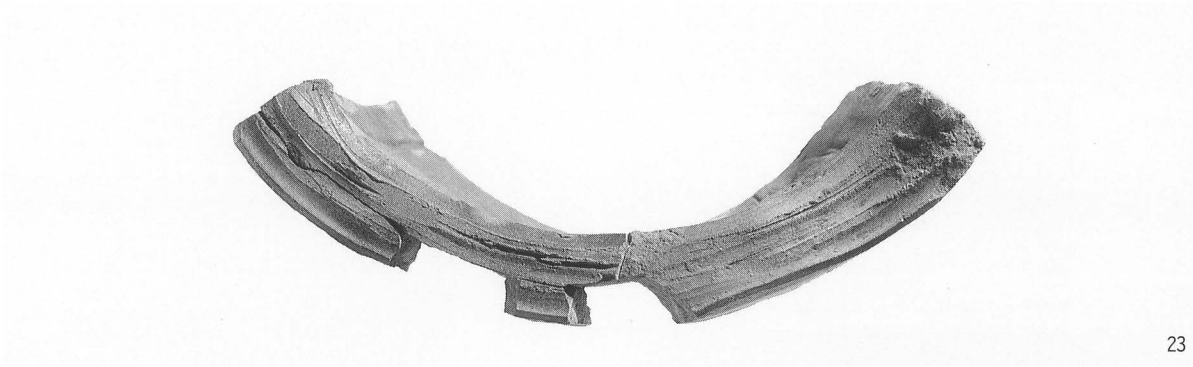
18

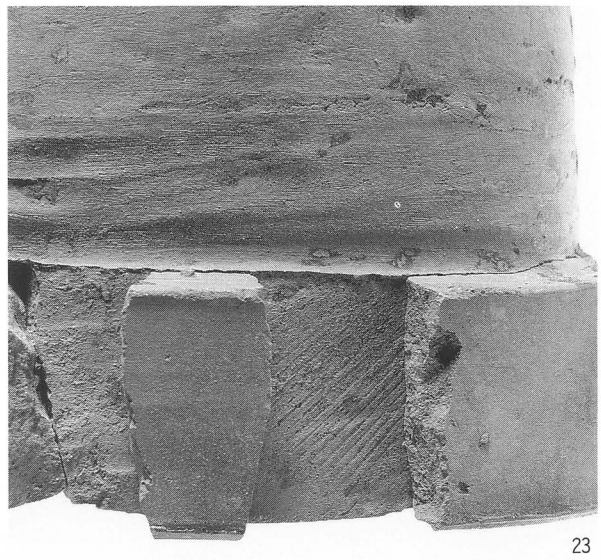




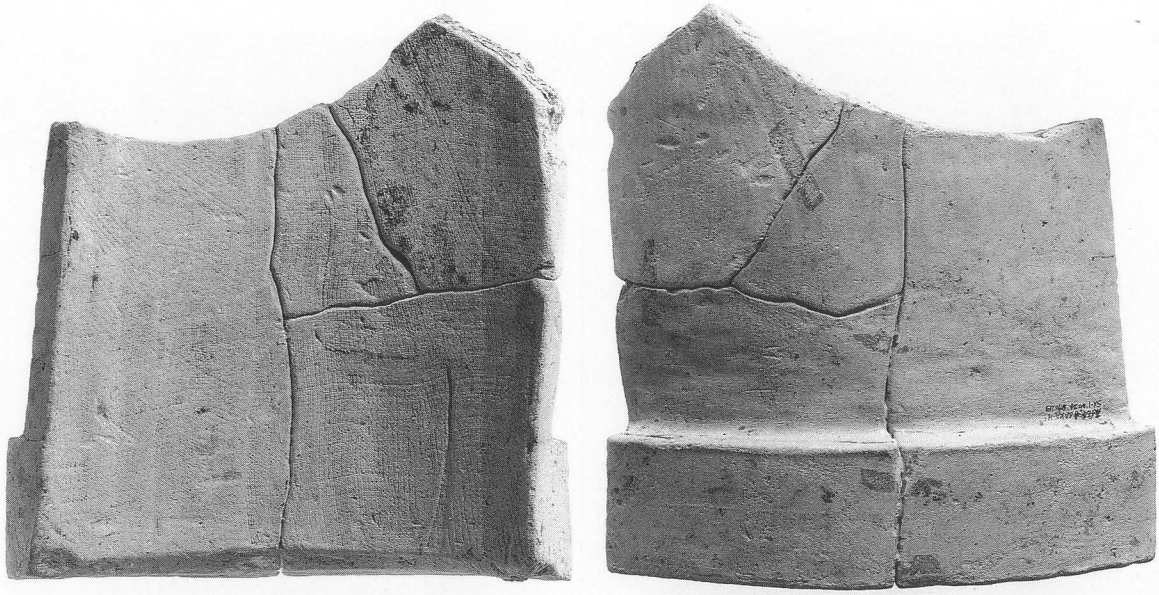
21

1．掘立１出土遺物②（17・18）掘立２出土遺物（19～21）

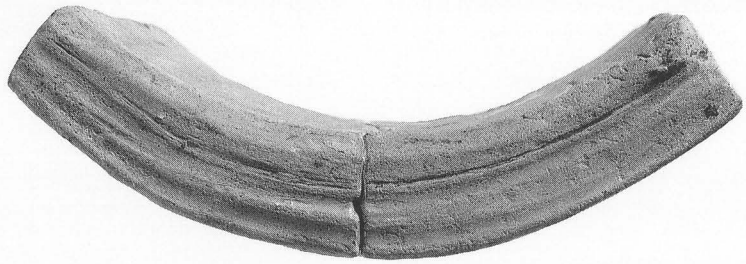




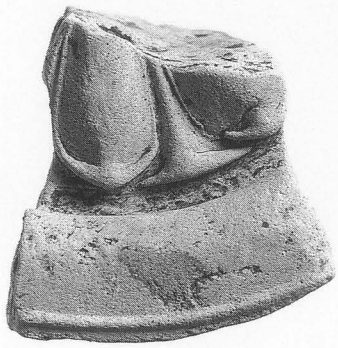
1．ＳＸ１出土遺物①



24

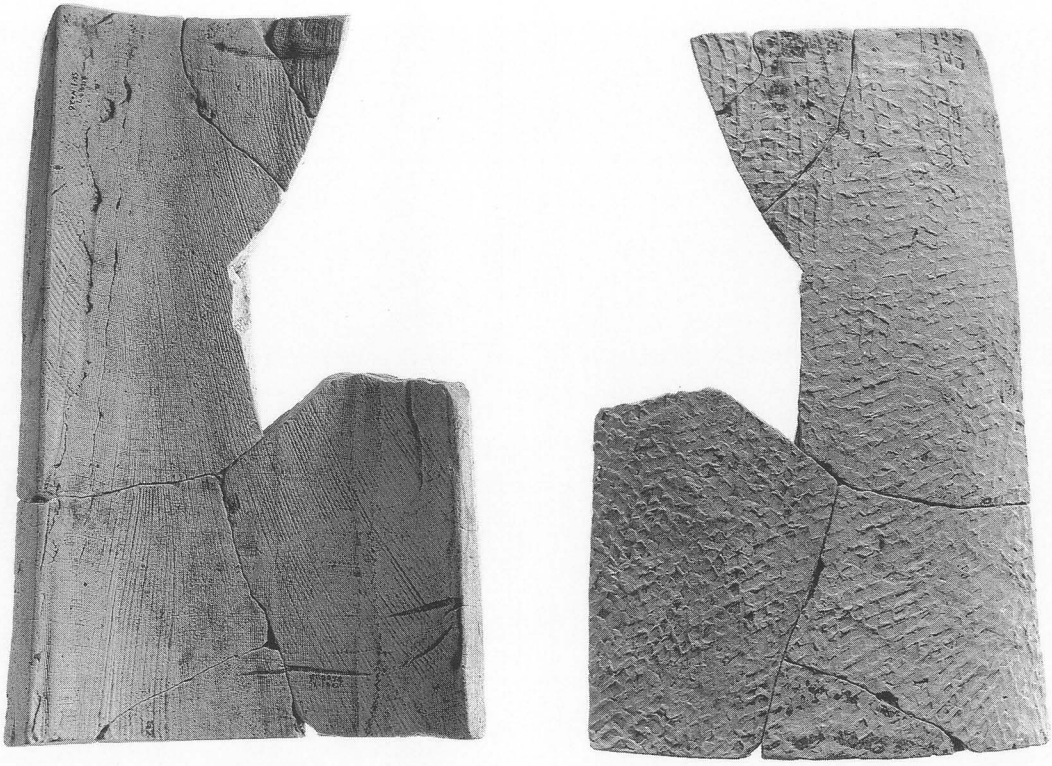


24

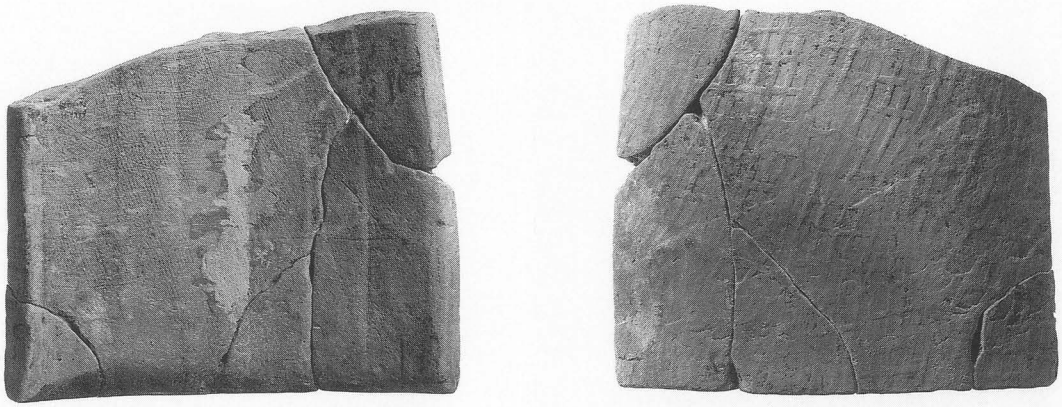


22

1．ＳＸ１出土遺物②



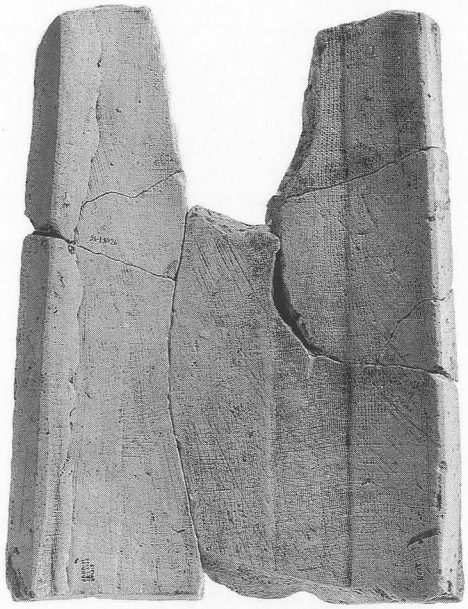
25



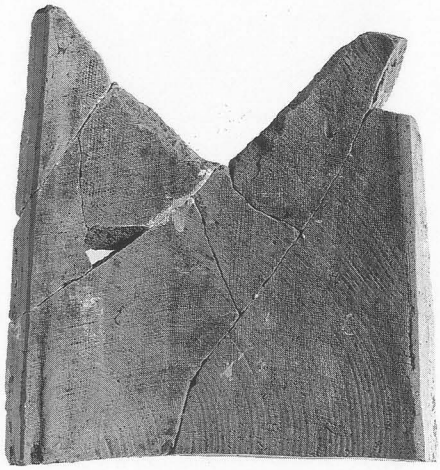
26

1．ＳＸ１出土遺物③

27



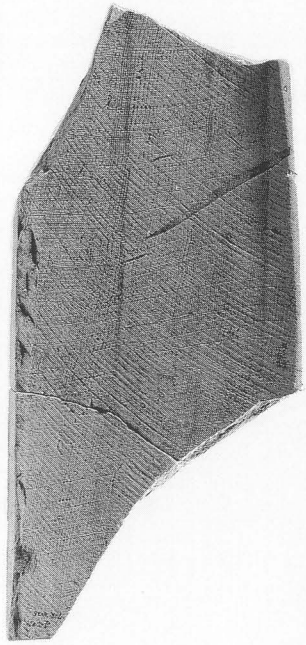
29



30

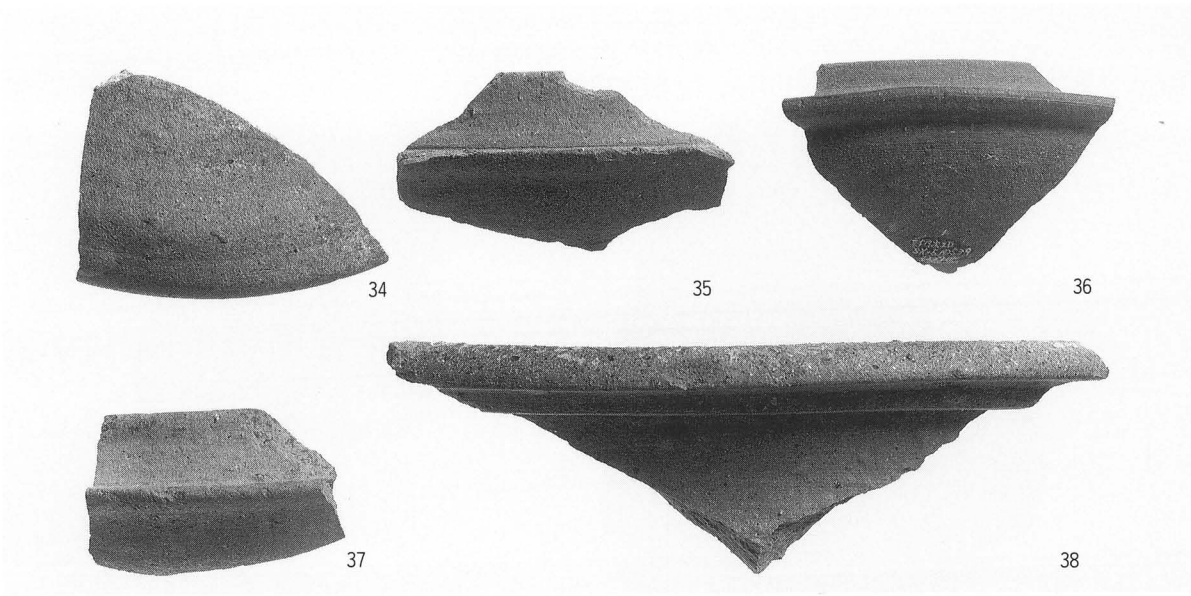
1．ＳＸ１出土遺物④

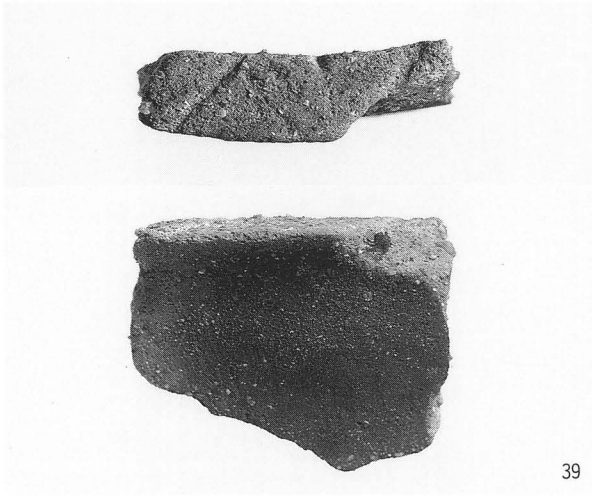
31



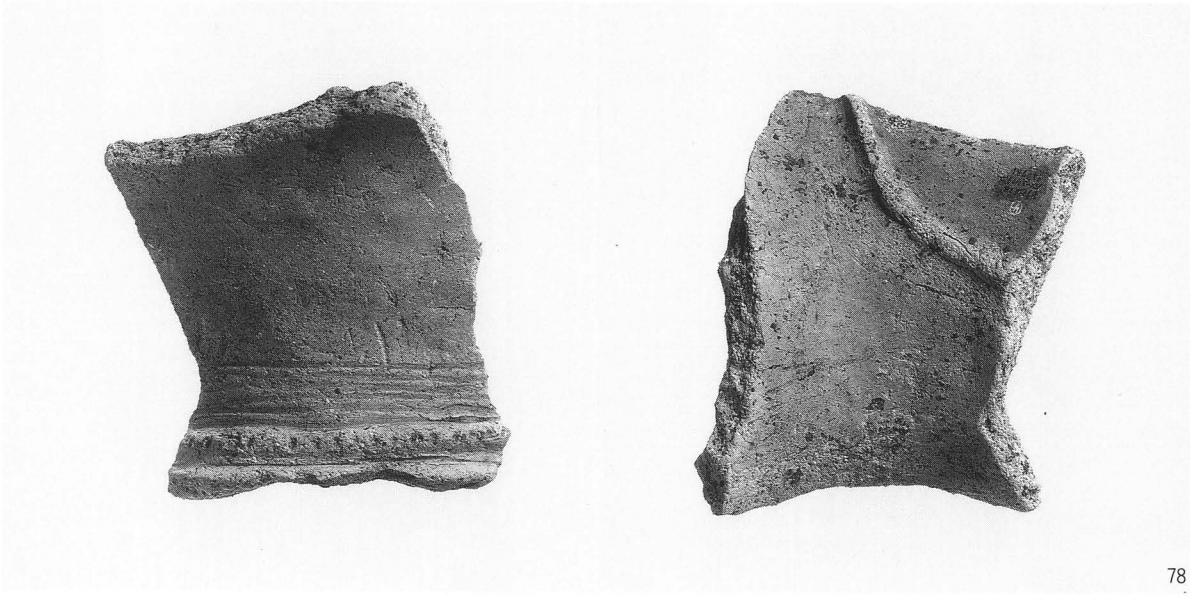
33

1．ＳＸ１出土遺物⑤





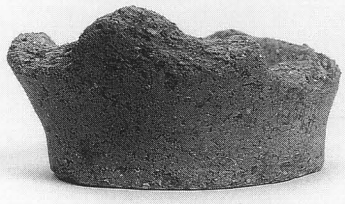
1．ＳＸ１出土遺物⑥（34～39・44）ＳＫ19出土遺物（58・60・61）ＳＫ22出土遺物（72）



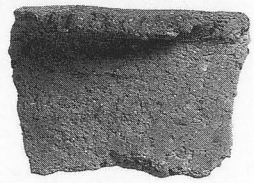
1．ＳＫ２出土遺物（73～75）ＳＫ６出土遺物（77・78）

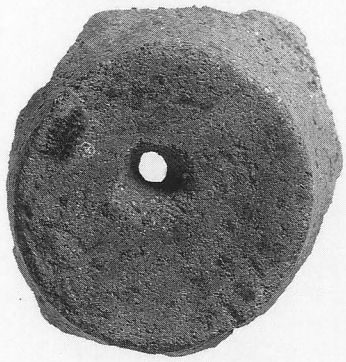
79

82



84

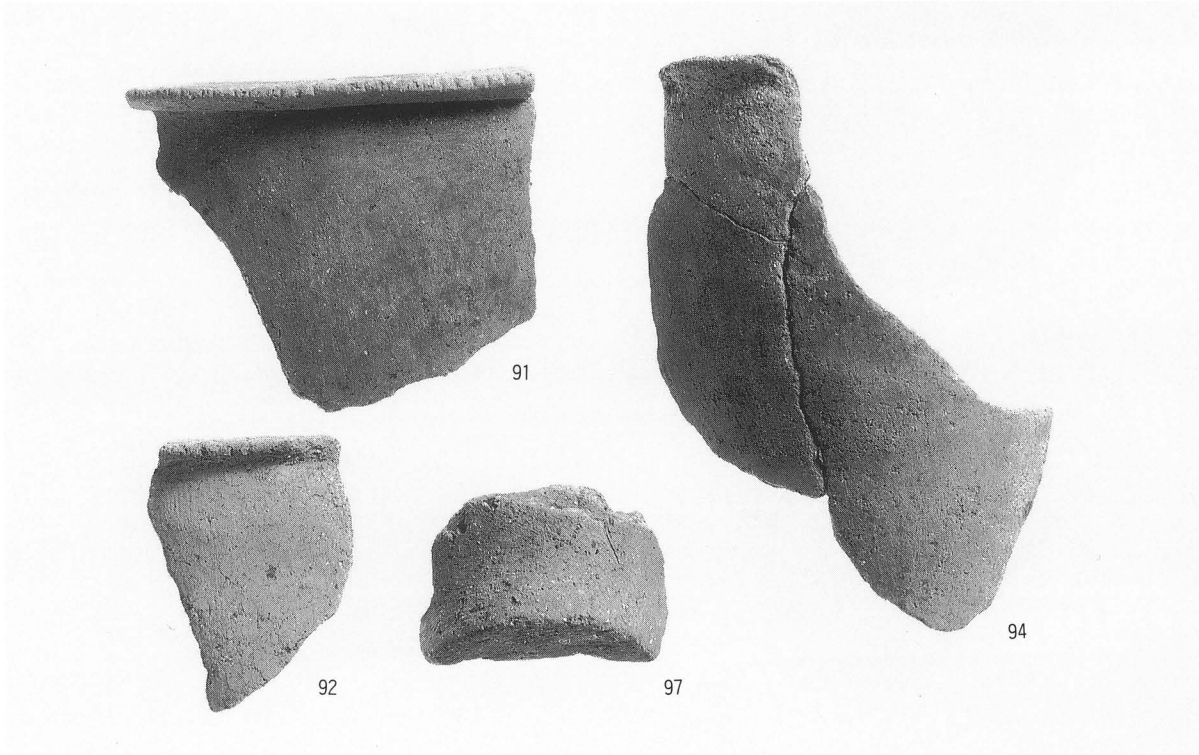

88


81

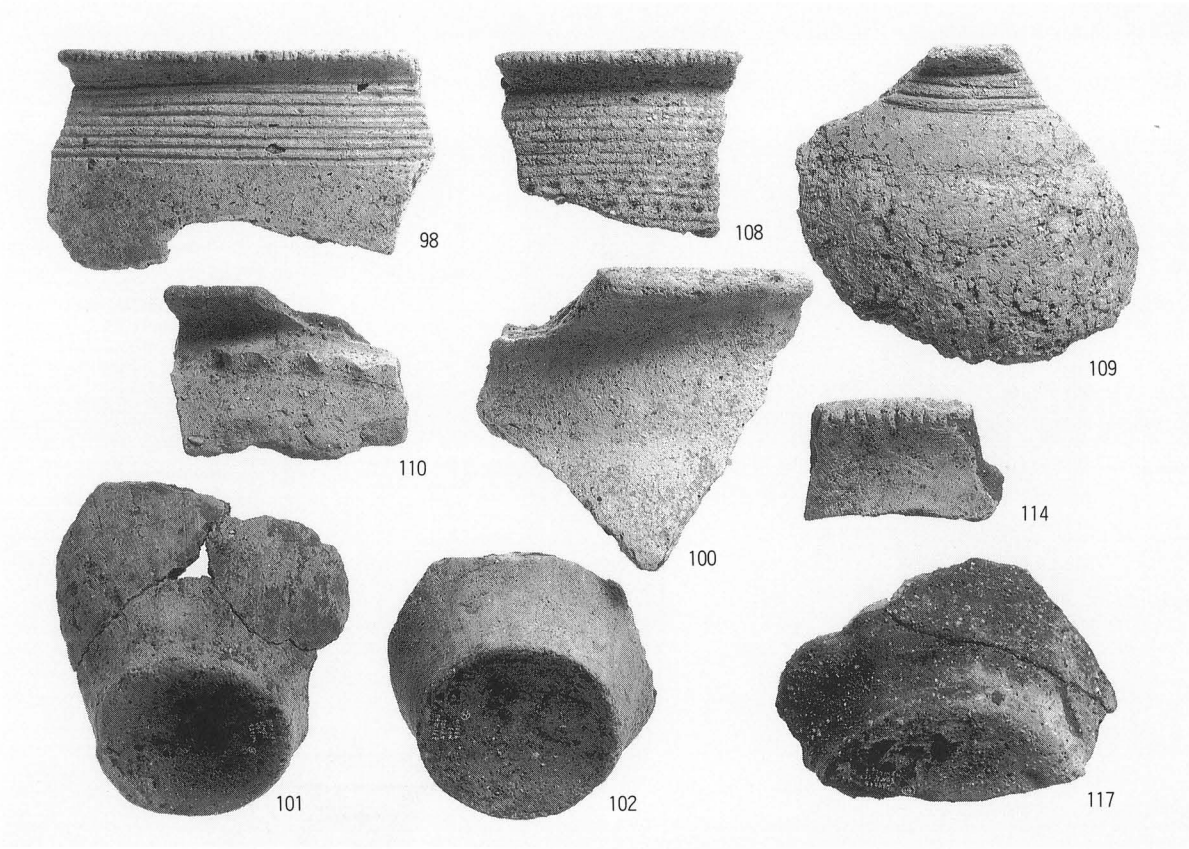
89

83

1．ＳＫ８出土遺物（79・81）ＳＫ10出土遺物（82・83）ＳＫ11出土遺物（84）
ＳＫ13出土遺物（88）ＳＫ14出土遺物（89）

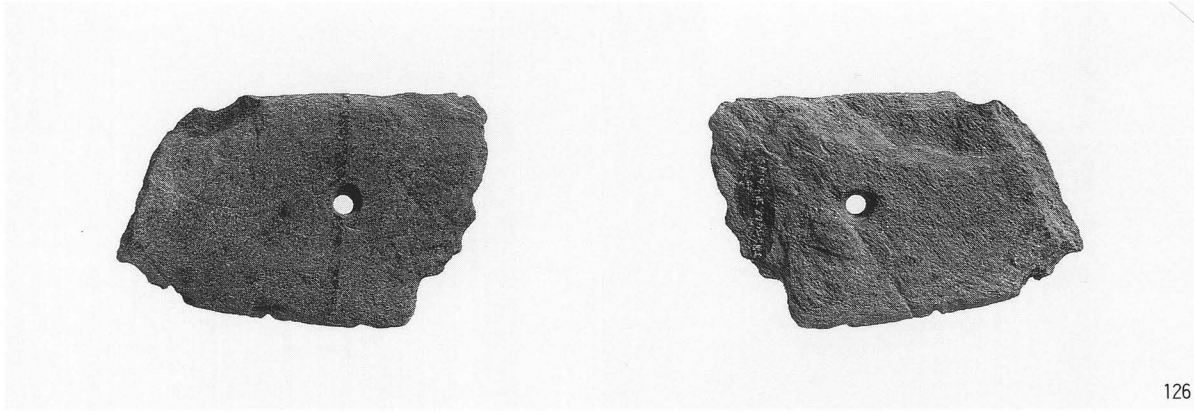


1．ＳＫ18出土遺物

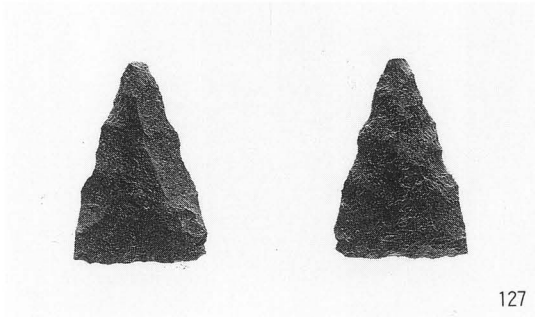


1．ＳＰ82出土遺物（98・100）ＳＰ155出土遺物（101・102）包含層出土遺物①（108～110・114・117）ＳＫ32出土遺物（122・123）

125



126



127

1．包含層出土遺物②

報告書抄録

ふりがな	きしはいじ　だいじゅうくじちょうさ
書名	来住廃寺　―第19次調査―
副書名	
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第56集
編著者名	宮内慎一・水本完児
編集機関	財団法人　松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
所在地	〒791　松山市南斎院町乙67番地6　Tel 089―923―6363
発行年月日	西暦1996年6月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東径 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
来住廃寺(きしはいじ)19次	愛媛県(えひめけん)松山市(まつやまし) 来住町(きしまち)833・844・845	38201		33° 51′ 59″	132° 48′ 26″	19920407～ 19930131	1,863.95	専用住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
来住廃寺19次	官衙 集落	弥生 古墳 古代 中世	回廊状遺構 門 柵列 掘立柱建物址 土坑、溝	弥生土器、土師器 須恵器、瓦、石器	古代の官衙関連遺構の検出

松山市文化財調査報告書　第56集

来住廃寺　—第19次調査—

平成８年６月20日　　発行

編　集　松山市教育委員会

発　行　〒790　松山市二番町４丁目７－２
TEL (089) ９４８－６６０５
財団法人　松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791　松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) ９２３－６３６３

印　刷　明星印刷工業株式会社
〒790　松山市土居田町500番地
TEL (089) ９７１－７１１１